

# 庚壇遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集



かのえ　だん

# 庚壇遺跡

## 発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集

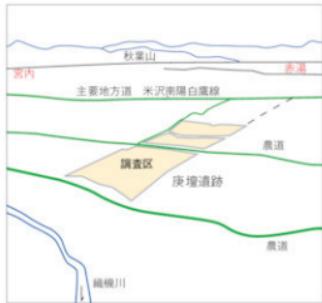
平成19年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





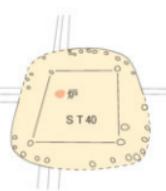
庚塙遺跡近景（西から）



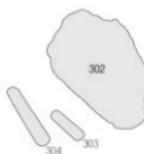
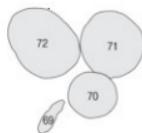
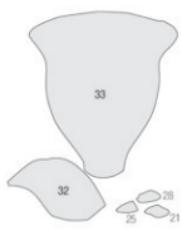
現在の織機川と飯豊連峰（北東から）



弥生時代  
S T 40竪穴住居跡  
完掘状況（北から）



S T 40竪穴住居跡床面  
地床炉と33出土状況  
(北西から)





古墳時代  
S B44-45櫛立柱建物跡  
完掘状況(西から)



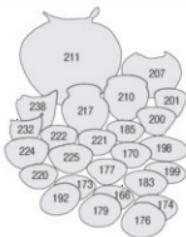
C区Va層、古式土師器  
50出土状況（北から）



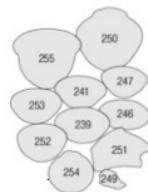
C区包含層出土の古式土師器



奈良・平安時代。S D 56溝跡、遺物出土状況（北から）



S D 56溝跡出土土器



SD 11溝跡出土土器



円面硯 (147)



刻書された黒色土器 (254)

# 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した庚塙遺跡の調査成果をまとめたものです。

庚塙遺跡は、山形県の南部の米沢盆地北東部に位置する南陽市に所在します。付近では稲作・果樹・野菜栽培が盛んに行われており、豊かな田園地帯を形成しています。

今回の発掘調査は、一般国道113号赤湯バイパス改築事業に伴い行われたものです。当該事業に係わる調査は建設工事に沿って行われ、平成14年度の東畑A遺跡を皮切りに、鶴の木館跡、大塚遺跡、西中上遺跡、百刈田遺跡、中落合遺跡、檜原遺跡、庚塙遺跡、天王遺跡、上王作裏遺跡と、平成18年度までの5年間で延べ10遺跡の発掘調査を実施し、それぞれに大きな成果が得られています。

調査では、県内2例目となる弥生時代後期の竪穴住居や、古墳時代前期の高床式の建物、奈良・平安時代の土器が大量に出土する区画溝、近世・近代の墓坑などが検出されました。また、遺物は縄文時代から古墳時代の土器や石器、墨書・刻書き土器を含む奈良・平安時代の土器、近世・近代の陶磁器などが出土しています。庚塙遺跡は、縄文時代から現代に至るまで、断続的ながらも長期にわたり人々の活動の場とされてきたことが解りました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。祖先から伝えられたこれらの文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び子孫へと伝えていくことは、私たちの重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究、教育活動などの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査において御協力頂いた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 山口常夫

本書は、一般国道113号赤湯バイパス改築事業に係る「庚墳遺跡」の発掘調査報告書である。  
既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。  
調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財團法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。  
出土遺物、記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

## 調査要項

遺跡名	庚墳遺跡
遺跡番号	平成8年度登録
所在地	山形県南陽市大字長瀬ほか
事業委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査主体	財團法人山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成17年4月1日～平成18年3月31日 平成18年4月1日～平成19年3月31日
現地調査	平成17年5月11日～平成17年11月1日
調査担当	調査第三課長　渋谷　孝雄 調査研究主幹　長橋　至 主任調査研究員　氏家　信行 主任調査研究員　押切　智紀（調査主任） 調査員　須賀井明子 調査員　山木　巧
整理期間	平成18年4月1日～平成19年3月31日
整理担当	調査研究部長　尾形　與典 調査研究主幹　長橋　至 主任調査研究員　氏家　信行 調査員　須賀井明子（整理主任）
調査指導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室
調査協力	山形県教育庁置賜教育事務所 南陽市教育委員会

# 凡　例

- 1 本文の執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章	押切 智紀・須賀井明子
第Ⅱ章	押切 智紀
第Ⅲ章、第1節	須賀井明子
第Ⅲ章、第2節（1）A・（3）B～D・（4）・（5）	須賀井明子
第Ⅲ章、第2節（1）B	石井 浩幸
第Ⅲ章、第2節（2）A	押切 智紀
第Ⅲ章、第2節（3）A	吉田江美子
第Ⅳ章	パリノ・サーヴェイ株式会社
第Ⅴ章、第1・2節	押切 智紀
第Ⅴ章、第3節	須賀井明子
- 2 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは標高で表す。また、方位は座標北を表す。
- 3 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

S T…竪穴住居跡	E L…炉	E P…遺構内柱穴
S B…掘立柱建物跡	E B…柱穴	
S G…川跡	S D…溝跡	S K…土坑
S X…性格不明遺構	S H…墓坑	S P…ピット
R P…登録土器・土製品	R Q…登録石器・石製品	
- 4 土層断面図の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に掲った。
- 5 発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（順不同・敬称略）

阿子島功、五十嵐一治、大賀克彦、大友儀助、北野博司、須藤隆、野田豊文、三上喜孝、宮本長二郎  
村木志伸、山本崇、吉田歎、吉田秀享
- 6 委託業務は下記のとおりである。

基準点測量	株式会社ケンコン
理化学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
地形・遺構測量・図版編集	株式会社セビアス
遺物実測	株式会社ラング
遺物保存処理	株式会社吉田生物研究所
デジタルトレース及び報告書編集	藤庄印刷株式会社

# 目 次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の概要	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 基本層序	10
III 遺構と遺物	12
1 遺構	12
2 遺物	51
IV 自然科学的分析	93
V 総括	106
1 弥生時代後期の堅穴住居跡について	106
2 山形県内出土の円面鏡について	108
3 庚塙遺跡の成立過程について	118
報告書抄録	卷末

## 表

表1 縄文時代遺物観察表	84	表9 植物珪藻体分析結果	98
表2 弥生時代遺物観察表	84	表10 微細物分析結果	99
表3 古墳時代遺物観察表	85	表11 S T 40出土の種実検出状況	100
表4 須恵器・土師器遺物観察表	86-91	表12 樹種同定結果	102
表5 石器・石製品遺物計測表	92	表13 東北と新潟の弥生後期堅穴住居跡集成	114
表6 木製品・金属製品遺物計測表	92	表14 弥生後期の堅穴住居跡柱穴傾斜角度集計表	115
表7 硅藻分析結果	96	表15 弥生後期の土器編年対応表	116
表8 花粉分析結果	97	表16 山形県内の円面鏡集成	116

## 図 版

第1図 地形分類図.....	3	第38図 S D 8 溝跡.....	47
第2図 道路位置図.....	5	第39図 S K16・17・19・20・23・	
第3図 調査区概要図.....	6	38・39・61・69土坑.....	48
第4図 字限図.....	7	第40図 S H 9 墓坑.....	49
第5図 長瀬村絵図.....	7	第41図 C区北包含層出土遺物分布図.....	50
第6図 庚申塔模式図.....	9	第42図 神文土器.....	62
第7図 地形形成模式図.....	10	第43図 弥生土器.....	63
第8図 基本層序.....	11	第44図 古式土師器.....	64
第9図 道橋配置図.....	18・19	第45図 古式土師器・土製品.....	65
第10図 道橋実測図割付.....	20	第46図 S T 1 壁穴住居跡,	
第11図 C区包含層割付.....	20	S G 2 川跡出土土器 .....	66
第12図 道橋実測図1.....	21	第47図 S G 2 川跡出土土器.....	67
第13図 道橋実測図2.....	22	第48図 S D54・76溝跡出土土器.....	68
第14図 道橋実測図3.....	23	第49図 S D76溝跡出土土器.....	69
第15図 道橋実測図4.....	24	第50図 S D76溝跡出土土器.....	70
第16図 道橋実測図5.....	25	第51図 S D76・56溝跡出土土器.....	71
第17図 道橋実測図6.....	26	第52図 S D56溝跡出土土器.....	72
第18図 道橋実測図7.....	27	第53図 S D56溝跡出土土器.....	73
第19図 道橋実測図8.....	28	第54図 S D56溝跡出土土器.....	74
第20図 道橋実測図9.....	29	第55図 S D56溝跡出土土器.....	75
第21図 道橋実測図10.....	30	第56図 S D56溝跡出土土器.....	76
第22図 道橋実測図11.....	31	第57図 S D11溝跡出土土器.....	77
第23図 S T 40 壁穴住居跡.....	32	第58図 S D11・10・28溝跡出土土器.....	78
第24図 S T 40 壁穴住居跡.....	33	第59図 S D 8 溝跡、S K16・19・20・	
第25図 S T 40 壁穴住居跡.....	34	61・69土坑、道橋外出土土器.....	79
第26図 S T 1 壁穴住居跡.....	35	第60図 石器.....	80
第27図 S B 44 握立柱建物跡.....	36	第61図 石器・石製品.....	81
第28図 S B 45 握立柱建物跡.....	37	第62図 柱材、金属製品.....	82
第29図 S X 42・46 性格不明道橋.....	38	第63図 墨書き・刻書・打ち欠き土器.....	83
第30図 S D36溝跡.....	39	第64図 主要珪藻化石群集の層位分布.....	97
第31図 S D76・54溝跡、S G 2 川跡.....	40	第65図 植物珪酸体群集の層位分布.....	98
第32図 S D76・54溝跡、S G 2 川跡.....	41	第66図 弥生時代後期住居跡位置図.....	110
第33図 S D56溝跡.....	42	第67図 東北・新潟の住居跡集成.....	111
第34図 S D56溝跡.....	43	第68図 東北・新潟の住居跡集成.....	112
第35図 S D11溝跡.....	44	第69図 東北・新潟の住居跡集成.....	113
第36図 S D11溝跡.....	45	第70図 円面観法量分率図.....	117
第37図 S D11・26・31・43溝跡.....	46	第71図 山形県内の円面観編年案.....	117

## 写真図版

- |   |  |
|---|--|
| 卷頭写真 1 道跡近景、現在の織機川と飯豊連峰                                 | 写真図版20 S D 8 溝跡、S H 9・13・14墓坑                    |
| 卷頭写真 2 S T 40堅穴住居跡                                      | 写真図版21 庚申塔                                       |
| 卷頭写真 3 S T 40堅穴住居跡出土土器<br>土錐等、石墨状品、管玉と母岩                | 写真図版22 繩文土器                                      |
| 卷頭写真 4 S B44・45掘立柱建物跡<br>古式土師器出土状況                      | 写真図版23 弥生土器                                      |
| 卷頭写真 5 古式土師器  | 写真図版24 古式土師器                                     |
| 卷頭写真 6 S D56溝跡遺物出土状況                                    | 写真図版25 古式土師器                                     |
| 卷頭写真 7 S D56溝跡出土土器                                      | 写真図版26 S T 1 堅穴住居跡出土土器                           |
| 卷頭写真 8 S D11溝跡出土土器、円面鏡、黒色土器<br>S X46・42性格不明遺構           | 写真図版27 S G 2 川跡出土土器                              |
| 写真図版 1 調査区近景、基本序図                                       | 写真図版28 S G 2 川跡出土土器                              |
| 写真図版 2 A・B区完掘状況とC区完掘の合成写真                               | 写真図版29 S G 2 川跡、S D34溝跡出土土器                      |
| 写真図版 3 C区完掘状況<br>S X46・42性格不明遺構                         | 写真図版30 S D54・76溝跡出土土器                            |
| 写真図版 4 S T 40堅穴式住居跡床面完掘状況・柱穴                            | 写真図版31 S D76溝跡出土土器                               |
| 写真図版 5 S T 40堅穴式住居跡床面・柱穴、地床剖面                           | 写真図版32 S D76溝跡出土土器                               |
| 写真図版 6 S B44掘立柱建物跡完掘状況・柱穴                               | 写真図版33 S D76溝跡出土土器                               |
| 写真図版 7 S B45掘立柱建物跡完掘状況・柱穴                               | 写真図版34 S D76溝跡出土土器                               |
| 写真図版 8 S D36溝跡完掘状況、S K 38・39土坑、<br>S D43溝跡、S G35川跡      | 写真図版35 S D76溝跡出土土器                               |
| 写真図版 9 包含層遺物出土状況  | 写真図版36 S D56溝跡出土土器                               |
| 写真図版10 包含層遺物出土状況  | 写真図版37 S D56溝跡出土土器                               |
| 写真図版11 包含層遺物出土状況  | 写真図版38 S D56溝跡出土土器                               |
| 写真図版12 A・B区完掘状況   | 写真図版39 S D56溝跡出土土器                               |
| 写真図版13 S T 1 堅穴式住居跡完掘、土層断面、遺物出土                         | 写真図版40 S D56溝跡出土土器                               |
| 写真図版14 S D56溝跡遺物出土状況                                    | 写真図版41 S D56溝跡出土土器                               |
| 写真図版15 S D56遺物遺物出土状況、土層断面                               | 写真図版42 S D56溝跡出土土器                               |
| 写真図版16 S D76・54溝跡・S G 2 川跡                              | 写真図版43 S D11溝跡出土土器                               |
| 写真図版17 S D76・54溝跡・S G 2 川跡遺物出土                          | 写真図版44 S D11溝跡出土土器                               |
| 写真図版18 S D11溝跡完掘  | 写真図版45 S D 8・10・27・28溝跡、<br>S K16・20・61・69土坑出土土器 |
| 写真図版19 S D10・27・28・63溝跡、<br>S K16・17・19・20・23・61・69土坑完掘 | 写真図版46 墨書き土器                                     |
|   | 写真図版47 円面鏡、転用鏡、墨書き等、鳥形須恵器、<br>灰釉陶器、金属製品、柱材       |
|   | 写真図版48 石器、石製品                                    |

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯

庚墳遺跡の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による一般国道113号赤湯バイパス改築工事に伴って実施されたものである。事業が開始されるのに伴い、山形県教育委員会が、平成8年、予定路線において埋蔵文化財の有無を確認する遺跡詳細分布調査を実施した。庚墳遺跡はその際に新規登録されたものである。平成16年には、山形県教育委員会が計画路線内に4ヶ所のトレンチを設定し、試掘調査を行った。その結果、テストトレンチ 試掘調査1~4の全てにおいて遺構・遺物が確認されている。遺構は、竪穴住居跡・柱穴・溝跡などが検出され、遺物は土器類や縄文土器が出土している。遺跡範囲は、東西約200m・南北約300mと推定され、縄文時代と平安時代の集落跡であるとの報告が出されている。

これを受け、山形県教育委員会と国土交通省による協議が行われ、上記道路整備事業区内について、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなった。調査は、財團法人山形県埋蔵文化財センターが、国土交通省からの委託を受け、平成17年度に行うこととなった。

## 2 調査の経過

平成17年4月26日、南陽市役所庁舎にて関係機関が一同に会し、百刈田遺跡ほか2遺跡（庚墳遺跡・中落合遺跡）の発掘調査の打ち合わせ会を行った。現地調査は平成17年5月11日から11月1日までの、実働113日間実施し、調査面積は約8500m<sup>2</sup>である。

調査区割は、西端にある水路から南北の農道までをA区、農道から南北の水路までをB区、調査区の区分水路からの東端までをC区と定めた。遺構の位置を正確に記録するため、5m×5m単位のグリッドを設定し、基準点測量を行った。国土座標の平面直角座標第X系： $X = 215820.000$ ・Y グリッド設定 $= -62190.000$ を原点（0-0）とする。原点から西と北に向かってそれぞれに算用数字で順に番号を振り、「26-10」のように表記した。グリッドの帰属は南西隅の杭を基準とする。

調査は、5月11日に発掘器材を搬入し、その後、調査区の範囲と深さを確認する坪掘り、重機による耕作土の除去を実施した。これと平行して遺構検出を行い、遺構の検出状況の記録、遺構精査を行った。調査の進行状況に従って、隨時写真撮影・遺構測量を行っている。

調査の順序として、当初A区・B区・C区の順で、表土除去と面整理を進めていった。しかし、低地にあるC区は水没しやすいため、先行して調査を進めることとした。C区には遺構確認面までの間に包含層が残るために、層ごとに遺物出土地点の記録を行った。遺構を検出した段階でC区全景の測量を兼ねた空中撮影を行っている。その後、B区の精査、A区の精査と調査を進めていった。A・B区の記録は、平板および遺り方測量による。A・B区の調査終盤に、全体の完掘状況の俯瞰撮影を実施した。平成17年10月21日には、現地での調査説明会を開催し、約70名の参加を得た。11月1日、現地調査を終了し、器材撤収を行った。

## II 遺跡の概要

### 1 地理的環境

本遺跡は、山形県南陽市大字長瀬字庚塙ほかに位置する。緯度および経度は、遺跡範囲の中心で、北緯38度3分16秒、東経140度7分32秒である。南陽市は山形県の南部に位置し、米沢盆地の北辺にある。盆地北辺は、北側の鷹戸屋山地・大平山地、東側の大谷地低湿地、南東側の屋代川、南西側の最上川に囲まれている。南陽市の平野部にあたり、北側の大峰山周辺を源とする吉野川や、漆山地区に源がある織機川によって形成された複合扇状地である宮内扇状地が広がっている。宮内扇状地は、宮内南部、漆山南部、梨郷南部、沖郷、赤湯西部の地域に及び、南陽市の平地の大半を占めている。本遺跡は、宮内扇状地に放射状に広がる自然堤防上に立地している。同川の流路の変化は、周辺に住んでいた人々の生活の場まで変えている。

**織機川** この自然堤防を形成していく織機川は上記のように漆山地区北部の矢ノ沢に源を発する。平野部の北側では、支流を併せながら南流し、遺跡の所在する長瀬地区で流路を南西に変え最上川に合流する。川の長さは、約10kmである。また、遺跡の東側には、上無川が南北に流れている。南陽市北部の池黒地区を源とし、沖郷地区で南西側に若干屈曲し、最上川に合流する。川の長さは約7kmで、織機川より若干短い。上記2つの河川は、絶えず流路を変え蛇行しながら南流していた。本遺跡にも両河川の洪水の影響が及んでいると考えられる。

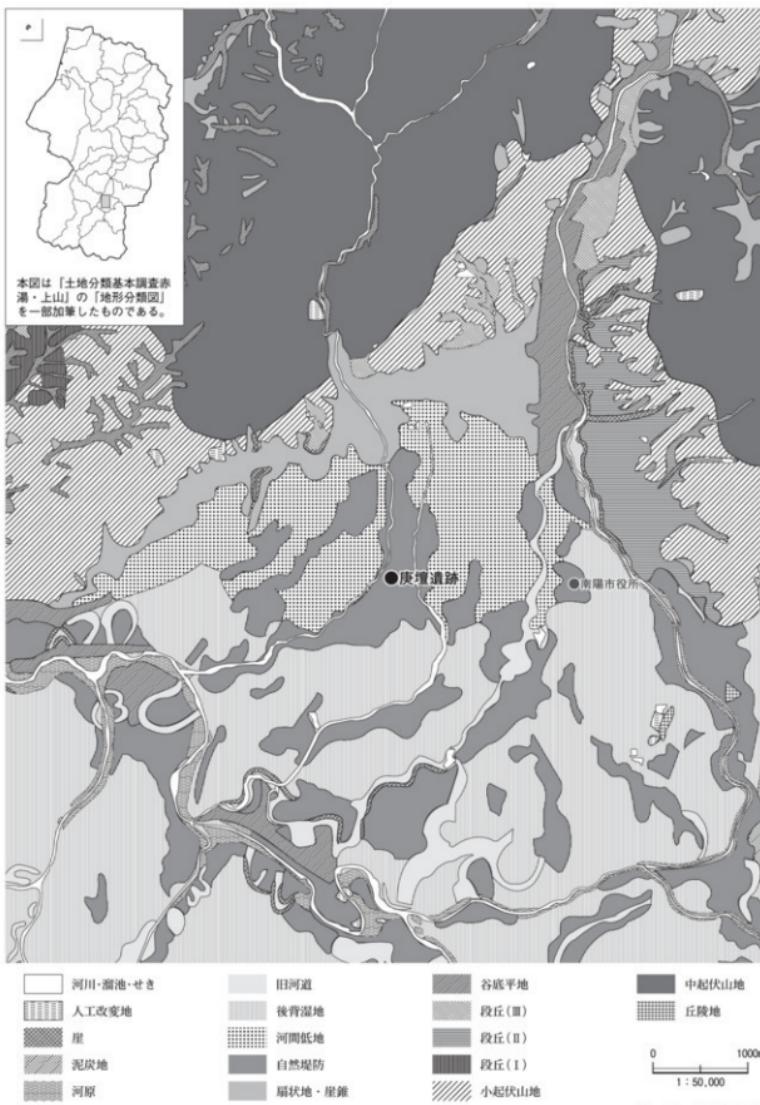
### 2 歴史的環境

南陽市には、平成18年現在で200ヶ所を超える遺跡が確認されている。旧石器時代2、縄文時代85、弥生時代8、古墳時代21、古代67、中世65といった内訳になる。複合遺跡は重複して数えているため、合計は実数より多いが、当該地域が古来人々の生活の場とされてきたことを物語る。この地域の歴史的環境を語るにあたり、考古学的研究の歩み、周辺の遺跡、そして本遺跡の名称「庚塙」という字名の由来となった庚申塔の三つの項目に分けて述べ、総じて本遺跡の歴史的環境を概観する。

#### (1) 考古学的研究の歩み

南陽市の考古学的アプローチに目を向けると、明治期、東京人類学会会員の八木斐三郎による、蒲生田古墳群の遺物紹介（人類学雑誌1900）が最初である。その後、戦後の混乱が一段落した昭和30年代には、山形大学教授、柏倉亮吉によって大野平遺跡（1960）、稲荷森古墳（1961）、平野窓跡（1965）などの調査が次々と行われた。稲荷森古墳（国指定史跡）については、1977年に県史編纂室による測量調査、1978・1979年の県教育委員会による概要把握のための発掘調査など、史跡指定に向けた調査が行われている。

**南陽市史編纂** また、南陽市の市史編纂にかかる調査も挙げられる。これは、①分布調査、②測量調査、③発掘調査に分けられる。①については、1980年以降、多くの市民の協力の下、沖郷地区郡山



第1図 地形分類図

地内位置賜都街関連遺跡調査、吉野川流域公害防除特別地区改良事業区内遺跡分布調査、梨郷地区竹原地内南陽市総合運動公園予定地内分布調査などが行われ、多くの遺跡が発見、登録された。②については、前述の福荷森古墳のほかに、蒲生田1号墳、矢沢城などの調査が行われた。また③は、1980年の中落合遺跡を初めとして、矢の目館跡や久保遺跡など土木工事に伴う緊急発掘調査や、沢口遺跡、大野平遺跡など、学術調査を目的とした発掘も行われている。

その後、沢田遺跡（1984）、月ノ木B遺跡（1987）や植木場一遺跡（1996）などで、山形県教育委員会や、財団法人山形県埋蔵文化財センターによる記録保存のための緊急発掘調査が行われている。また、東畑A遺跡（2002）を皮切りに、国道113号線赤湯バイパスの改築にかかる発掘調査が実施されている。ほかに、百刈田遺跡、鶴ノ木館跡、西中上遺跡、大塚遺跡、中落合遺跡などが調査された。平成17年には県の農地環境整備事業に伴って上野遺跡の調査も行われている。

## （2）周辺の遺跡（第2回）

### 旧石器時代

昭和53年（1978）福荷森古墳調査中に石器1点が出土した。幅広の剥片を使用し、基部周辺には細かい剥離、先端部には主要剥離面と逆方向の剥離が加えられている。東山型ナイフ形石器の特徴を有し、後期旧石器時代の人類の痕跡をうかがい知ることができる。

### 縄文時代

大野平遺跡では、前述した調査により早期から前期初頭にかけての堅穴住居跡が複数検出されている。住居跡の特徴として、平面形が長方形を呈し、柱組みがしっかりとしていることが挙げられる。土器では田戸下層式に併行するものも出土しており、後に字名から須刈田式と命名されている。昭和57年（1982）に調査された久保遺跡では、縄文時代中期の土器が850点出土し、大木7a式から大木10式まで型式的に連続する土器が含まれていた。遺構は堅穴状造構や土坑などが検出された。土器の様相から、長期間集落が営まれていたと考えられる。また中期の住居跡としては、百刈田遺跡第2次調査で、中期後葉のものが6軒検出されている。深鉢形土器と石組からなる複式炉を配置し、平面形は径5mほどの円形を呈している。

### 弥生時代

遺跡数は少ないが、近年の土地開発に伴う発掘調査によって新たに発見されている。特に織機川旧河道沿いの東高堰遺跡（中期中葉）、掛在家遺跡（中期後葉）、塩釜前遺跡（後期）は時期はそれぞれ異なるが同じ自然堤防上に立地している。前述の沢田遺跡でも東高堰遺跡と同様の円田式併行期の土器が出土している。これまで、遺物が出土しても遺構が伴わないため集落の様相が明確ではなかったが、百刈田遺跡第3次調査では15基ほどの再葬墓が検出された。

**再 葬 墓** 葯墓とは、遺体を葬った後、遺骨を甕や壺に入れて小さい墓坑に埋葬する葬法である。同遺跡でも甕や鉢など数点まとめて出土している。体部に同心円文や三角形の文様などを施してお

### 古墳時代

福荷森古墳（国指定史跡）は、全長96mの前方後円墳で、後円径62m、前方部長34m、同先端幅32m、後円部高10m、前方部高5mを測る。後円部に対し、前方部が短く未発達である。



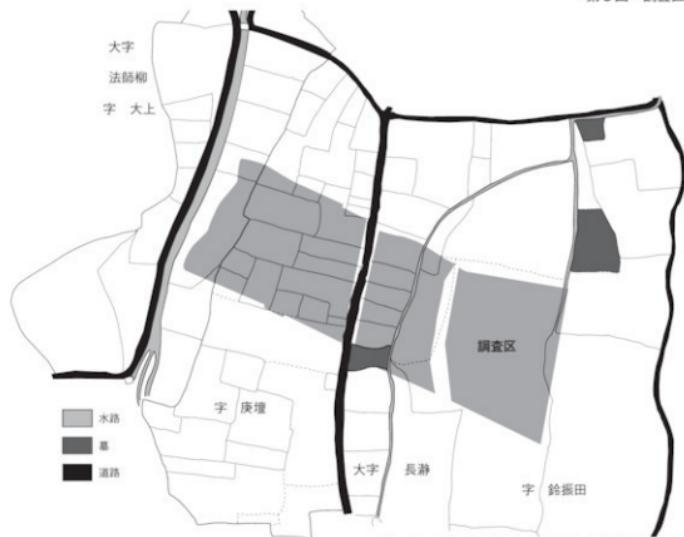
1 広塗	集落跡	縄文～古墳・奈良 ・平安・中近世	32 東六角	集落跡	縄中・古墳・平安	64 猪内城館	船 路	中世
2 柳原	散布地	平安・中世	33 古稀田	散布地	奈良	65 猪内田	散布地	平安
3 軽城山古墳	古墳群	古墳	34 観訪跡	集落跡	縄中・古墳・平安	66 席田尻	散布地	平安
4 天王山古墳	古墳群	古墳	35 矢の日館	船 路	室町	67 泉田館	船 路	中世
5 羽黒堂	散布地	縄文	36 鏡音堂	散布地	縄文・平安	68 宮崎館	船 路	中世
6 前田	散布地	縄文	37 亂生田館	船 路	中世	69 植木場一	船跡外	奈良・平安・室町
7 藤山	集落跡	縄文中期	38 南館船ノ内	散布地	縄文・平安	70 露橋A館	船 路	中世
8 別所A	散布地	平安	39 当時作	散布地	縄文・奈良・平安	71 露橋B館	船 路	中世
9 別所B	散布地	縄文	40 若狭郷屋敷	船 路	中世	72 開根館	船 路	中世
10 鹿田古墳	古墳群	古墳	41 中星敷	船 路	中世	73 大清水	散布地	縄文・平安
11 山田沢A	散布地	平安	42 唐越	散布地	縄文・奈良・平安	74 富貴田	集落跡	縄文・奈良
12 上野	集落跡	縄文・中近世	43 西田	散布地	平安	75 東高堰	散布地	弥生中期・平安
13 南平	散布地	縄文晩期	44 大塚	集落跡	古墳～平安	76 大仏	散布地	縄文後期
14 北町	散布地	縄文前期	45 北前	散布地	縄文	77 天王	散布地	奈良・平安
15 稲荷前	散布地	縄文前期	46 長瀬館	船 路	中世	78 中野	散布地	縄文中期
16 上ノ山	散布地	縄文	47 西中上	集落跡	奈良・平安	79 下八ツ口	散布地	縄文
17 鳥帽子山古墳	古墳群	奈良	48 中落合	集落跡	奈良・平安	80 北徳田	散布地	縄文
18 懸家館	古墳	中世	49 中落合館	船 路	中世	81 大根在家	散布地	平安
19 太子堂	散布地	平安	50 亂生田	集落跡	奈良・奈良	82 四百刈	散布地	縄文
20 東畠A	集落跡	奈良・平安・近世	51 梅ノ木	散布地	奈良・平安	83 高山原	集落跡	縄文前期・平安
21 東畠B	散布地	平安	52 烏貫	集落跡	古墳～平安	84 鶴在家	集落跡	縄文・弥生・奈良
22 手の木	包藏地	縄文・平安	53 肥田	集落跡	奈生・古墳～平安	85 上人作裏	散布地	縄文・平安
23 長岡山	集落跡	旧石器	54 郡山中脇	散布地	奈良・平安	86 清水ノ下	散布地	古墳後期
24 稲荷森古墳	古 墳	古墳前期	55 百刈田	集落跡	縄・弥・古・奈・平	87 瑞釜	集落跡	縄文中期
25 長岡山東	散布地	縄文・平安	56 古星敷	散布地	奈良	88 瑞釜前	散布地	縄文晩期・弥生
26 長岡南森	散布地	縄文中期・古墳	57 許口	集落跡	奈良・平安	89 西高田	散布地	平安
27 中ノ手	散布地	奈良・平安	58 間々ノ上	散布地	奈良	90 割田館	船 路	中世
28 内城館	船 路	中世	59 小山A	散布地	縄文	91 梨郷小館	船 路	中世
29 熊の前	船 路	中世	60 利築屋敷	散布地	奈良・平安	92 松木壇	散布地	平安
30 水上	散布地	奈良・平安	61 前小屋	散布地	縄文	93 梨郷南館	船 路	中世
31 薙の木館	船 路	室町末～江戸初	62 二色根古墳	古墳群	奈良	94 篠庭	散布地	奈良
			63 大星敷	散布地	平安	95 小山西	散布地	平安

第2図 遺跡位置図（国土地理院発行5万分の1地形図「赤湯」を使用）

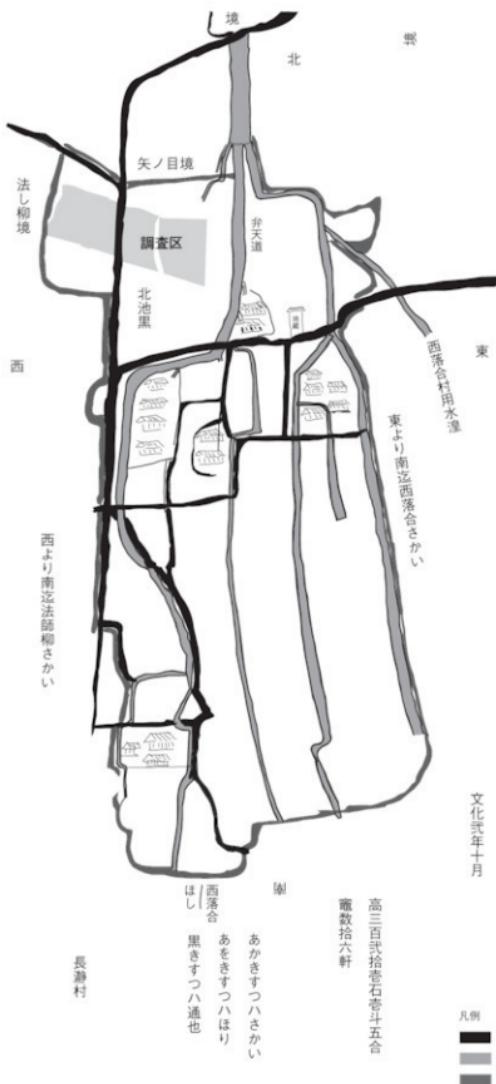
## II 遺跡の概要



第3図 調査区概要図



第4図 字限図 (明治8年長瀬・法師柳字限図を参照)



第5図 長瀬村絵図（文化二年長瀬村絵図を参照）

後円部は3段、前方部は2段築成である。周濠は存在しない。後円部築造以前の層より底部穿孔の土器が出土している。古墳時代前期の古い段階のものである。また、当地域における墓制が分かる資料として、大塚遺跡が挙げられる。周濠が方形に巡る方形周溝墓が15基検出され、赤彩された土器などが出土している。集落の例では、前述の沢田遺跡から住居跡が複数検出されている。いずれからも南小泉式期に該当する土器が出土している。

#### 奈良・平安時代

該期の遺跡は、宮内扇状地内に多く所在している。置賜地方において、古くから「郡山」の地が郡衙に比定されており、官衙関連の遺跡の調査も行われている。西村真次『置賜盆地の古代文化』の中で、高畠町「小郡山」以後に郡衙が遷った所とし、八幡神社周辺の「兵司名(ヒヨウノメ)」を政庁と推定している。関連遺跡の発掘調査は、昭和58年(1983)に沢口遺跡、昭和54年(1984)に沢田遺跡が行われている。前者では奈良時代の包含層、後者では奈良時代の竪穴住居跡が検出されたが、郡衙との結び付きを示す発見はなかった。中落合遺跡は、まさに郡衙関連遺跡と呼ぶことの出来るものである。建物が整然と南北軸に並び、区画施設や道路も検出された。建物跡の柱穴も掘り方が大きく、柱間もほぼ等しい。「未」「上」などの墨書き土器も出土している。また、梨郷地区の平野窯跡では、平安時代の須恵器窯が発見され、調査も行われている。半地下式の登窯が1基、全長11.3m、幅1.3mを測る。出土遺物は須恵器のみであり、その様相から平安時代初期と考えられる。当該期の消費遺跡も多いことからその供給源であったと考えられる。

#### (3) 小字名「庚壇」の由来と庚申塔(第4・6図)

**庚申講** 本遺跡の位置する小字名「庚壇」は、庚申講と関連する。庚申講とは、庚申の日の夜、有志が集まり、無病息災を祈念するものである。これは中国から来た三戸説に基づくものである。<sup>3,4,5</sup> 本来、人間の体内には三匹の虫(三戸)がいるという。庚申の夜、寝ている間に体外に出て、天帝に罪状を伝える。従って、庚申の夜には寝ずに起きて、三戸が脱け出るのを防ぐということを行っていた。これが庚申待といい、集団でこれをするのが庚申講である。また、庚申講が行われる際、石塔の前に祭壇を設け、灯明、お供物、お神酒を供える。以前は土盛りし、壇を築き、その前に祭壇を設けていた。壇を築くのが重労働だったので、江戸期以降は石塔を建て壇の代わりとしていった。なお、庚申壇(後に塔)が築かれるのは、村はずれの村境の地であり、村内に災いが入らないようにする意味合いがある。字「庚壇」は、西の「法師柳」と北の「漆山」に接する地区で、まさに村境の地であることが分かる。

調査区内に置かれていた庚申塔は、調査開始前に、他所に移し保管されている。工事終了後に元の位置に戻されることになっている。庚申塔は4基で、内2基は磨耗しており、銘は判別不能である。残りの2基には、銘が残存しており、「寛政十二年」や「大正四年」の記載がある。



※石材は凝灰岩と思われる。

### 第6回 庚申塔模式図

### 3 基本層序 (第7・8図)

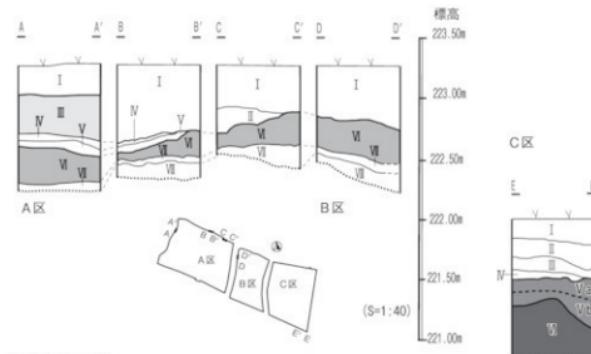
基本層序は、C区西端に位置するSG35川跡を境に様相が異なる。川跡西岸のA・B区側では、粗砂・粘土・シルトの互層を基盤としている。対する東岸のC区では、黒色シルト層を主体とする。A・B区の現況は畠地で、桜桃や根菜類の作土により部分的に奈良・平安時代の遺構確認面まで削平されていた。C区は現況が水田のため、耕作に伴う擾乱が少ないと考えられる。C区の標高は、隣接するB区と比べ1.3mほど低いが、古墳時代以前の層が遺存していた。SG35川跡は、現在は調査区の西側を流れている織機川の旧河道で、古墳時代以降幾度か洪水などの影響を受け、流路を西へと移動したと推測される。<sup>1)</sup>

C区のI・II層は水田によるもので、近世の陶磁器や平安時代の須恵器なども含んでいる。III層は粗砂の堆積層で、南東部を除く広い範囲で確認された。古式土師器や石器なども含む。IV層は均質な粘土層で、薄く堆積する。V層は風化した白色細礫を大量に含む黒色シルト層である。土壤分析から、河畔および湿地のような環境で堆積したものということが分かっている。Va層とVb層 V層は、混入物や白色細粒粒子の大きさにより、さらに細分される。Va層上層からは古式土師器・弥生時代後期の土器が、Vb層からは縄文時代中期の土器が出土している。VI層は、粘性のある粗砂である。この層から下は遺物を包含しない。V層よりも古い層はいずれも西側に向かって落ち込んでおり、旧河川の影響がうかがわれる。織機川が西へ移動するに従って、A・B区側は自然堤防上の微高地となり、反面C区側は後背湿地となり湿潤化したと推測される。

A・B区のI・II層は耕作土である。III層の粗砂中に近世以降の墓坑が多数確認されている。A区西側で確認されるIV・V層は西に向かい傾斜堆積する。やや粘性が強い。VI層は粗砂で、奈良・平安時代の遺構確認面である。その下には薄くVII層の粘土を挟み、VIII層のシルト層となる。第7図に示したように、基本層全体が西側に向て傾斜して堆積しており、同じ標高でも西側の方がより若い堆積層であることが分かる。



第7図 地形形成模式図



## A・B区基本層序

I	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	シルト粗砂混 果樹園耕作土
II	2.5Y3/1 黒褐	シルト粗砂混 小円礫を多く含む（根による擾乱）
III	10Y5/4 にぶい黄褐	粗砂 均質 やや縮まりあり
IV	10Y3/1 オリーブ黒	粘土 粘性強い
V	2.5Y4/1 黄灰	シルト質微砂 粘性あり
VI	10Y5/4 にぶい黄褐	粗砂 ほぼ均質 縮まり弱い
VII	10Y3/1 オリーブ黒	粘土 粘性あり 全体に層が薄い
VIII	2.5Y4/1 黄灰	シルト質微砂 粘性・縮まりあり

近世

奈良・平安時代

## C区基本層序

I	2.5Y3/3 暗オリーブ褐	シルト粗砂混 水田耕作土
II	2.5Y3/1 黒褐	シルト 小円礫を多く含む 田の床土
III	5Y4/2 灰オリーブ	粗砂 均質 粘性なし やや縮まりあり
IV	10Y3/1 オリーブ黒	粘土 粘性が強く均質
Va	7.5Y2/1 黒色	シルト 白色細礫を大量に含む 粘性・縮まりあり 層上部に古墳時代前期と弥生時代後期の遺物包含
Vb	7.5Y2/1 黑色	シルト 白色細礫を含むがVaより少なく粒子細かい 粗砂混 粘性あり Vaより歯らかい
VI	5Y4/1 灰色	粗砂 均質 縮まり弱い 層下部は粘性強い

古墳時代前期

弥生時代後期

縄文時代中期

第8図 基本層序

## III 遺構と遺物

### 1 遺構

全部で80基余りの遺構が検出された。竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟、性格不明遺構2基、川跡2条、溝跡21条、土坑14基、墓坑22基、柱穴15基などである。遺構密度が最も高いのは、A・B区の農道寄りの部分である。ここには奈良・平安時代の溝跡や土坑、そして近世の墓坑が密集する。C区では、S G35川跡の東岸に沿って、绳文時代の遺構、弥生時代の竪穴住居跡が分布する。

#### (1) 竪穴住居跡

確認された住居はS T 1とS T 40の2軒である。S T 40は弥生時代後期の竪穴式住居跡、S T 1は、平安時代9世纪後半の竪穴式住居跡である。以下、時代の古い順に述べる。

**S T 40**（第23～25図、巻頭写真2、写真図版4・5） 遺構はC区26・27-10・11グリッド（以後Gと略す）に位置し、Va層中で検出された。遺存状態は良くない。確認面から10cm程度の掘り込みしかなく、さらに西側部分の壁は確認できなかった。平面形は、四隅のほか辺の中間も若干膨らむ胴張隅丸方形を呈する。規模は、南北505cm、東西550cmである。炉は、住居内のやや北寄りに位置し、地面を掘り込んだ地床炉である。形状は梢円形で、長軸約50cm、深さは10cmを測る。炉内の焼上から、動物の微細な骨片が検出された。主柱穴は4本確認され、直径20～30cm、深さ15～35cmを測る。主柱は、住居の中心方向に斜めに掘り込まれ、住居内の空間が広く取られている。<sup>2)</sup>また、壁柱穴が28本遺存している。深さはどれも8cm程度で、直径は15～25cmを測る。壁柱穴の途切れる部分は出入口などの施設を表わすのか、単に遺存状態が悪いためなのか不明である。貼床は、覆土よりも赤みのある黒褐色を呈し、しまっている。住居の構築方法は、山形市の向河原遺跡で検出された住居（S T1068）と同じ壁立式であるが、同遺跡の平面形が円形なのに対し、本遺構では胴張隅丸方形である。また、S T1068の住居の炉が中央に位置しているのに対し、やや北寄りに位置するという違いがある（V章1節）。

遺物は小破片150点ほどが出土した。特に弥生時代後期の甕が地床炉の西側に潰れた状態で出土している（33）。この甕は、内面は口縁部付近と胴下部にコゲ、外表面は全体上半にススが顯著で、外面下半部のススは熱により飛ばされている。甕にたっぷりと入れた水分が徐々に蒸発し煮詰まった痕跡と見られ、主に煮込む料理に使用された甕と考えられる（小林正史1999）。そのほか、横位の沈線を引き直下に刺突文を巡らすもの（21）や、壺と見られる口縁部（25・28・32）などが出土している。また、E P19の覆土からは弥生時代中期の甕（19）も見つかった。床面出土の弥生土器甕（33）から本遺構は、弥生時代後期の所産である。

自然科学的分析の結果、地床炉の焼上・貼床・柱穴の土壤から、炭化した4粒のイネ（栽培種）と多数の炭化オニグルミなどが検出されている。

**S T 1**（第26図、写真図版13） 遺構は、A区7・8・12・13Gに位置している。南側は調査

区の外で、北側は耕作時の削平のため欠損が激しい。主柱穴、周溝なども確認できなかった。規模は東西515cmを測る。確認面からの深さは約20cmで、西側がやや深い。覆土の上から1層目の下部で炭化物層が検出され、遺物が少量出土している。柱穴は1基のみ検出された。柱穴の直径は35cm、深さは25cmを測る。位置などから主柱穴ではないと思われる。住居の中央に灰褐色粘土の貼床が敷かれていた。床面出土の須恵器坏（74）から、9世紀後半の所産であると判断される。

9世紀後半

## （2）掘立柱建物跡

C区北側で、桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡を2棟検出した。検出面はVI層だが、元来はVa層を掘り込んで建てられたと考えられるため、地中に埋め込まれた柱の深さは80cm程度と推定される。このことから、高床式の建物と考えるのが妥当と判断した。側柱は全て棟の方に向いており、妻側から見ると柱が「ハ」の字を呈する建物であったと考えられる。この2棟は棟方向が70度近く違うが、比較的近い時期に存在したと思われる。

**S B44**（第27図、巻頭写真4・写真図版6） C区31-13・14Gに位置する。桁行4.6m、梁行3.9mの東西棟である。棟方向はN-83°-Eを測る。柱間寸法は、桁行230cm、梁行390cmで、梁間が広いのが特徴である。柱穴の直径は35~50cm、深さは検出面から35~40cmである。柱根は確認できない。柱痕跡は6本中4本で見つかった。柱痕跡の径は15~20cm程と細く、白色粘土が混入する。E B 4 から土師器片2点が出土した。

**S B45**（第28・62図、巻頭写真4・写真図版7） C区28・29-13・14Gに位置している。

桁行43m、梁行41mの南北棟である。棟方向はN-5°-Eを測る。柱間寸法は210~230cm、梁間390~410cmでS B44と同様の特徴をもつ。柱穴の直径は35~40cm、深さは検出面から30~50cmである。6本全てで柱痕跡が確認でき、内4本から柱根が出土した。柱根の底面が平らに調整されているため、打ち込み式の柱ではなく、地面を掘り込んだ後に柱を差し込んで建てられたと推測される。柱根は、側面が面取りされ、正方形に近い断面形をもつ角材であることが特筆される。遺存幅は105mm程度であるが、腐食が進んでいるため当初はもっと太いものであつた可能性がある。遺物は、全ての柱穴から土師器片が出土しており、特にE B 6 からは土師器窯（49）と同一個体の破片が出土した。古墳時代前期の所産と考えられる。

角材を使用した  
高床式の建物

## （3）性格不明造構

性格不明造構は、S X 42・46の2基が検出された。遺存状態が悪く、形状・掘り込みからは判断できなかつたが、竪穴住居跡の可能性もある。縄文時代の所産である。

**S X42**（第29図、写真図版3） 造構は、C区27-9・10Gに位置している。平面形は不整で、掘り込みも浅い。南東側をS D 36溝跡に斜めに切られている。造構全体の約3分の1が削平されており、規模は長軸が約400cm、短軸が210cm、深さが約10cmを測る。覆土は1層のみで粘性を有する黒色シルトである。底面には、縄文時代中期大木10式の深鉢の破片（15）が散乱していた。この造構は縄文時代中期の所産と考えられる。

**S X46**（第29図、写真図版3） 造構は、C区27-12・13Gに位置している。残存部を見る限り平面形は梢円形で、長軸方向は北である。北東側が削平により検出できなかつたため、本米

の規模は不明である。長軸約450cm、短軸200cm以上の規模である。深さは5cm程度で、造構の遺存状態は良くない。柱穴と溝状（深い部分のみのため楕円形）の落ち込みを検出した。最下層には貼床に似た白色粘土部分を検出した。覆土を掘り下げるとき柱穴が検出される点など、堅穴住居跡を想起させる。地山を若干掘り込んだ所から縄文時代中期大木8a式の深鉢の底部（14）縄文時代中期が出土した。このため、本造構は縄文時代中期の所産であると推測される。

#### （4）川 跡

**S G35**（第19・21図、写真図版2） 遺構は、C区22～25・5～15Gに位置している。北側（上流）と南側は調査区外である。C区の西側4分の1程度を占めている。検出された部分の規模は長さ55m、幅9～16mある。東岸はやや西寄りに蛇行しているが、西岸は検出されない。北端部において重機による深掘り調査を行い、土層の堆積状況と西岸側の範囲調査を試みた。覆土は7層あり、腐植土と砂・シルトが交互に堆積していた。最下層の土壤は黒色シルトで、倒木を大量に含む。深さは80cm程度で、この層が西に向かってさらに深くなっている。B区の遺構確認面より下層に入り込んでいる。川跡の西岸側で新たな河川堆積がありB区以西の地形が形成されたと見られる。S G35の覆土上層は泥炭質である。東側河畔に堆積しているVa層と比べると、やや粘性が強く泥炭化しているなど若干の相違はあるものの、同時に堆積した土層であると判断された（同時異層）。古墳時代にはこのS G35川跡はすでに湿地化していたと考えられる。遺物が出土しないため、トレーナー調査による土層確認にとどまった。

**S G2**（第31図、写真図版16・17） 遺構は、A区9～13・11～22Gに位置している。西に蛇行し調査区を南北に縱断する。北側が上流である。幅は35m～7m、長さは南北が調査区外に接するため51m以上、深さは40～70cmを測る。覆土は2層で、どちらも粗砂である。2層の最深部は酸化して赤く変色している。堆積の状況から、一時的な洪水によるものと推測される。S D54・76溝跡を切り、近世の墓坑や歟によって一部壊されている。遺物は、整理箱に3箱、全て1層目からの出土である。土師器・須恵器・ふいごの羽口など、8世紀末から9世紀後半頃までの遺物が出土しているが、9世紀前半の遺物を含むS D54・76溝跡を切っているため、9世紀半ば以降のものと推測される。

#### （5）溝 跡

溝跡は全部で21条検出された。L字に曲がり蛇行する古墳時代のS D36溝跡、須恵器などの平安時代の遺物を大量に含む直線的なS D11・56・76溝跡、近世の堀跡あるいは水路跡と考えられる底面の平坦なS D8溝跡などである。特に奈良・平安時代の主な溝跡の主軸は、それぞれおおよそN-7°-E（S D10・26・28・63）、N-13°-E（S D11・55・56）、N-40°-E（S D54・76）などの方位にまとめられる。

**S D36**（第30図、写真図版8） C区23～32・5～11G内に位置する。東から南へL字状に屈曲しながら蛇行し、C区中央でS X42を切っている。長さ57m、幅は50～100cm、深さは25cmを測る。中央部分の覆土は3層で、下から黄灰色粘土・灰色粘土・灰褐色粘土の順に堆積していた。Va層を掘り込んでいる。最下層から、古式土師器の破片が数点出土した。

**S D43**（第37図、写真図版8） C区26・27・13Gに位置している。東西方向に走る。Va層

中にて検出された。幅は65cmで、長さは410cm、深さは20cmを測る。覆土は2層、黒褐色細砂・黒色シルトの順に堆積する。底面付近から古式土師器の小破片が出土している。

**S D54**（第31・32図、写真図版16・17） A区7～13-13～21Gに位置する。北東から南西方向に若干蛇行している。S D76を切り、S G 2により切られている。検出規模は長さ約20m、幅55cm、深さ約30cmを測る。断面形は、中位に段をもつ。覆土は2層で、下から灰黄褐色シルト・褐色粗砂である。遺物は、9世紀第1～3四半期のものが少量のみである。

**S D76**（第31・32図、写真図版16・17） A区10～13-16～22Gに位置する。北東から南西方向に蛇行して走る。北側はS D54に切られ、南側はS G 2によって壊されていた。幅は220cm、深さ約30cmを測る。底面は凹凸を呈し、中位に段を持ち、開口部が浅く広がる。覆土は3層で、にぶい黄褐色粗砂・暗褐色微砂・褐色粗砂の順に堆積し、特に2・3層に多くの遺物を含んでいる。9世紀前半の遺物が大半で、墨書き土器・円面硯なども出土している。

**S D56**（第33・34図、写真図版14・15） 遺構は、A区11～14-13～22Gに位置している。南北方向に直線的に走る。遺存状態が良く、遺物が多く出土した。S D11溝跡同様に、團続施設の可能性がある。残長は52m、幅約330cm、深さ約60cmを測る。覆土は4層あり、特に、3層のにぶい黄橙色砂礫層に上器を大量に含んでいた。出土遺物は9世紀前半のものが主で、完形品も多い。概ね9世紀半ばには廃絶した造構と考えられる。他造構と接合する遺物は、S D76溝跡が5点、S D11溝跡が2点出土した。

**S D55**（第33・34図） A区11～110-12Gに位置している。南北方向に直線的に走る。S D56の上層を切っているが、北側は削平のため不明である。長さ8.2m、幅60cm、深さは30cm程度、覆土はにぶい黄橙色粗砂である。出土遺物は9世紀代と考えられる。

**S D11**（第35・36図、写真図版18） B区15～19-12～18Gに位置している。18-13G内で、北から西へ向かって約135度屈曲している。また、A区の13・14-10G内に検出された溝跡の断面も、S D11の一部と見られる。幅は80～240cm、深さは30cmを測る。覆土は4層あり、にぶい黄褐色細砂を主とする。B区の北西部以西を囲む区画溝と思われる。S D11は区画溝の南区画溝辺部で、主体となる建物は調査区の北側に位置していたと推測される。出土遺物は9世紀前半と考えられる。出土量は整理箱に1箱ほどであるが、刻書き土器・墨書き土器・転用硯・打ち欠きされた短頭壺などが出土した。

**S D27**（第35・36図、写真図版19） B区17・18-9～13Gに位置している。南北方向でやや西側に弯曲しながら走る。S D11溝跡の屈曲部分に切られ、以北については不明である。南側はB区南端部の墓域により搅乱を受けている。残存する長さは22m、幅は50cm、深さ6cmを測る。覆土は1層で暗褐色微砂である。出土遺物は、平安時代の遺物が少量である。

**S D63**（第35図、写真図版19） B区17・18-9～11Gに位置している。南北方向に走る。S D28とはほぼ平行に走り、南側でS D27と交差すると考えられる。B区南端部の墓域により搅乱を受けている。残長約11m、幅70cm、深さ8cmを測る。覆土は1層で暗褐色微砂である。

**S D28**（第35・36図、写真図版19） B区16-17-9～13Gに位置する。南北方向に直線的に走る。北側でS D11に切られ、南側は墓域により壊されている。幅80cm、深さ13cmを測る。覆土は1層で暗褐色細砂である。遺物は9世紀代のものが少量出土している。

**S D10**（第37図、写真図版19） B区17・18-16～19Gに位置している。南北方向に直線的に

走る。南側は削平されていた。幅は70~220cm、長さは16m、深さは10cmを測る。覆土は1層で、しまりのある褐色細砂である。SK61・20などの土坑の上層を切っている。出土遺物は9世紀半ば頃のものである。

**S D 26** (第37図) B区20-14~16Gに位置している。南北方向に直線的に走る。幅は120cm、深さは13cmを測る。南北に削平され、8mほどの長さのみ確認された。覆土は1層で、にぶい黄褐色微砂である。出土遺物は平安時代の土器片数点である。

**S D 31** (第37図) B区14・15-9Gに位置する。N-76°-Wで、東西方向に直線的に走る。搅乱のため東西の長さは不明だが、長さ4.6m、幅180cm、深さ45cmある。覆土は、黒褐色粗砂である。9世紀代の遺物が少量出土している。

**S D 8** (第38図、写真図版20) A区1-8-16~24Gに位置する。北東から南西方向にやや近世の溝跡屈曲しつつ流れる。検出された長さ54m、幅約480cm、深さは110cmを測る。断面形が台形で底面が平坦である点などが特徴的である。平安時代の須恵器や16世紀の染付、砥石などが出土しているが、近世の遺物も混じっているため、造構は近世以降の所産である。

## (6) 土 坑

縄文時代の土坑 **S K 38** (第39図、写真図版8) C区27・28-8Gに位置する。平面形は西側がやや張り出す不整形で、断面形は底面からU字状に立ち上がり開口部下で外傾する。規模は長軸が110cm、短軸が90cm、深さが45cmを測る。覆土は、黒色粘土・黒色シルトの順に堆積し、やや粘性が強い。出土遺物は無い。帰属年代を確定するには十分ではないが、確認面がVb層であるため、縄文時代の所産であると考えられる。

**S K 39** (第39図、写真図版8) C区27・28-7・8Gに位置している。平面形はほぼ円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は直径が約100cm、深さが22cmを測る。覆土は1層で粘性のある黒色シルトである。確認面はVb層より下であるが、帰属年代については不明である。

**S K 16** (第39図、写真図版19) B区17-17~18Gに位置する。平面形はやや不整な長方形で、断面は中位に段を持ち開口部で外傾する。長軸方向はN-35°-Eである。規模は長軸130cm、短軸が110cm、深さが45cmを測る。覆土は3層で、暗褐色粗砂・褐色細砂・にぶい黄褐色細砂の順に堆積している。出土遺物は平安時代の土器が数点である。

**S K 17** (第39図、写真図版19) B区17-18Gに位置する。平面形は不整形で、底面はやや凹があり、断面は緩やかに立ち上がって開口部で外傾する。直径180cmほどで、深さ65cmを測る。覆土は灰黄褐色細砂1層である。出土遺物は平安時代の土器が数点である。

**S K 19** (第39図、写真図版19) B区18-18Gに位置する。平面形は梢円形で、断面は逆台形である。長軸方向はN-65°-Wである。長軸100cm、短軸150cm、深さが60cmを測る。覆土は黒褐色シルト質細砂1層である。出土遺物は平安時代の土器が数点である。

**S K 20** (第39図、写真図版19) B区17-15-16Gに位置している。平面形は梢円形で、断面は中位に段を持ち、開口部まで直線的に立ち上がる形である。長軸方向はN-75°-Wである。規模は、長軸が200cm、短軸が150cm、深さが60cmを測る。覆土は3層で、褐色細砂・にぶい黄褐色細砂・褐色細砂の順に堆積する。出土遺物は平安時代の土器が数点である。

**S K 23** (第39図、写真図版19) B区17-18-14Gに位置している。平面形は梢円形で、断面

の立ち上がりは東側が緩やかである。長軸方向はほぼ北を示す。規模は、長軸が100cm、短軸が70cm、深さが20cmを測る。南側の方がやや深くなっている。覆土は1層で、にぶい黄褐色細砂である。平安時代の遺物が数点出土している。

**S K 61** (第39図、写真図版19) B区17-16Gに位置している。平面形は長方形に近く、断面形は逆台形である。規模は、長軸が150cm、短軸が130cmほど、深さが25cmを測る。覆土は1層で、灰黄褐色細砂である。S D 10溝跡に上層を切られている。平安時代の遺物が数点出土した。

**S K 69** (第39図、写真図版19) A区11-15Gに位置している。平面形は梢円形で、断面形は凸レンズ状を呈する。主軸方向はN-30°-Eである。規模は、長軸が90cm、短軸が70cm、深さが10cmを測る。覆土はにぶい黄褐色シルト質微砂1層で、炭化物を多く含む。出土遺物は、非クロコの土師器甕で、底部に木葉痕が確認された。造構は9世紀の所産である。

## (7) 墓 坑

墓坑は、擾乱により破壊されたものを除き22基検出された。その多くが近世以降のもので、掘り込みの浅い土坑墓が多い。しかし、平面形が方形の木棺墓など掘り込みの深いものもある。墓坑の全てが近世以降と見られるため、調査はS H 9のみとし、ほかは平面形と上質・土色の観察をおこなった。墓は明治6年に調査区北東の墓所に集めたとのことだが、それ以前は個人の畠に遺体を埋葬していた。墓域全体の墓の配置については、南北方向の農道に沿いに、A区2ヶ所、B区2ヶ所の4つのまとまりが見られる。特に農道のすぐ脇には掘り込みの深いものが多い。地区の古老の話によれば、農道東側が本家の墓、西側が分家の墓と分けられていた。

**S H 9** (第40図、写真図版20) A区15-15Gに位置する。調査区の制約で、半分しか検出出来なかつたが、掘り方は梢円形で、長軸約180cm、深さ170cmを測る。木棺本体の幅は約100cm、高さは約50cmと考えられる。蓋板と底板の間は最大18cmほどである。遺体の腐蝕に伴い土圧で蓋板が下がつたものと見られる。木棺はマツ材で、幅10~20cmの薄い板材を縦に組み、幅5cm マツ材の木棺程度の角材で抑えてある。木棺内には粘性の強い腐蝕土(油分)と骨片が遺存していた。遺物は出土せず、埋葬時期については不明である。

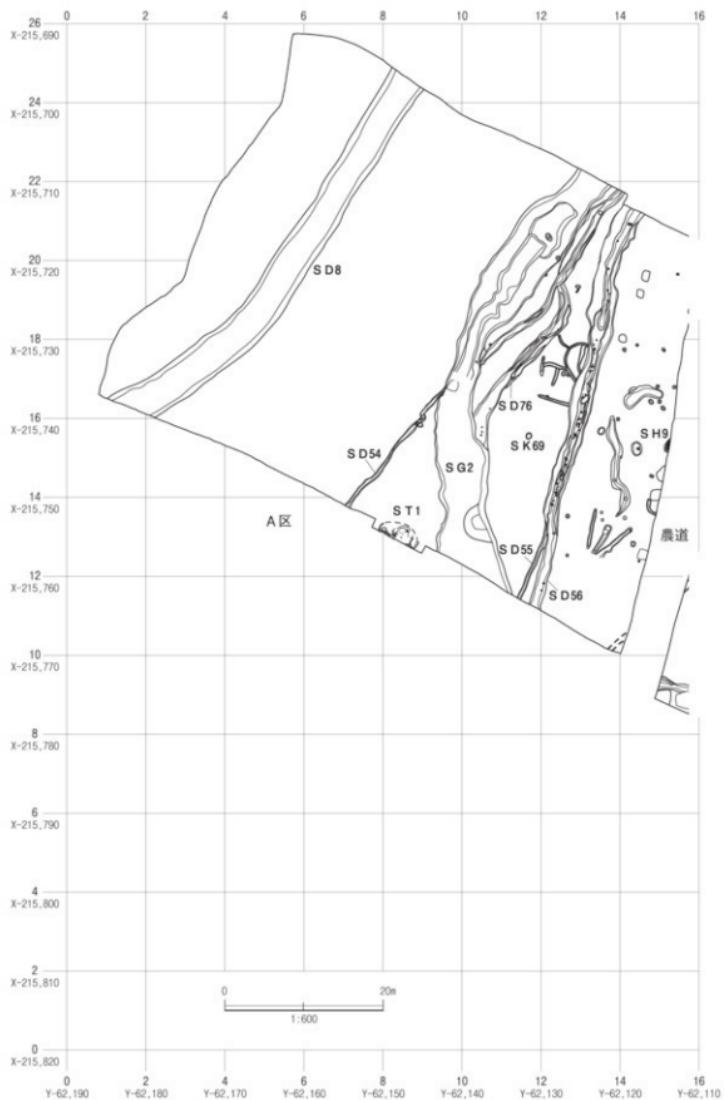
## (8) 包 含 層 (第41図、写真図版9~11)

C区北側には、縄文時代中期~古墳時代前期までの遺物包含層が広がっている。C区基本層序のV層がこれにあたる。土質は黒色シルトに白色細繙を多く含むものであるが、細繙の含有率や粘性の違いにより、さらにVa・Vb層に細分することができる。出土する遺物の年代も違い、Va層の上面からは、古式土師器・弥生土器片などが多数出土する。洪水時に川から流れ込んで溜まつたものと推測される。Vb層最下部からは、縄文時代中期の土器が出土した。

水平分布状況では、古式土師器は27-32-11-14G内に多く出土する。特にS G35東岸から20mほど離れたあたりで、岸と平行して帶状の集中域が観察される。これはさらに北にも広がると推測される。弥生土器は、グリッドY14近辺に横長にと、27-11付近に分布している。古式土師器に比べて破片が細かいのが特徴である。また、縄文時代の土器と石器は24-28-11・12G内の狭い範囲に集中していた。

遺物の分布状況

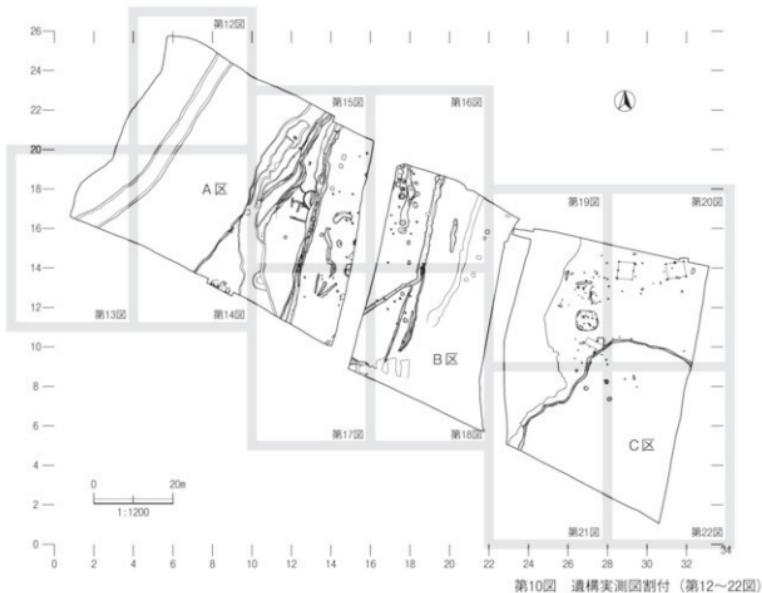
### Ⅲ 造構と造物





第9図 遺構配図

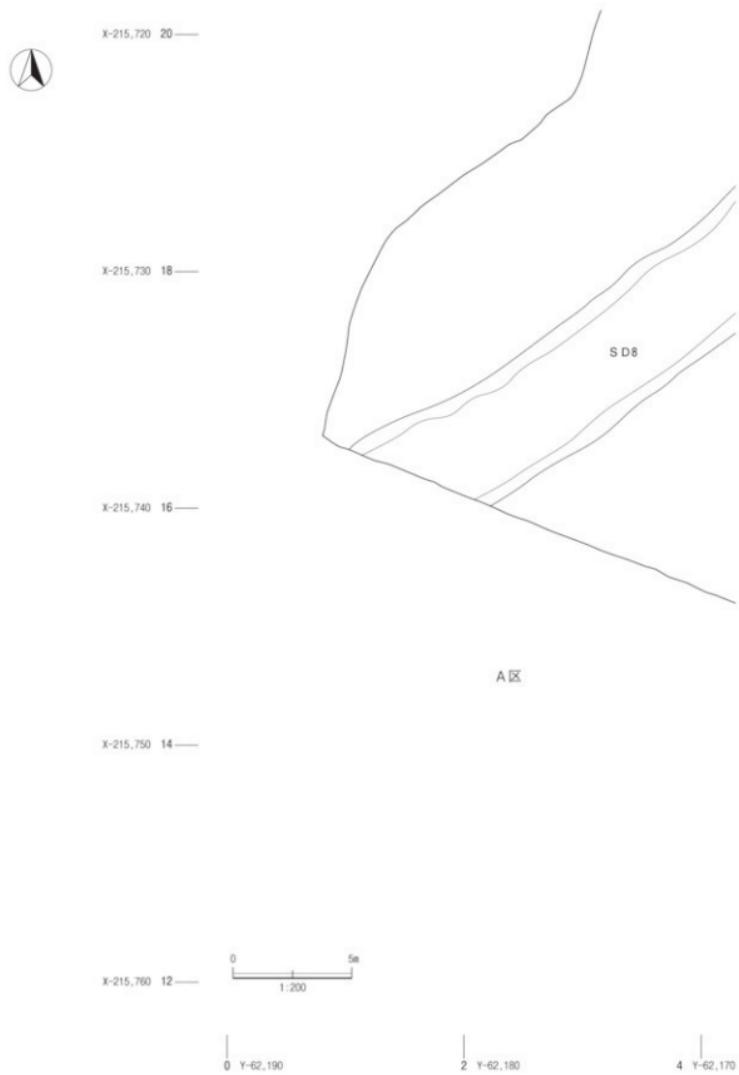
III 造構と造物





第12図 造構実測図1

III 造構と造物



第13図 造構実測図2



第14図 造構実測図3

III 造構と造物



X-216 710 22

| 18 Y-62,100

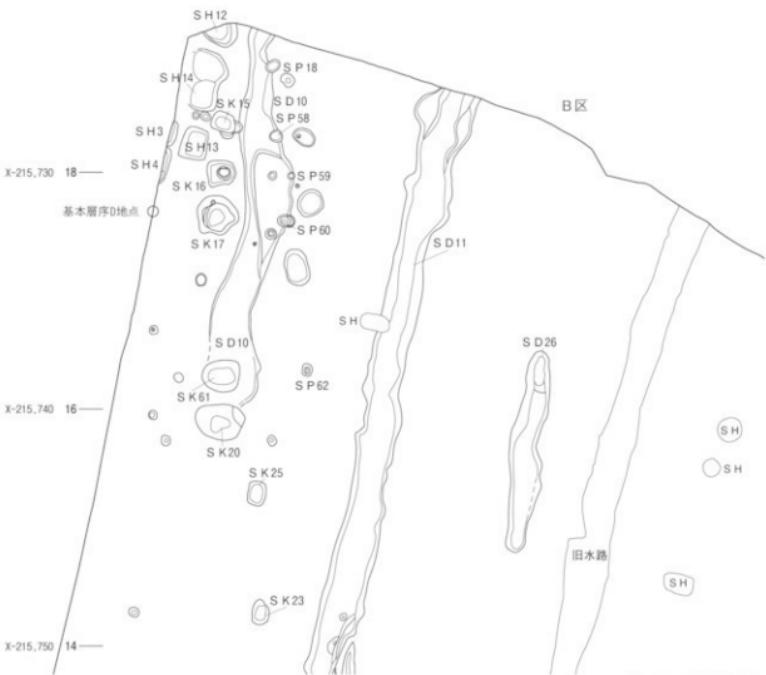
20 Y-62,090

22 Y-62,080

X-215,710 22 —

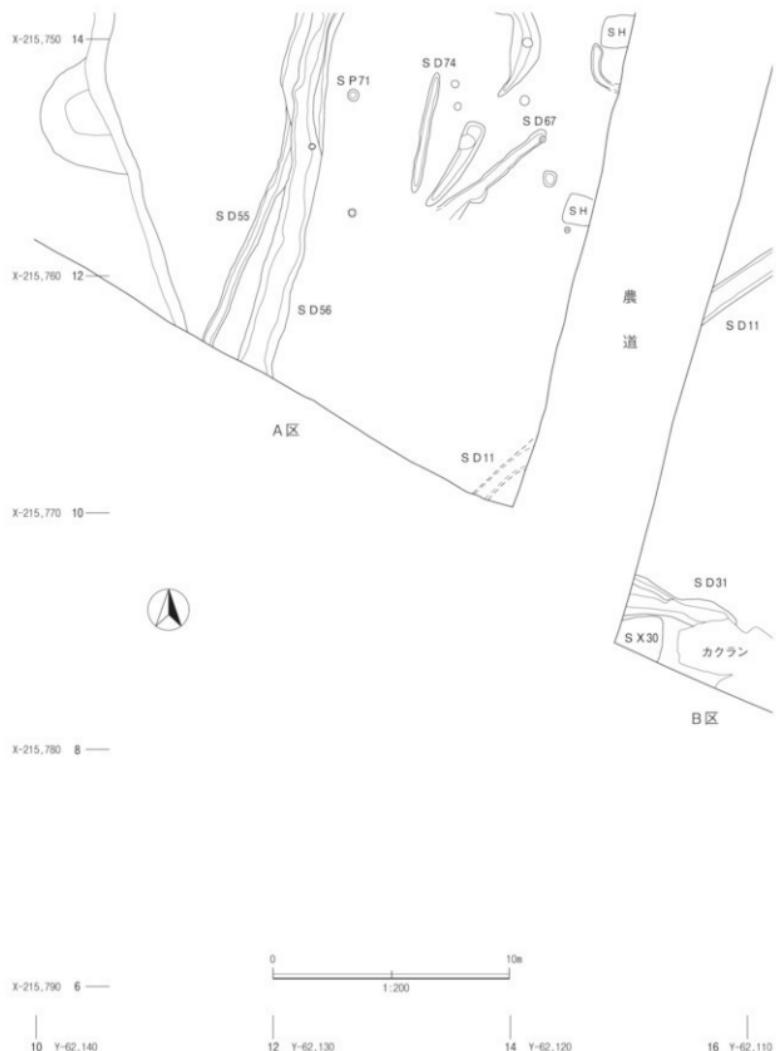
X-215,720 20 —

A horizontal scale bar with tick marks at 0 and 10. Below the scale bar, the label "1:200" is centered.

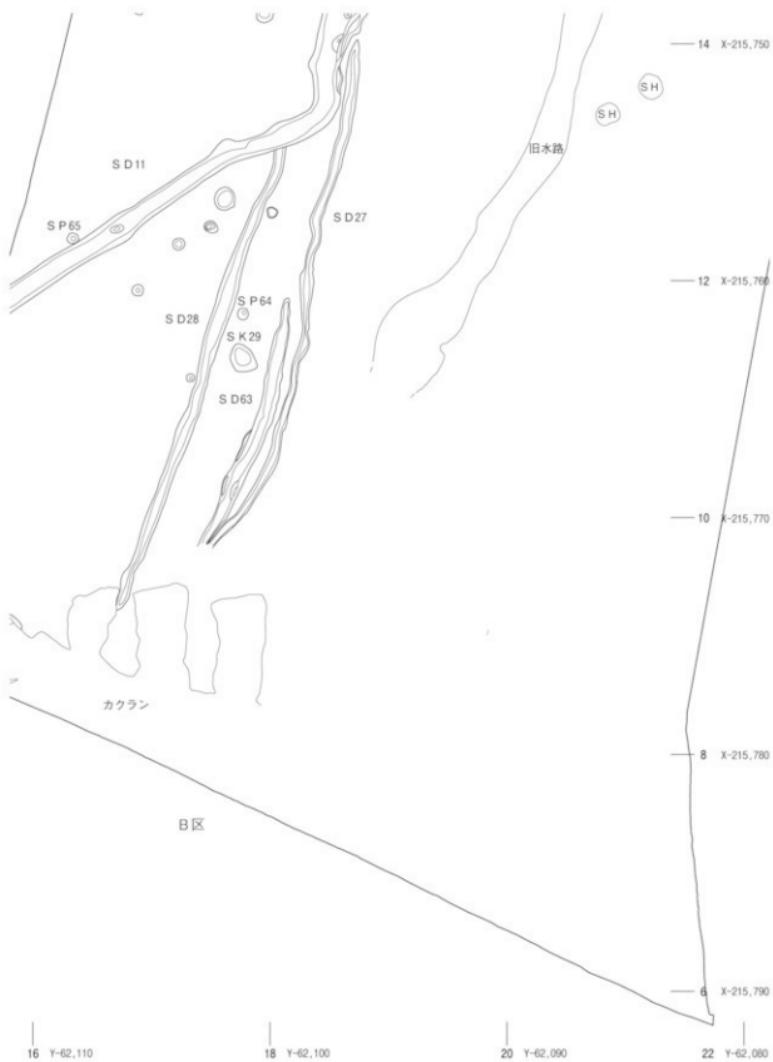


第16図 遺構実測図5

III 造構と造物

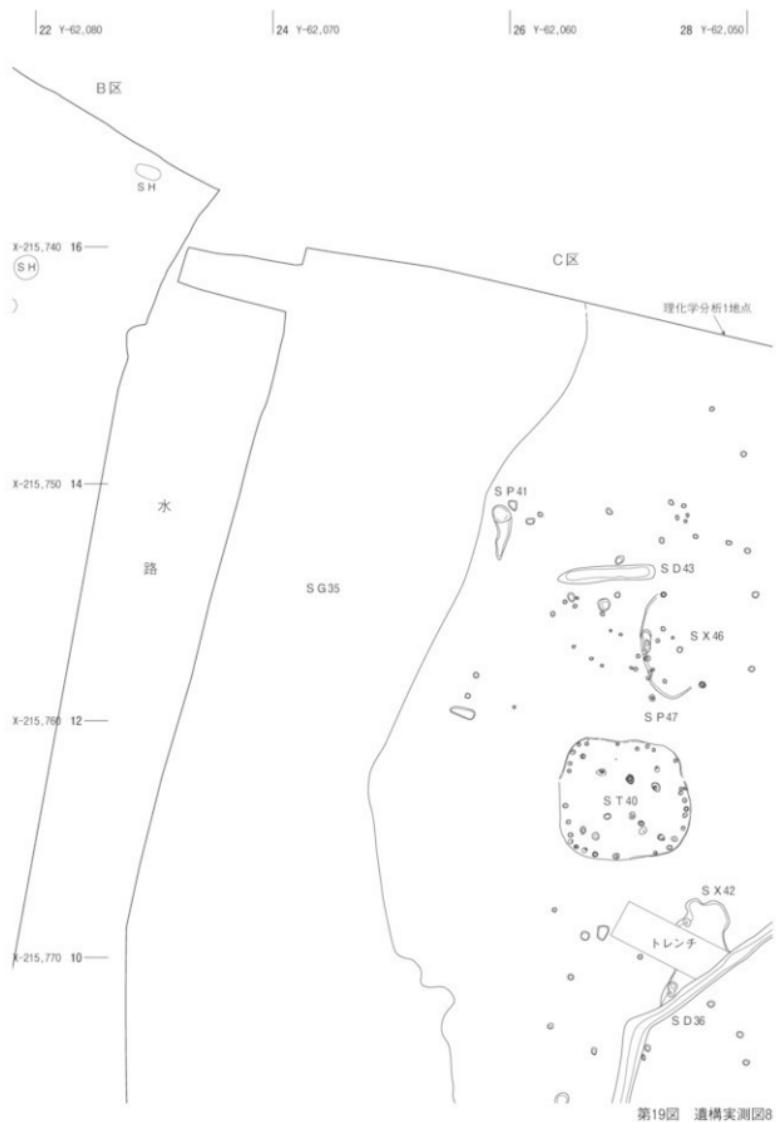


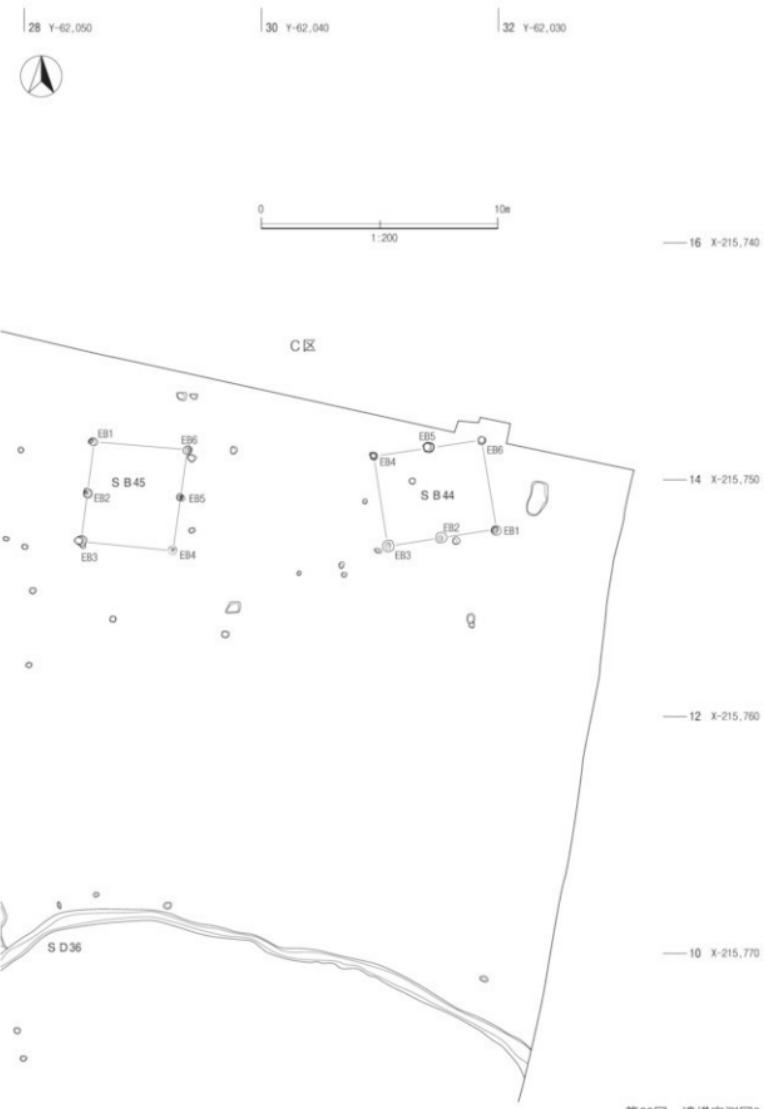
第17図 造構実測図6



第18図 造構実測図7

III 造構と造物





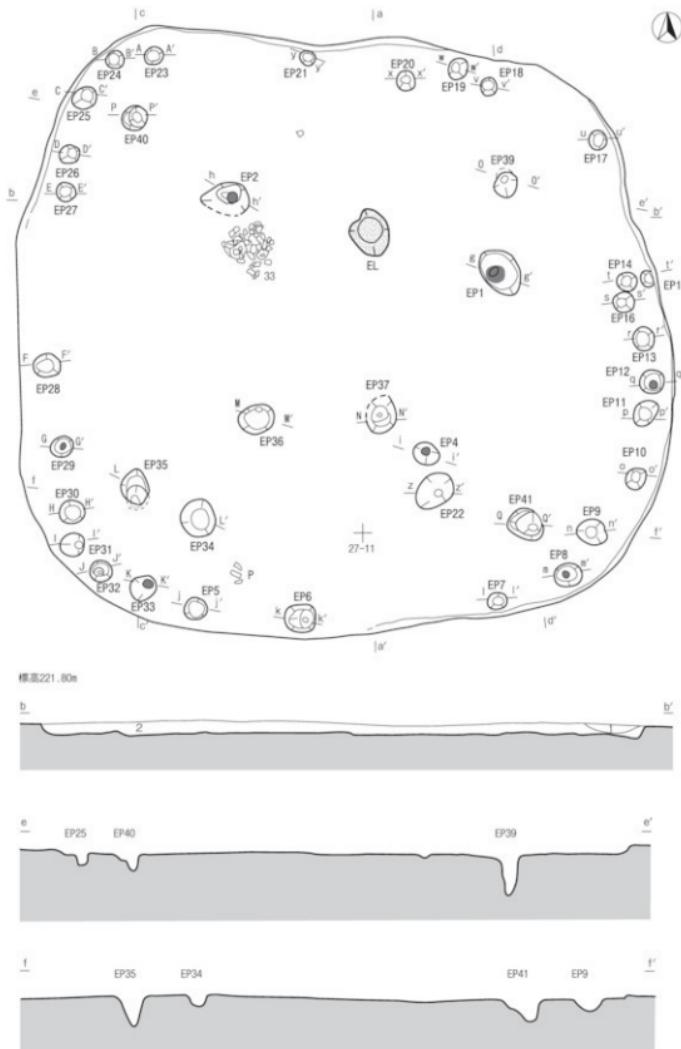
第20図 造構実測図9

III 造構と造物

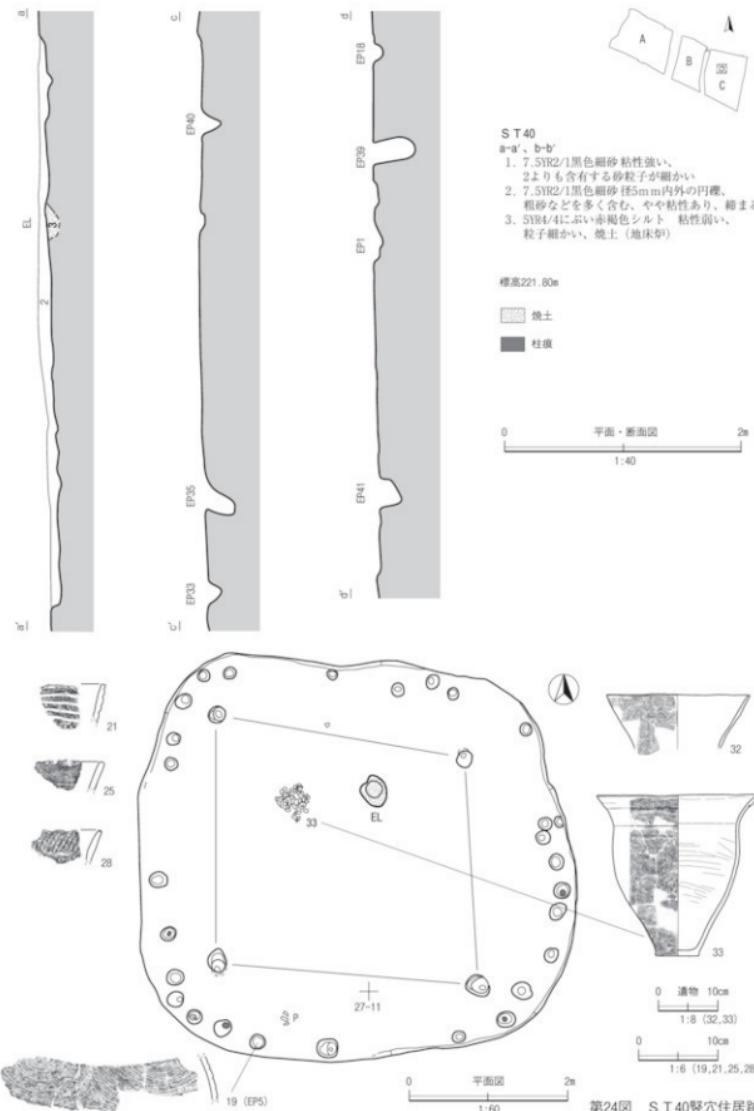




第22図 造構実測図11



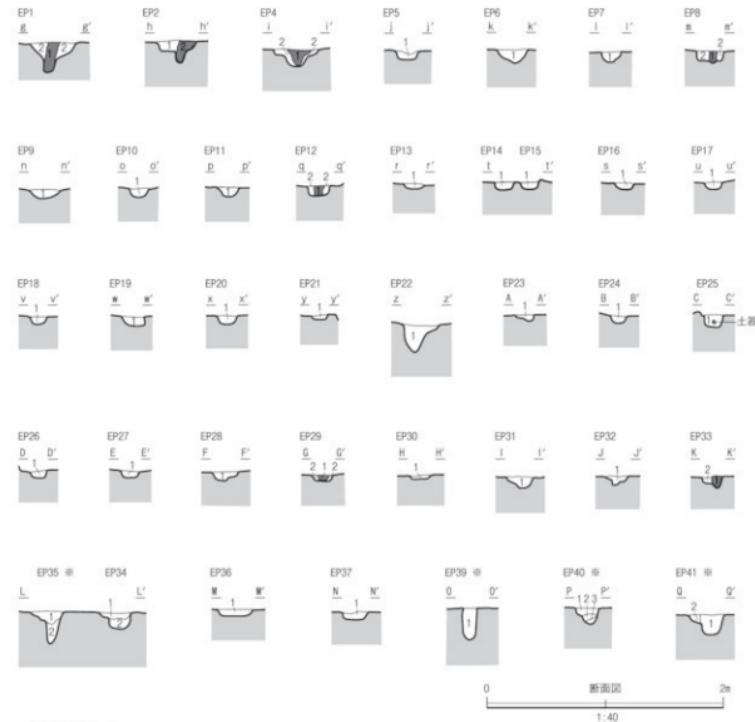
第23図 ST40豎穴住居跡



第24図 S T 40堅穴住居跡

### Ⅲ 造構と遺物

標高221.80m



0 断面図 2m  
1:40

S T 40 EP1~41

$g' \sim i-i'$ 、 $k-k' \sim n-n'$ 、 $p-p'$ 、 $z-z'$ 、 $F-F' \sim K-K'$ 、 $M-M'$ 、 $N-N'$ 、 $Q-Q'$   
1. 10YR2/2褐色シルト 粘化理・細砂など混じる  
2. 10YR2/3黒色シルト 細砂混じる、締まりあり

$j-j'$ 、 $q-q'$ 、 $0-0'$ 、 $P-P'$  粘性あり

1. 10YR1.7/1黒色シルト 細砂混じる、締まりあり  
2. 10YR2/2黒褐色シルト 細砂混じる、粘性弱い  
3. 10YR1.7/1黒色シルト 細砂混じる、締まりあり

$\sigma-\sigma'$ 、 $r-r'$ 、 $s-s'$ 、 $u-u'$ ～ $y-y'$ 、 $A-A' \sim E-E'$

1. 10YR2/3黒褐色シルト 細砂混じる、粘性弱い

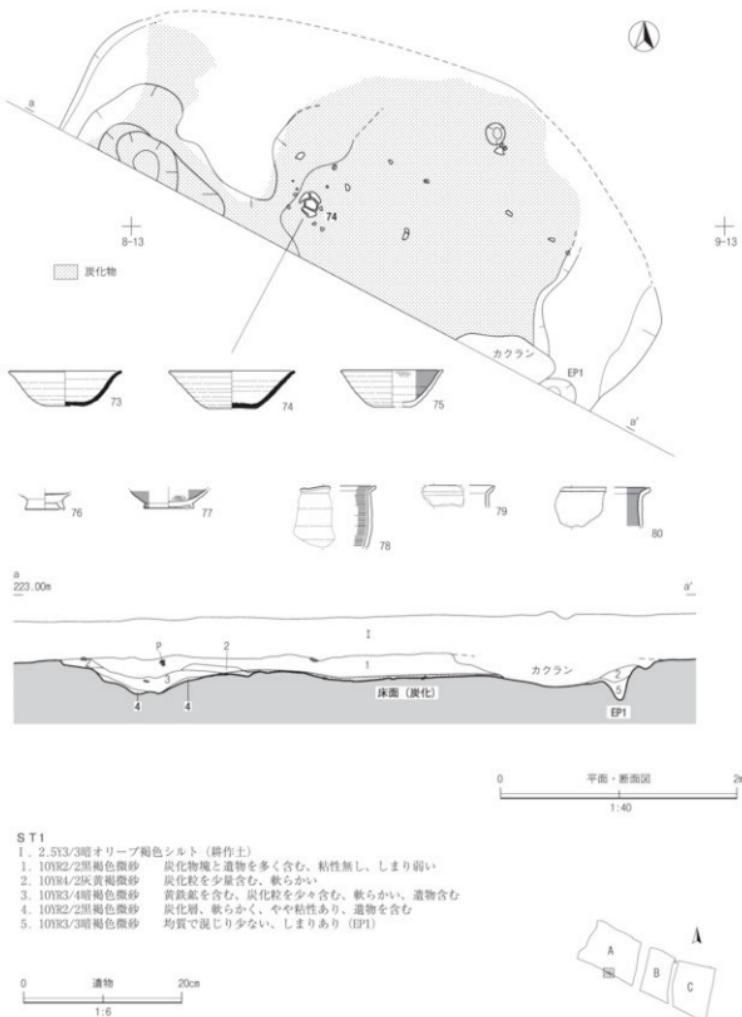
$t-t'$  細砂混じる

1. 10YR2/2黒褐色シルト 粘化理・細砂など混じる  
2. 10YR2/3黒褐色シルト 細砂混じる、締まりあり  
3. 10YR1/1黒色シルト 粘化理混じる、締まりあり

柱 痕

\*印 主柱穴

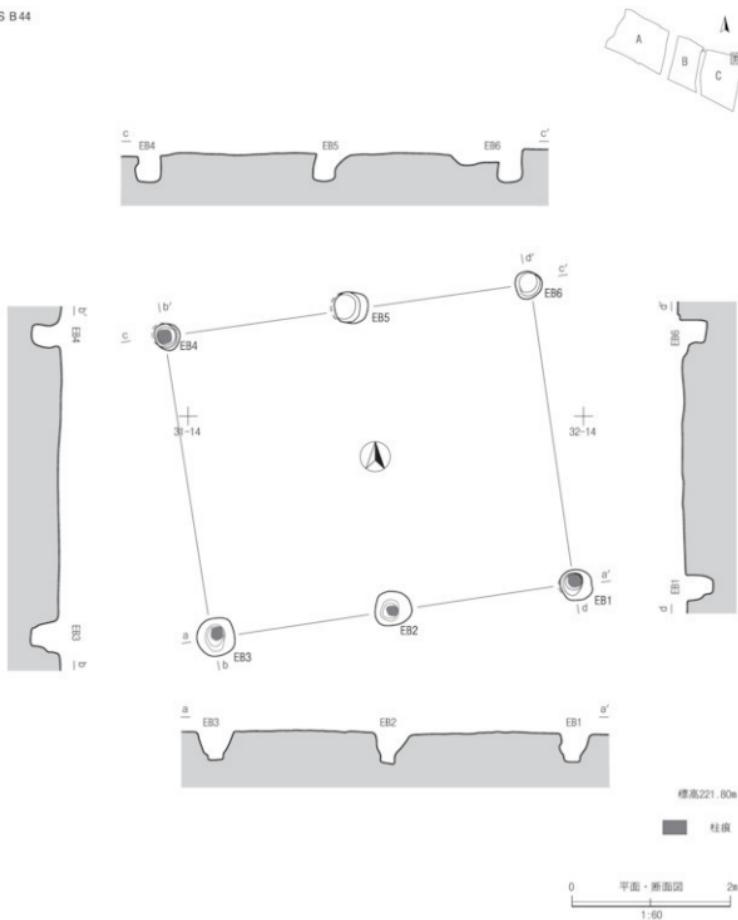
S T 1



第26図 S T 1 壁穴住居跡

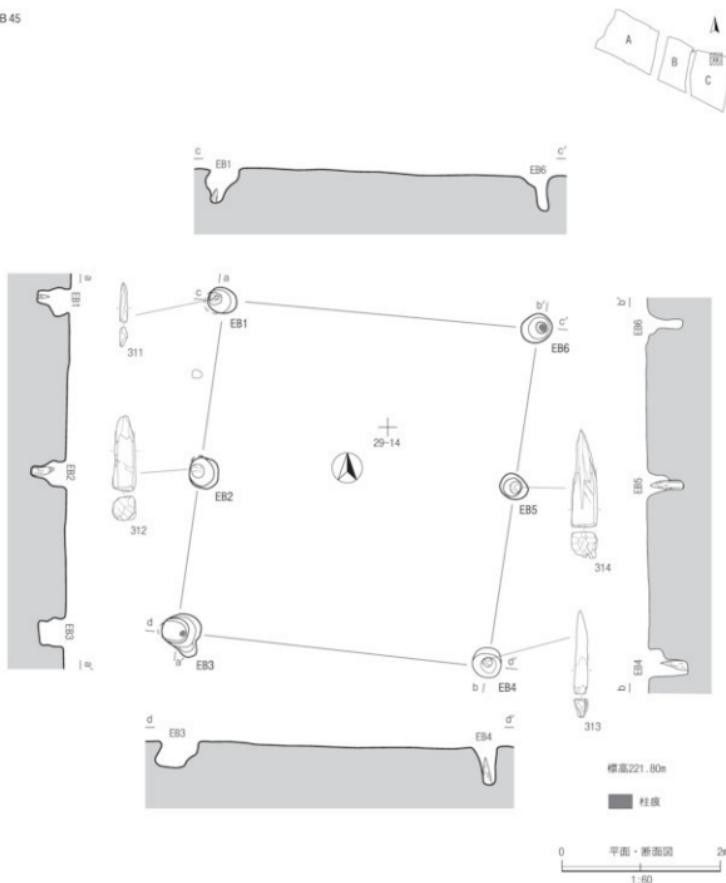
III 造構と造物

S B44



第27図 S B44振立柱建物跡

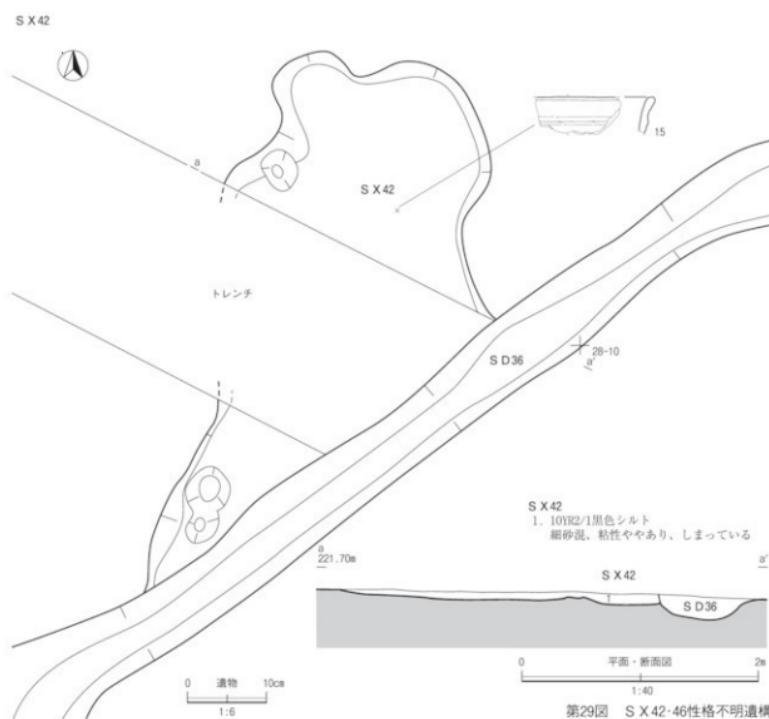
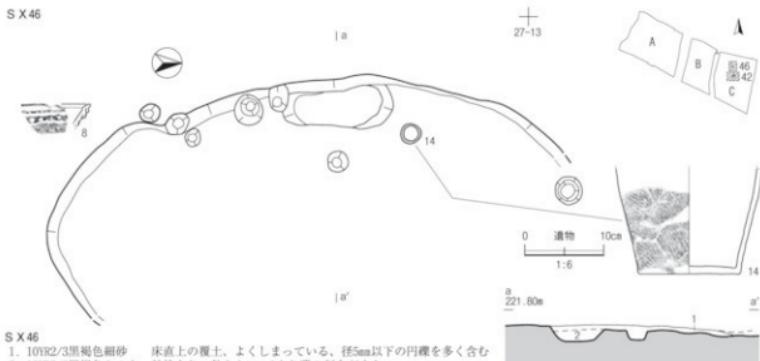
S B45



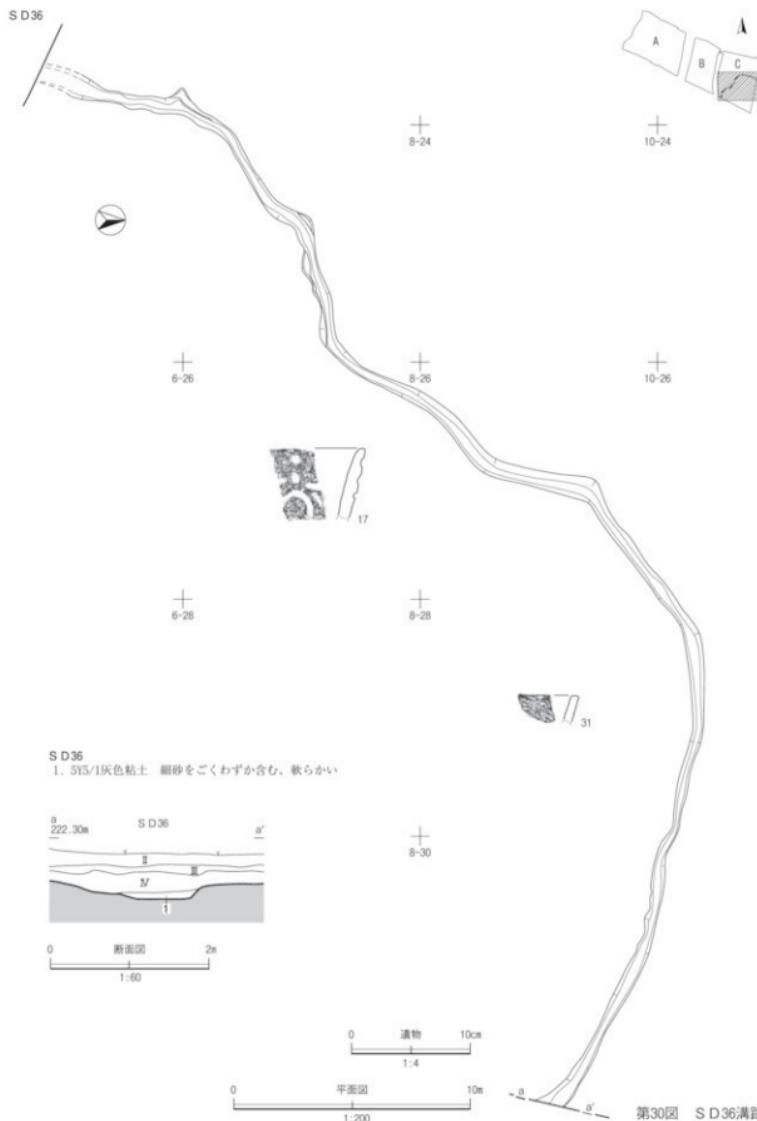
0 柱材 20cm  
1:20

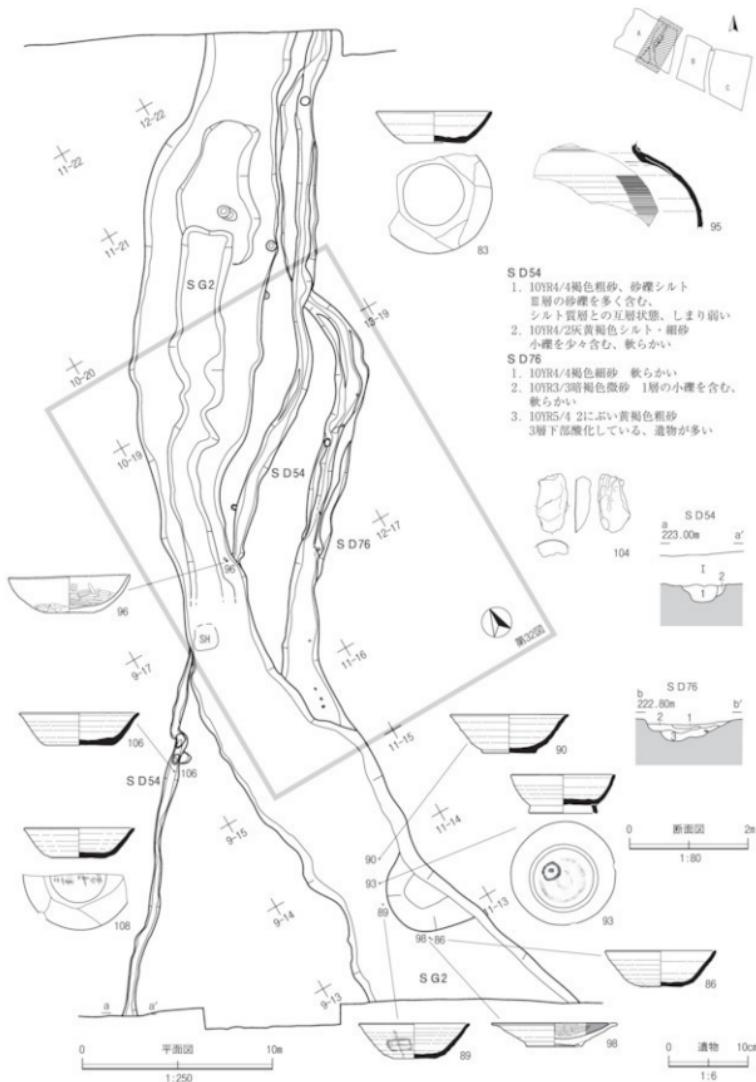
第28図 S B45振立柱建物跡

### III 造構と遺物

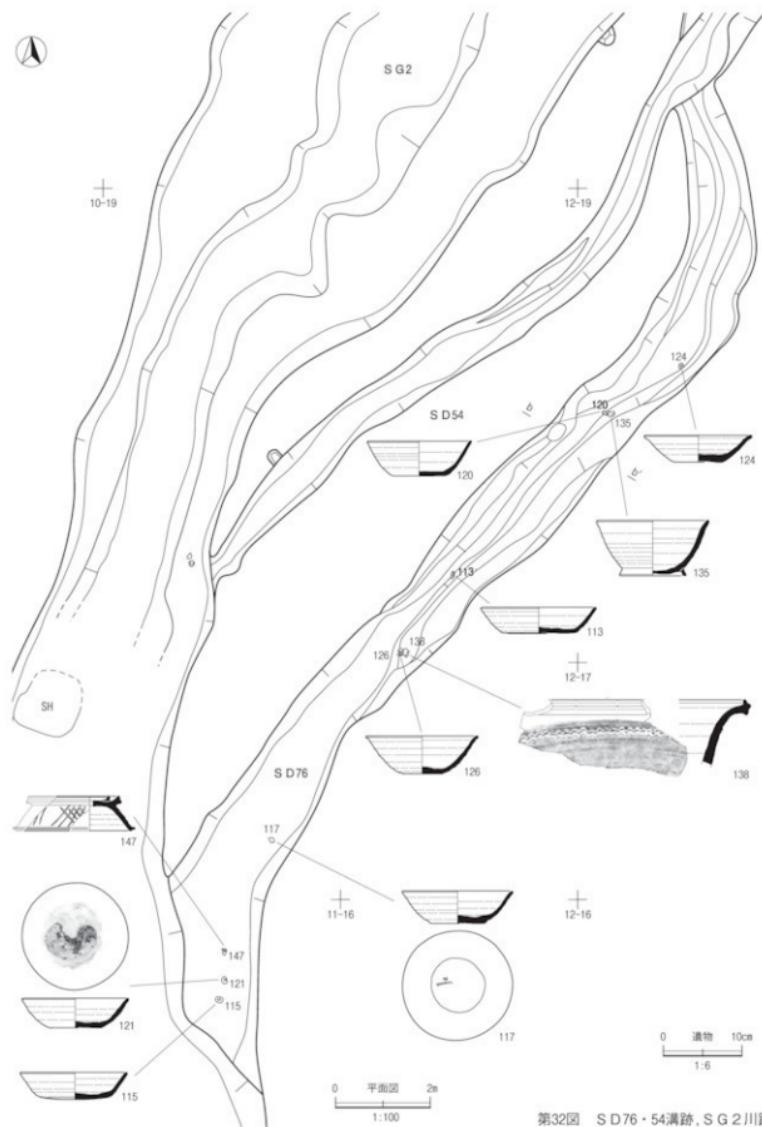


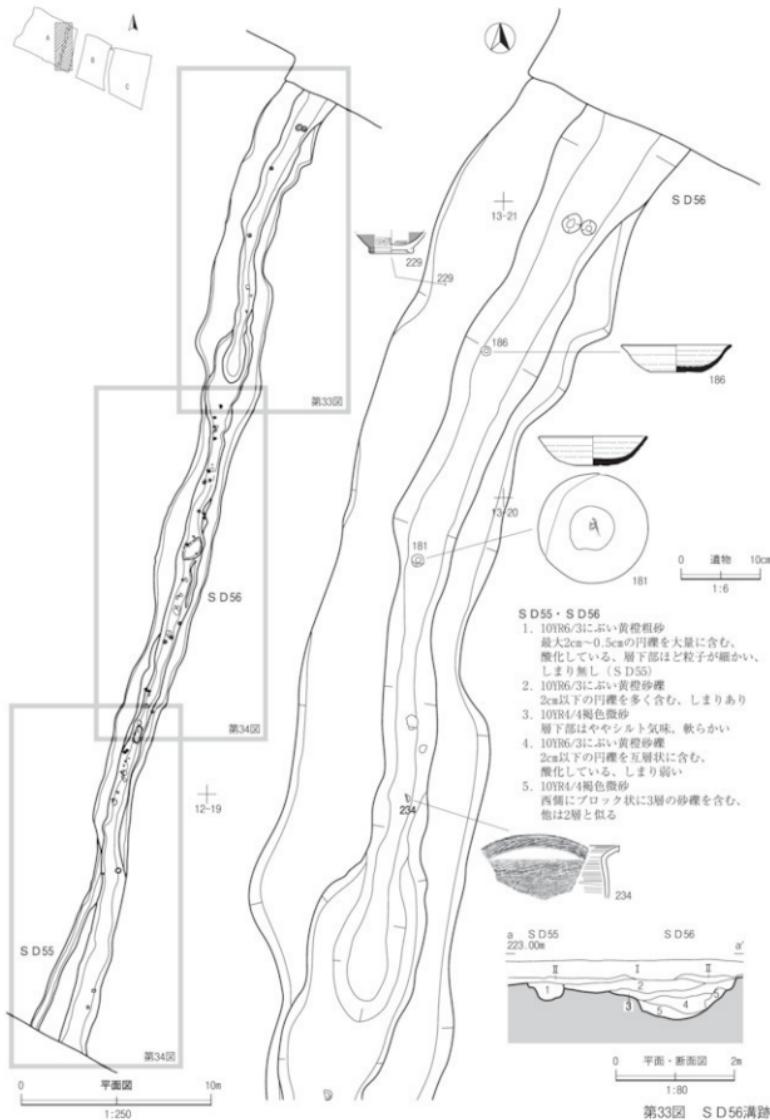
第29図 S X 42-46性格不明造構



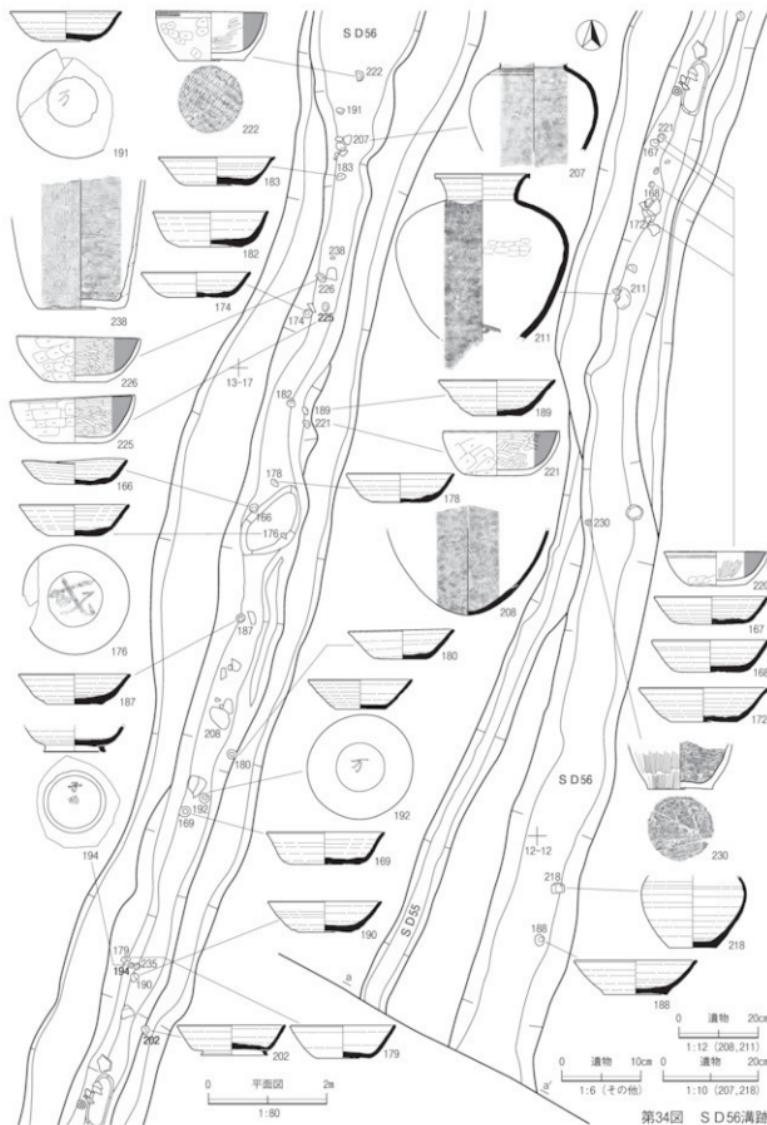


第31図 S D76・54溝跡, SG2川跡

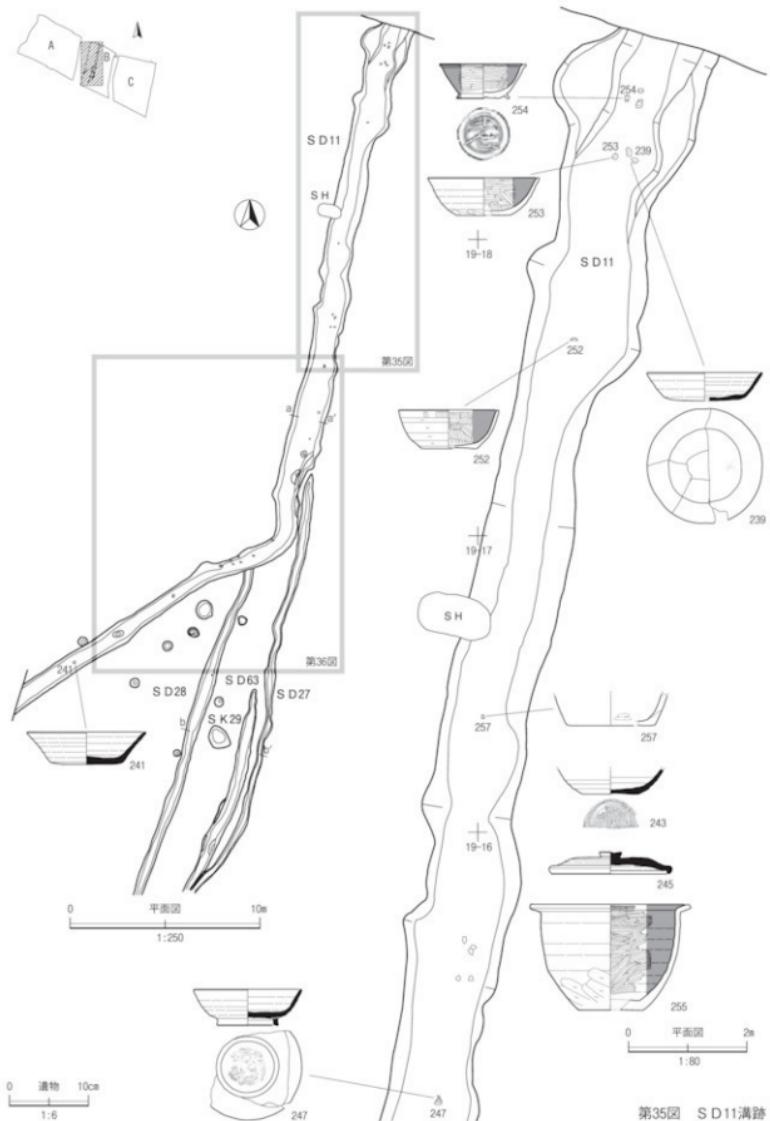




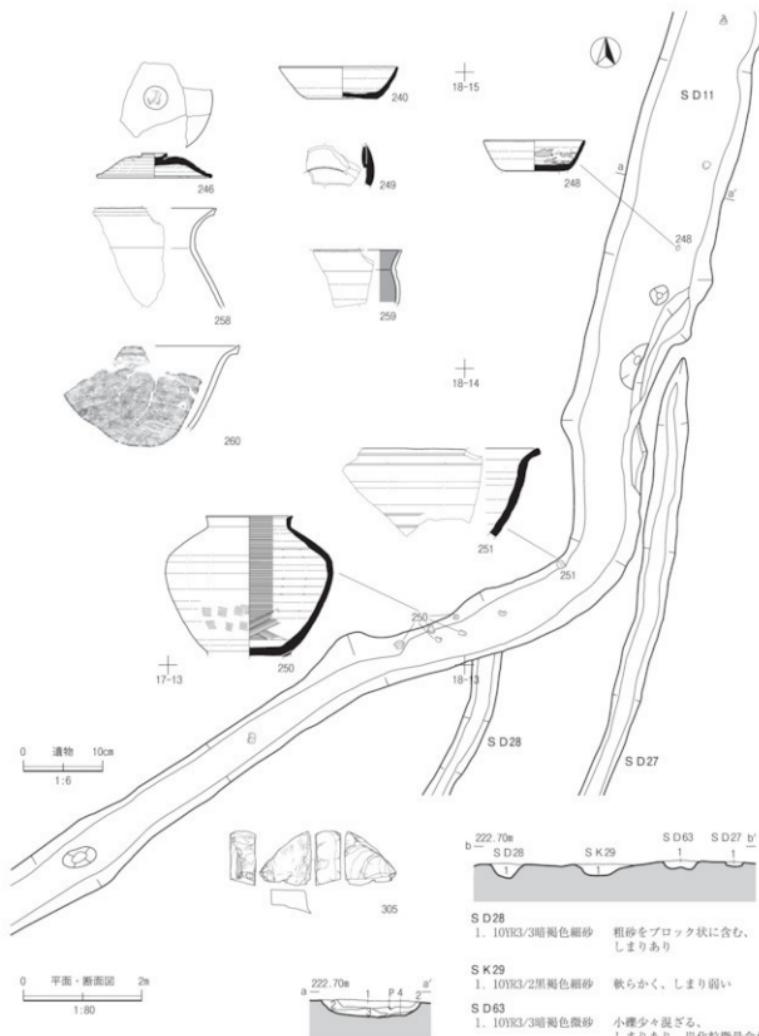
第33図 S D 56溝跡



第34図 S D56溝跡



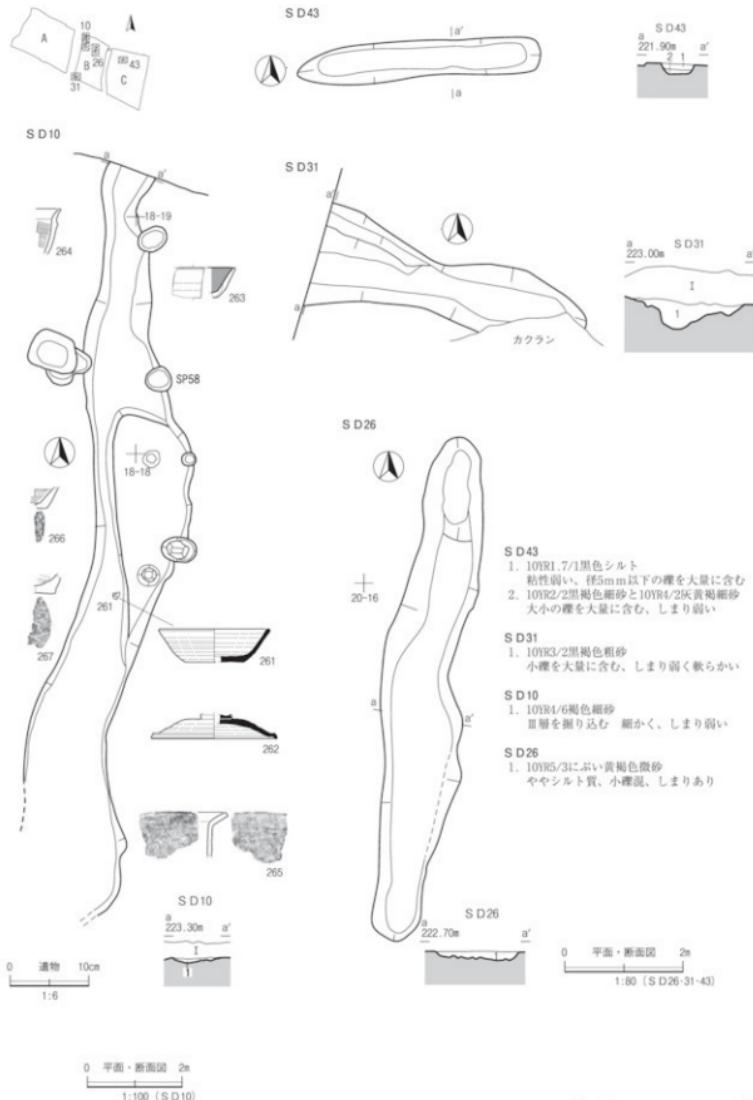
第35図 SD11溝跡

**S D11**

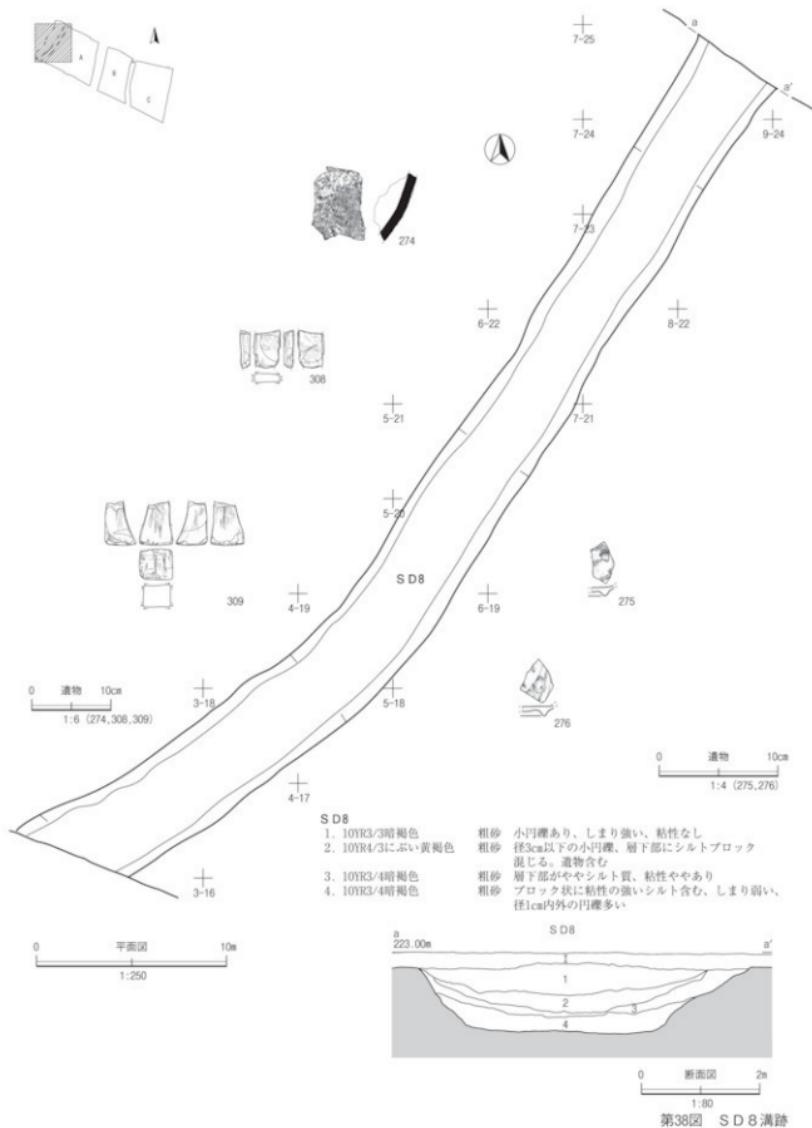
1. 10YR5/4にぶい黄褐色細砂
  2. 10YR5/6黄褐色細砂
  3. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
  4. 10YR5/4にぶい黄褐色細砂
- 層下部は小纏を多く含み、軟らかい  
小纏を均等に含む、しまりあり  
径1cmの円纏を少々含む、軟らかくしまり無し

第36図 S D11溝跡

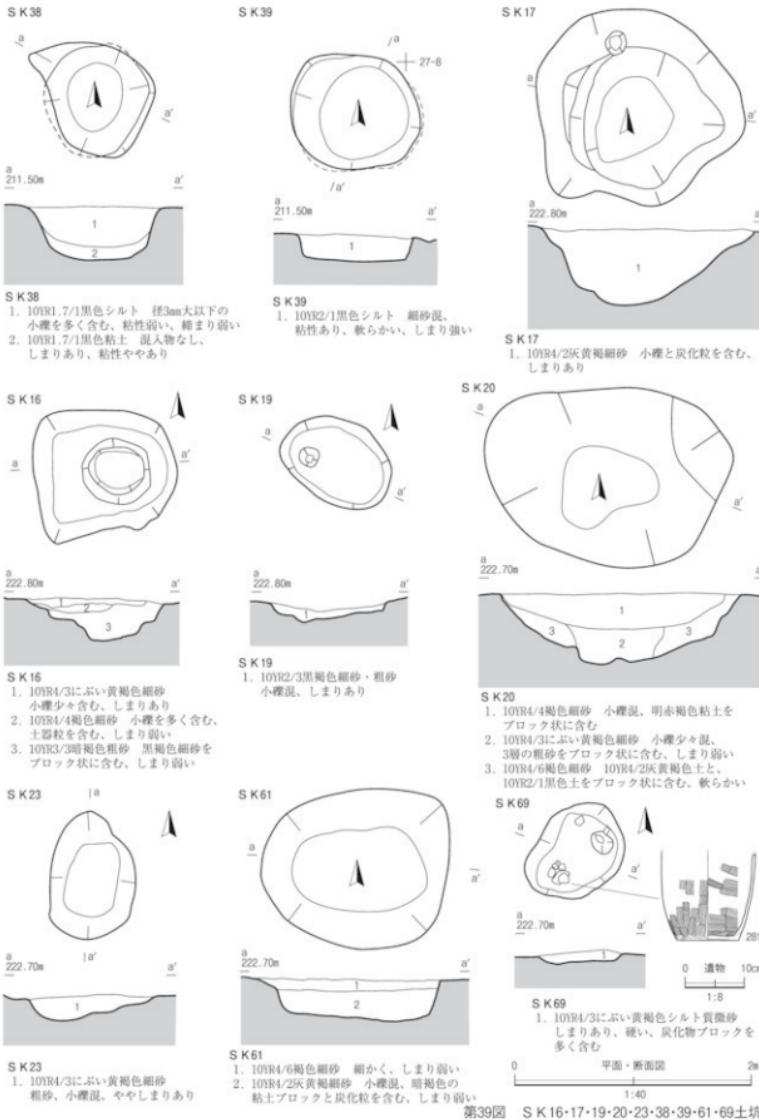
### III 造構と造物



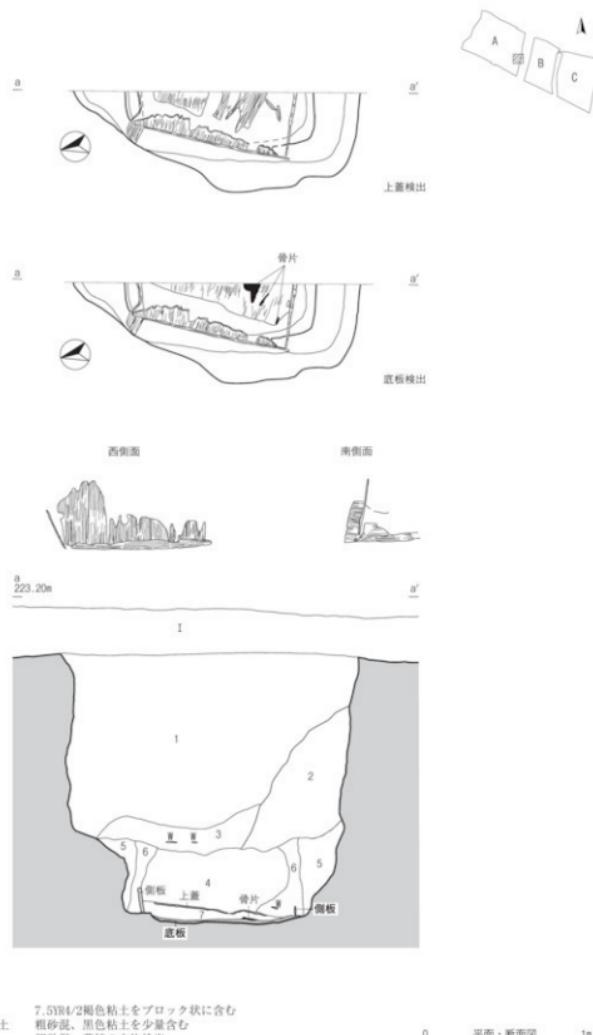
第37図 S D 10-26-31-43溝跡



### III 造構と造物



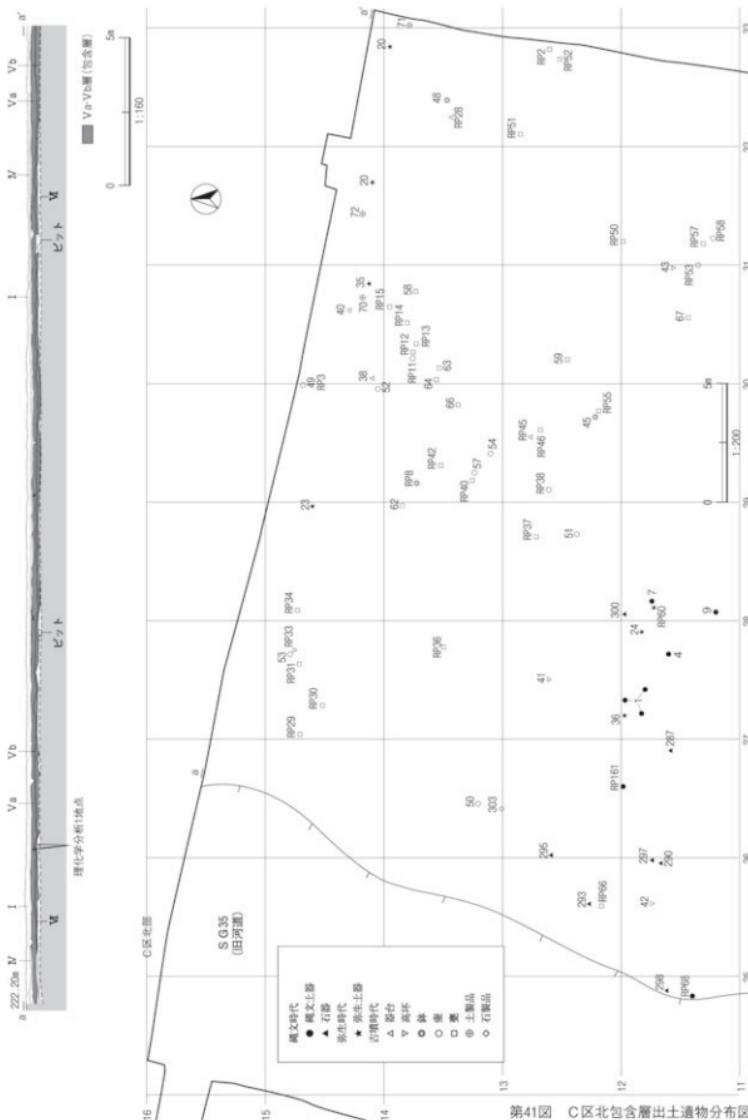
SH9



SH9

1. 10YR4/2灰黄褐色粘土
2. 10YR4/3にふい黄褐色粘土
3. 2.5YH4/1黄灰色粘土
4. 10YR5/2灰黄褐色粘土
5. 10YR4/3にふい黄褐色粘土
6. 2.5YH4/1黄灰色粘土
7. 10YR4/2リープ黑色粘土
7. 5YR4/2褐色粘土をブロック状に含む  
粗砂混入 黒色粘土を少量含む
- 細砂混入 墓棺の木片検出
- 黒色粘土をブロック状に含む、やや粘性あり、墓棺の上蓋検出
7. 5YR4/2褐色粘土をブロック状に含む、炭化物を少量含む  
細砂混入 やや粘性あり、墓棺の木片検出
- 粘性強い、骨片を含む、墓下部に墓棺底板を検出

第40図 SH9墓坑



第41図 C区北包含層出土遺物分布図

## 2 遺 物

本遺跡から出土した遺物は、整理箱（55×39×14cm）で51箱を数える。土器・土製品、石器・石製品、金属製品、柱材である。時期的には、縄文時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期と、**遺物の時期**奈良・平安時代、そして中近世に大別される。このうち報告する遺物は、縄文土器18点、弥生土器19点、古式土師器31点、土製品5点、土師器71点、須恵器139点、灰釉陶器1点、磁器2点、石器・石製品24点、金属製品3点、柱材4点の、計317点である。以下、時代ごとに記述する。また、奈良・平安時代の遺構から出土した遺物は、遺構単位で扱っている。

### （1）縄文時代

#### A 縄文土器（第42図1～18、写真図版22）

縄文時代の土器は、整理箱で3箱分出土した。C区包含層（特にVb層）と、V層を掘り込んだ遺構からの出土である。ほとんどが摩滅した小破片である。主な時期は中期中葉で、大木8**大木8a式**a式を主とする。ほかに中期末葉、後期前葉、晩期に属するものもわずかながら出土している。

1～11は、口縁部ないし頭部に細い粘土紐の貼り付けを有している。この内2～10は竹管による刺突または押圧を伴い、加えて2～5の頭部にはLRの撚糸による側面圧痕が施されている。1は、口唇部に4単位の横位S字状突起と、口縁部文様帶に粘土紐貼り付けによる渦巻・横位の小波状文をもつ。頭部から体部にかけて縦位の羽状縄文が見られる。2・3の口唇部には、右側から細い竹管による刺突が施されている。4は口唇部に4単位のリング状突起をもつ。細い粘土紐を弧状に貼り付けた後に、棒状工具で細かい刺突文が施されたものである。5～7は、口唇部に小波状の細い粘土紐が貼り付けられている。5は口縁部に縦位の細かい刻目をもつ。6・8は、頭部への粘土紐貼り付けの後、竹管側面で押圧している。7は摩滅しているが、刺突と考えられる。9の場合、同一個体片の口縁部に、楕円形区画内に角張った棒状工具で刺突を施した部分も出土している。胎土の粒子が大きく脆いという特徴をもつ。10～13は沈線が施されたものである。10は頭部と体部に沈線による弧状文がある。11は口縁部に小波状の粘土紐貼り付けを、頭部に横位単沈線を施す。12・13は体部にRLの地文と沈線による渦巻文をもつ。14は、底～体部下半のみが残存しているものである。体部にLR綴の地文、底部に網代痕が残る。以上1～14までは大木8a式に比定される。

15は、胎土が黒色で粒子が粗く、地文はLR綴で、頭部に隆起線文を貼り付けている。大木10式の所産と考えられる。16は大形の粗製土器で縄文RLが斜めに施されている。同一個体の頭部片から判断して、頭部でやや締まる器形と推測されるが、時期は不明である。17は口縁部に沈線による円形文などをもつ。胎土に石英粒子や金雲母を含む。古墳時代としたSD36溝跡の覆土から出土しており、流れ込みと考えられる。後期前葉の所産である。18は、緻密な黒色の胎土で、薄手である。口縁部文様帶の羊齒状文の様相から、晩期の大洞C1式頃のものと推定される。内外面ともにススが付着している。

#### B 石器（第60・61図、写真図版48）

出土した石器類は剥片石器や礫器である。このうち比較的の形状の明らかなものを図示した。このほか剥片や碎片なども出土している。石軌2点・石錐1点・石匙1点・範状石器5点・搔

器1点・削器3点・磨製石斧1点・石皿1点である。出土位置はほとんどがC区の遺物包含層や造構の覆土中からであり、検出した造構とのつながりは確認されない。これらの石器は、出土した縄文土器が中期大木8a式のものが多いことから、ほとんどはこの時期に相当するものと考えられる。石材は頁岩が多い。

**石鎌 (287・288)** いずれも底辺が直線的な作りで身部は緩い弧を描きながら先端へと繋がる。尖頭部は鋭利な調整が施される。器面は細かい調整加工が全面におよび、薄く精巧に仕上げられる。縄文時代前期初頭から前葉にかけて認められる形態であり、前期の可能性がある。

**石錐 (295)** 石材が白色の瑪瑙で、錐の部位と摘み部が明瞭に区分され製作されている。横型剥片を素材とし、背面を主に加工して先端部が形成される。

**石匙 (296)** 半欠品で、剥片素材の打面部を摘み部として加工している。下半部は破損のため、形態や加工の状況は不明である。

**笠状石器 (290~293・299)** 6点確認した。290は長軸が52mmで、笠状石器としては小形である。未加工部分が見られることから、あるいは石鏃などの未成品の可能性もある。291~293は刃部の狭い棒状の形態を呈し、両面の全周にわたって加工が施されている。299は素材の打面を基部として撥状に刃部が広がる形態を持ち、側縁加工による整形が施される。

**搔器 (298)** 背面先端から左側縁にかけて刃部を形成する。素材剥片の打面部がなく、折り取られたと考えられる。

**削器 (289・294・297)** 3点ある。289と297の石器は綫長の剥片素材を利用し、両側縁を刃部として利用している。294は側縁の両面を加工し、鋸歯状に成形している。

**磨製石斧 (300)** 砂質凝灰岩製で先端部が破損している。丁寧な研磨が認められる。

**石皿 (301)** 石材は安山岩と考えられる。扁平な大形礫を用いており、使用により上面が皿状に凹んでいる。下半部は欠損している。

## (2) 弥生時代

### A 弥生土器 (第43図、写真図版23)

弥生時代の土器は、整理箱で2箱出土した。小破片が多いが、口縁部の資料を中心に掲載した。よって土器分類も口縁部の様相を中心にしてこととした。分類基準は以下の通り。

**土 器 分 類 I群 半裁竹管を用いたもの (桜井式期の範疇)**

**II群 口縁部直下に刺突文を施したり、素口縁で縄文を施しているもの (広義の天王山式期)**

a類：キザミ状あるいは棒状工具での押圧による刺突文を施す。口縁部は肥厚する場合が多い。

b類：口縁部に連弧状や四角状の幾何学文を施す。

c類：刺突文などの加飾がなく素口縁である。肥厚する二重口縁のものもあるが、やや薄く、肥厚しないものもある。

d類：体部破片で、波状の沈線を施す。

e類：①底部破片で、甕・壺の底面が無文のもの。

②台付鉢などの底部で外面に粗い2本の沈線を施すもの。

I群土器として、19がある。体部外面に渦巻文を施している。

竹島國基氏採集品（竹島國基 1992）に類似し、狹義の桜井式期にあたると言える。

桜井式

II群土器として口縁部分類を中心 a類～e類まで細分した。II群a類土器とし20～25がある。20は、口縁部がやや内窪する器形で、二重口縁を呈する。口唇部を平らにするナデ調整があり、口縁部外面に繩文が施されている。口縁部下に1条の沈線を配し、直下に竹管状工具により刺突文を施している。外面に赤彩が施されている。21は、口唇部に繩文が施され平らに調整されている。口縁部外面に繩文を施した後に太い4本の沈線を平行に施している。口縁部下に竹管による円状の刺突文が施されている。外面全体にスグが付着している。22は、口縁下部のみの資料であるが、口縁外面の繩文の下に斜状の刺突文が施されている。福島県明戸遺跡出土品のように、指による押圧によって作り出されている。23は、口縁部に指頭による調整が施され、二重口縁にした口縁部下に竈状工具による刺突文を施している。24は、口縁部下から頸部にかけての資料である。口縁部下に22と同様の刺突文があり、やや外反した頸部には繩文施文の後に2本の波状文が認められる。25は口唇部に棒状工具によるキザミが施されている。外面が摩滅の上スグが付着しているため施文の有無が不明であるが、無文と考えられる。口縁部下に2本の平行沈線があり、直下にわずかに刺突文が観察される。2本同時施文は天王山式期の中でも古手にある。

天王山式

II群b類土器として、26・27がある。26は、口唇部に斜状のキザミが入る。器厚が薄い。口縁外面にヘラ描きの連弧文が施されている。27は、口縁外面を2本同時施文によって区画し、口縁部中央に曲線を基調とした幾何学文を配す。

II群c類土器として28～33がある。28は、やや肥厚した口縁部をもつもので、沈線による加飾がない。口唇部が指頭によって小さな波状に作り出されている。29は、口縁部が指頭によりやや薄く成形されており、粗い墨糸による繩文が施される。30はやや薄く成形された口縁部にR L繩文が施されている。31はやや肥厚した口縁部の上半部のみであるため刺突の有無は確認できない。よってc類に分類した。32は鉢か壺の口縁部である。やや薄く成形されており、広く外傾する器形であろう。口唇部や口縁外面に繩文を施している。33は壺で、ほぼ完形で出土した。口縁部は肥厚し外傾する。口唇部は平坦で、繩文が施されている。頭部から底部にかけて繩文が認められ、底面にも施されている。

II群d類土器として34がある。体部上半の資料で、繩文を施した上にヘラ状工具による沈線を入れている。水平に引いた1本の沈線の下に波状文が施されている。

II群e類土器として35～37がある。①35は壺または壺の底部で、外面に繩文が施されている。底面は無文で33とは違いケズリにより平坦面が作り出される。②37は台付鉢の底部である。端部はナデにより平らに調整され、外面に粗い2本線による波状文が描かれている。

### (3) 古墳時代

#### A 古式土器（第44・45図、写真図版24・25）

整理箱で7箱出土した。古墳時代の土器編年については、「辻編年」（辻秀人 1995）を使用し、辻編年器形ごとに述べる。以下、用語などはことわりがなければ上記に従うこととする。

器台（38～40）出土した3点は、脚上部の直線部分が長く下端部が短めという特徴を持ち、貫通孔を作りうが、透孔は欠損あるいは省略されたのか確認できない。38は良好な焼成と緻密な

**古墳時代前期** 表面調整、精選された胎土を持ち、器形からもⅢ-2期の古墳時代前期前半に相当する可能性がある。39・40は胎土が粗く器壁の厚みが大きいため、38より1段階新しい前期後半に属すると考えられる。

**高坏 (41~44)** 41・42はやや短めの中空棒状脚部と棱が明確な坏部をもち、ともに良好な焼成と緻密な表面調整、そして精選された胎土という特徴をもつ。2点は形状からⅢ-4期のものと思われる。43は胎土が粗雑であるものの中空棒状脚部をもつためⅢ-3期、44は前記3点に伴う脚部下半であることからⅢ-3~4と考えられ、古墳時代前期後半に属すると推察される。山形県内では今塚遺跡（山形市）S T 702・下横遺跡（河北町）S T 7にその類例が見られる。

**鉢 (45~48)** 45・46はミニチュア土器、47は赤彩土器と見られる。46・47は丁寧な表面調整と精選された胎土を使用しているのに比べ、45の胎土はやや粗雑である。器形からみた場合45~47は頸部の括れの角度が緩いこと、器壁が厚いことから古墳時代後半に属すると考えられよう。48はほかと比べ時代を異とし、古墳時代中期後半以降のものと見られる。

**壺 (49~57)** 56は単純口縁、49~54は有段口縁と、有段口縁の出土比率が高い。51~53では口唇部分に面取りが見られる。51はキザミの加飾と薄い器壁、52も薄手の器壁であることから前期前半に位置づけられる。49・50・53・54に関しては口縁の形状と胎土から古墳時代前期の所産であろう。56は、山形盆地内で出土例の多い単純直行口縁であり、57も端部が若干内穹気味になることから単純口縁の可能性が高い。前期に属すると考えられる。

**甕 (58~67)** 60~62は口唇部に面取りが施され、頸部の括れが深く器壁も薄手であることから、Ⅲ-1~2期の古墳時代前半と考えられる。58はやや厚い器壁を持ちながら球胴形を呈すため古墳時代前期後半に、61・63もこれと大きく時期が違わないと推定される。59は緩やかなラインを呈する頸部と、やや長胴化した体部から古墳時代中期中頃の所産と考えられる。64~67は底部のみの出土で時期は不明である。また、58~60・62にはススが多く付着し、使用痕が顕著である。

**甑 (68)** 単孔の瓶で口縁部は欠損しているものの、大型の深鉢形であると推測できるため、中期後半の所産と考えられる。県内では二タ保A遺跡（米沢市）S T 1などに類例がある。

#### B 土製品（第45図、巻頭写真3）

土製品は包含層から4点出土した。内3点は土錘であるが、それぞれ形状・大きさを異にする。  
**土錘 (70~72)** 70は小形の球形を呈し、中央の孔の断面形はなめらかな円形となる。緻密で軽い胎土である。71も同様な球形だが、70の軸の1.5倍の直径をもつ。外面にはケズリ痕が見られる。72は俵形を呈する。胎土には粗砂を多く含み、重い。69は用途不明品である。不整形で細長く、中央部分が凹んで先端がやや尖る。胎土は緻密である。

#### C 石製品（第61図、巻頭写真3・写真図版48）

**管玉関連の遺物** 管玉と管玉母岩と考えられるもの、石墨状品が1点ずつ出土した。

**管玉母岩 (302)** 石材は碧玉で、管玉の材料と考えられる。しかし加工途中ではなく、石材として向いているかどうか粗削りしたものと推測される。ほかの用途に使用した可能性もある。

**管玉 (303)** 石材は緑色の滑石と考えられる。径は5mm弱で、ほぼ中央に2mmほどの穿孔がある。片面穿孔である。他所からの搬入品と考える。包含層（Va層）からの出土である。

**石墨状品** (304) 管玉様の円柱形であるが、両端部が平らではなく穿孔もない。一方の端は中央部がやや凹む。管玉の場合は円柱状に磨く前段階で穿孔を行うため、管玉の未成品とは言い難い。遺物の形状や特徴は、寺村光晴氏呼称の石墨状品（寺村 1980）に極めて似る。黄褐色で、側面に縱長の擦痕がある。石材は珪化木と考えられる。用途は不明である。<sup>3)</sup>

#### D 柱 材（第62図、写真図版47）

古墳時代の掘立柱建物 S-B45の柱材である。6本中の4本が残存する。樹種は圧縮強度の高い落葉広葉樹コナラ節であった（第IV章第4節）。最も遺存状態の良い314は、太さ105mmほどの角柱で、断面形は正方形に近い。4面とも丁寧に面取りされていた。遺存する長さは410mmある。また、底面も平らに加工してあることから、地面に打ち込んで立てられた柱ではなく、土を掘り込み据え付けられたものであることが分かる。

#### (4) 奈良・平安時代以降

ここではA・B区から出土している奈良・平安時代と近世の遺物について述べる。整理箱にして約34箱、主に溝跡からまとめて出土しているのが特徴である。8世紀末～9世紀後半までの土師器・須恵器を中心とする。出土数のおおよその割合は土師器4割に対し須恵器6割と須恵器の方が多い。ほかには金属製品・砥石なども出土した。近世の遺物は、陶磁器と銭貨が出土している。なお、ここでは無台环は环とし、黒色土器は土師器の範疇に含め、内面ないし 黒色土器 内面黒色処理と表現している。

#### A 遺構から出土した土器

##### S T 1（第46図73～80、写真図版26）

堅穴住居跡からの出土は整理箱で1箱分であった。須恵器は、环・有台环・壺片が出土している。环（73・74）は底部切り離し技法が回転糸切りで、底径が小さい。73は若干内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。74は直線的に立ち上がり、口縁部付近でやや外傾する。どちらもロクロ痕は目立たない。9世紀後半の所産である。土師器は环・有台环・壺・鉢がある。环（75）の底部は回転糸切りで内面黒色処理が施される。有台环（76・77）は底部の切り離し技法が判然としない。77は胎土が緻密・黒色で金雲母を多く含む。全体的に摩滅しているが内外面とも黒色処理をしている。壺（78・79）は小破片で器形の分かることはなく。鉢（80）は床面から出土した。内面黒色処理されている可能性がある。

##### S G 2（第46・47図81～103、写真図版27～29）

整理箱で3箱分出土した。須恵器は、环と有台环・双耳环・蓋・長頸壺がある。ほかに壺の小片も多い。环（81～90）のうち、81～83が底部の切り離し技法が回転ヘラ切りである。81は逆台形で器高がやや高い。84～89は回転糸切りのものである。84は底径が大きく、底部内縁に回転ヘラ削り痕が認められる。回転ヘラ切りされている81よりも器高が低い。底面中央には墨痕が残る。奈良時代末に属すると考えられる。89は底径が小さくロクロ痕が顕著である。焼成不良で、酸化した部分がまだら状に認められる。90には底部切り離しの際、見込みに穴が開きやり直した痕跡が認められる。有台环（92・93）で、92は台部が形骸化し貧弱である。胎土・ロクロ痕・焼成不良などの様相が89とよく似ている。9世紀の第3または第4四半期に属すると考えられる。93は「○」が大小2つ重ねて墨書きされている。95の長頸壺の頸部には、退化し

た突帯がめぐっている。9世紀代の所産である。土師器には、坏・有台皿・甕がある。96の坏は非ロクロのもので、輪積み痕が顕著である。胎土に約3mm大の赤色粒子を含む。98の有台皿は胎土に微小な石英粒子を多く含み、簡略化された低い台部をもつ。甕(99~103)は、99の長胴甕の外面に、使用によるススが付着する。100は、頸部に突帯の廻る小形の甕である。103も、小形の甕と考えられる。胎土に多量の金雲母を含む。

#### S D54 (第48図105~112, 写真図版29・30)

須恵器の坏(105~110)が最も多い。105・106は9世紀の第1四半期、107・108は余り底径が大きくなり回転ヘラ切り技法のもので、9世紀第2四半期の様相を示す。S D54の主体となる時期である。108は、墨書きの後に打ち欠きされたものである。109はやや新しく、9世紀第3四半期に属すると考えられる。胎土に金雲母を大量に含み、S D76出土のものと接合した。ほかに、甕の口縁部(111)・甕の底部付近(112)、土師器では長胴甕の小破片なども少量出土している。

#### S D76 (第48~51図113~163, 写真図版30~35)

出土量は整理箱で5箱、須恵器には坏・有台坏・蓋・甕・鉢・長頭壺・短頭壺、そして円面硯がある。文字や習書のある土器、転用硯、墨書きと見られる墨痕の残る上器が多く認められる。須恵器の坏(113~130)は、113・114が底部切り離し技法が回転ヘラ切りのやや底径の大きいもので、9世紀の第1四半期に属すると考えられる。119と120は底径・器高が近いが、119は切り離しが回転ヘラ切りなのにに対し、120は回転糸切り後に回転ヘラ削り調整が施されている。120~127・129の底部切り離し技法は回転糸切りで、大半が9世紀第2四半期の範疇と考えられる。底径が小さく器高の高い126・128は9世紀後半に属すると推測される。125は、底部の内縁を潰して高台状に調整している。128・130は欠損してはいるものの、S G 2出土の89とは同じ特徴を有する。有台坏(132・133・135・136)では、132は転用硯と考えられ、底部外

面の墨痕は習書と推測される。132・133は9世紀第2四半期、136は回転ヘラ切り技法で9世紀第1四半期の所産と考えられる。ほかに鉢(137)と甕(138~142)がある。特に138・141は大形甕の口縁部で、口唇部付近で大きく外反する。138の頸部には二条の櫛描波状文が入る。奈良時代末頃の所産と考えられる。142は体部中央に最大径をもつ中形甕で、外面には自然釉が長く垂れている。甕(143~146)では、144の頸部突帯がかなり崩れた印象をもつ。145は胎土が緻密で、全体に丁寧な作りの短頭壺である。146は、有台の小形甕と見られ、炭化物が内部部まで吸着しているのが断面で観察できる。焼成後に被熱したと考えられる。147は円面硯で、残存していたのは1/6程度であるが、全形が推定できる。圓脚部に4本単位の篦描斜格子沈線文を上から下向きに描き、隣に2条の縱位沈線文を描がいている。縱位沈線は縱長方窓の名残とも考えられ、簡略化された意匠となっている。4単位で展開すると推定される。脚部内面側に灰を被っていることから、硯面を伏せて逆位で焼成したことが分かる。硯部には内堤・外堤を有する。残存部で見る限り、使用痕は認められない。9世紀前半の所産と考えられる(V章2節)。土師器は比較的の数が少ない。坏・有台坏・蓋・甕・鉢の器種があり、黒色土器が多い。坏(148~154)では、150以外は内面に黒色処理を施されたものである。148は非ロクロで器高の低い楕形のもので、外面には全てケズリ調整が施されている。150・153は同様の器形でありながら、150は底部回転ヘラ切り調整、153が回転糸切りのもので内面にはミガキ調整が施され

ている。墨書きされた壺(151~153)も多い。蓋(155)は疑宝珠形の摘み近辺しか残存しないが、内面は黒色処理されている。158の有台壺と共に、奈良時代末頃の所産と考えられる。長胴甕(162・163)は底部に木葉痕を有する。163の葉脈の痕跡が2重になっているのは、成形途中に下に敷いた葉が付れたものと考えられる。

#### S D 56 (第51~56図164~238、写真図版36~42)

整理箱で8箱分出土した。造構の中では出土量が最も多い。須恵器には、壺・有台壺・双耳壺・蓋・甕・壺がある。このうち壺が最も多く、内30点を掲載した。底部回転ヘラ切り技法のもの15点(164~178)、回転糸切りのもの15点(179~193)である。この内12点に墨書きがあり、打ち欠きされたと見られるものが2点あった。164は底径が大きく、古手である。肉眼による胎土観察では、回転ヘラ切りされた166・167・171は、長石を多量に含み焼成が硬い点が共通しており、回転糸切り技法の181・183・186も同様の要素をもつ。また169は小繭を多量に含んだ胎土を用いており、回転糸切りされた182と似た様相を呈する。底部切り離しは違うが、底部の立ち上がりを内窓気味につぶし見込みを広くとる形に共通点をもつ。回転ヘラ切りから回転糸切り技法に代わる移行期と考えられる。S D 56の主体となる時期である。年代的にはほとんどが9世紀第1~2四半期に属すると考える。172・175・177は底部からの立ち上がりが直線的で、これらの中では新しい要素を見せており、179・189・192はロクロ痕の様相から、9世紀第3四半期と考えられる。有台壺(194・200~204)は6点、回転糸切りのものは194・202・203で、194は墨書き、202はS G 2の93と同様に、9世紀第1四半期か8世紀末に属すると考えられる。203の内面には墨が付着している。204は棱椀と考えられるが口縁から後部の一部分のみである。ほかのものより白く緻密な胎土である。200・201は回転糸切り技法で器高が高い。特に200は緻密な胎土で重くしっかりした作りをしているが、被熱のためか表面が剥れた部分がある。この2点は9世紀前半に属すると考える。蓋は4点、内3点が疑宝珠形の摘みを有する。特に198は、191mmという大きな口径と、その割りに小さい摘みが特徴的である。返し部分を丁寧に作りだしている。今回の調査では、この蓋に見合う法量の有台壺は出土していない。199は、返し部分の形が潰れてできていることから、9世紀第2~3四半期まで下るものと考えられる。双耳壺(205)は耳部分で、口縁部直下に付く。甕(206~214)は9点ある。206の内面には膜状に漆が付着しており、外面と底面にもこびり付いている。外面は手持ちヘラケズリ調整が施されている。208・209は丸底で、どちらも叩き出し成形による。208の底部外面には、丸底の甕を立たせるためと考えられる3ヶ所の焼台痕が残る。209は大形の甕で、内面を覗き込むと底部は同心円状に色調が異なる。体部の胎土が淡い灰色で長石を多く含むのに対し、丸底上部の部位には濃い灰色で緻密な胎土(粘土組)が使用されている。強度の関係なのか、甕の部位によって使用する胎土を使い分けているものと考えられる(望月精司 2001)。底部は叩き出し技法である。211は肩部に多量の自然釉と灰が付着しており、焼成時に窓体内でも非常に高温になる位置にあつた事をうかがわせる。また、208・213を除く甕の胎土は特に長石を多く含んでおり、同様な胎土をもつ壺(183・191)から推測して、これらの甕も9世紀の前半に帰属すると考えられる。壺(216~219)は4点、216・217が短頭壺、218・219が長頭壺である。216~218にも多量の長石を含む。器形から、219のみ奈良時代末頃の所産と考えられる。灰釉陶器215は白甕、灰釉陶器の広口壺口縁部である。緻密な白っぽい胎土には混和材が認められない。

移 行 期

胎土の使い分け

水廻したものと考えられる。口唇部は鋭角に引き出してあり、作りの良さが窺われる。内面側に緑色の灰釉がかかる。造構外出土の286と同一個体である。土師器には、壺・有台壺・甕がある。壺（220～227）9点は全て非ロクロ成形によるもので、内面を磨いて黒色処理した黒色土器である。220は、小ぶりな器形と粗砂を大量に含む胎土が、ほかと様相を異なる。ミガキは縱方向に入る。221～227はミガキが横方向に入る。222のみ底部に網代痕を有する。223以外は外面にケズリ調整が施され、口縁部付近をナデているものも見られる。221・225・226と、224・227には法量差があるものの、どちらも底部からやや内湾気味に立ち上がっている。これに対して222・223は、底部からやや直線的に立ち上がり内弯する。胎土に金雲母を多く含む点では共通している。9世紀代と考える。有台壺（229）は1点、切り離し技法が回転糸切りで両面が黒色処理されており、胎土に金雲母を大量に含む。甕（230～238）は9点、230～232・237・238は、ロクロを使わない成形で、体部に主にハケメ調整が施されている。230・238は底部に本葉痕を有する。一方233～236はロクロ成形で、233は特にロクロ痕が顕著である。234は長胴甕と考えられるもので、口縁部外面にタタキ痕が残る。236は内面黒色処理されたものである。231には内面の口縁部付近にススが多く付いており、断面にも付着していた。233は、外面にも吹きこぼれ状の炭化物が付着している。

#### S D 11 (第57・58図239～260、写真図版43・44)

整理箱で、3箱分出土した。掲載したのは、須恵器10点、土師器9点である。須恵器は、壺・有台壺・蓋・横瓶・壺・壺がある。壺239～241が底部回転ヘラ切り技法、243・244が回転糸切り技法のものであるが、底径にあまり差がなく時期差は小さいと推測される。239は、打ち欠き土器と考えられる。底部中央の割れ口は、底部外側から人為的に打撃した痕跡が認められる。また、この土器には墨書「×」もある。241の底径は239・240と同程度だが、底部からの立ち上がりが急で口縁部が外反している点と、堅く焼きしまった重たい土器である点で異なる。

**印** 243には底部に刻書があり、窯印と考えられる。244は転用硯と見られ、内面には磨痕と墨痕が残る。蓋（245・246）は、どちらも内面が磨られており、同じく転用硯と考える。有台壺（247・248）では、247が底部回転糸切り技法のもので底部の外側に習書と見られる墨痕が残る。248は底部が回転ヘラ切り技法で、漆膜が付着する。249は横瓶の閉塞部である。壺（250）は有台の短頸壺で、おそらく壺蓋を作りうが、調査では壺蓋は出土していない。器形は体部的最大径となる部分で「く」の字に大きく屈曲する。胎土は緻密で焼成も良く、丁寧な作りである。体部の外側下半にはタタキ痕がわずかに残る。奈良時代末頃の所産と考えられる。鉢（251）は1点出土した。土師器には、壺・有台壺・鉢・甕・壺がある。壺（252・253）はロクロを使用し、内面を黒色処理している。有台壺（254）は黒色土器で、底部に「王仁」の刻書がある。底部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁直下で棱をもって外反する。内面側の口唇部に平らな面をもつ。内外面とも丁寧にミガキが入れられ、表面には金雲母が目立つ。高台の作りはやや粗雑である。底部はよくナデしているため、切り離し方法が判別できない。胎土自体が緻密かつ均質な黒色を呈するため、黒色処理が行われたどうか不明である。金属器（仏具）の模倣か、若しくは綠釉陶器を模した在地産の土器と考えられる。鉢（255）は1点、内面ミガキと黒色処理が施され、ロクロ成形である。甕（256～259）は、口縁部または底部であるが、金雲母を大量に含む点で共通する。また、壺（260）と見られる被熱した土器が1点出土した。

#### 刻書のある黒色土器

**S D 10** (第58図261～267, 写真図版45)

須恵器2点、土師器は5点を掲載した。須恵器坏(261)は底部切り離し技法が回転糸切りで、やや内窓しながら立ち上がる。ロクロ痕がやや目立つ事から、9世紀半ばから後半に入る時期と考えられる。蓋(262)は、摘みの径が40mmと大きく、つぶれた疑宝珠形を呈する。時期的には坏と同じ頃と考える。土師器は、全て小破片のみである。坏(263)はロクロ使用の黒色土器、壺(264～267)のうち、264は、頸部に段が付き、ハケメ調整されている。265～267は長胴壺と見られる。

**S D 27** (第58図268～271, 写真図版45)

須恵器の壺(271)と見られるものと土師器坏(268)・有台坏(269)・壺(270)である。268・269は被熱してはじけた痕跡が見られる。

**S D 28** (第58図272・273, 写真図版45)

掲載したのは2点、どちらも土師器の壺で、底部に網代痕を有する。273は体部外面下半から底部に、炭化物が付着している。

**S K 19** (第59図277)

277は土師器で、小形の壺と考えられる。回転糸切り技法による底部のみ残存している。

**S K 61** (第59図278, 写真図版45)

278は須恵器の大形壺の口縁部片である。頭部に拂描波状文が2列施されている。

**S K 16** (第59図279, 写真図版45)

279は須恵器双耳坏の耳部である。坏身側から外向きにケズリ調整されている。

**S K 20** (第59図280, 写真図版45)

280も双耳坏の耳部である。279とは逆に、外側から身側へとケズリ調整されている。

**S K 69** (第59図281, 写真図版45)

281は土師器の長胴壺の体部下半で、内外面ハケメ調整される。底部には木葉痕を有する。

**B 遺構外出土の土器** (第59図282～286, 写真図版47)

遺構外出土の土器は、整理箱で5箱出土した。ほとんどが小破片である。282は須恵器坏の墨書きされた底部片、283は壺で、頭部に「×」の刻画があり、窯印と考えられる。284は、鳥形須恵器の壺である。鳥の形を模した容器で、沈線とハケメで羽毛が表現される。内面にはカキ 鳥形須恵器メが丁寧に施されている。下部断面に翼部分との接合痕が残る。胎土は緻密で焼成が良く、大形である。9世紀前半の所産と考えられる。285は土師器の坏で、ロクロ成形によるいわゆる赤焼土器である。286は灰釉陶器の広口壺である。内面に緑色の灰釉が厚くかかる。

**C 土 製 品** (第47図104, 写真図版28)

104はふいごの羽口片と考えられる。S G 2川跡より出土した。胎土に粗砂を多く含む。時期は不明である。

**D 石 製 品** (第61図305～310, 写真図版48)

砥石が6点出土した。305はS D 11、306はS D 76、308・309はS D 8からの出土である。305は砥面が2面確認できる。緻密で軟らかい。据え付けて使用された仕上砥と考えられる。306は厚みのあるものである。3面使用しており、もう1面に刃物による傷が観察される。赤化しており、被熱したと考えられる。308は薄く小形である。手持ち用の中砥と考えられる。

309は欠損部を除いた全面を使用している。使い込まれて弓なりに凹み、金属を当てた際の傷と見られる溝が多数観察される。荒砥と考えられる。

#### E 金属製品（第62図315～316、写真図版47）

木質部の  
残る刀子

全部で3点出土した。315は不明品である。断面が層状を成しており、鍛造と考えられる。上半と端部が欠損し、表面も部分的にしか残存していない。S T I 覆土から出土しているが、帰属時期は不明である。316は刀子の柄部分である。木質の柄の一部分が残存し、刀身を挟んでいる。柄と刀身を固定した鎖も1本残存する。遺構外出土のため、時期は不明である。317は銭貨で、寛永3年～万治2年（1626～1659）に鋳造された古寛永と呼ばれる「寛永通寶」である。

#### （5）文字関連資料について（第63図、写真図版46）

文字資料は、A・B区の溝跡と川跡から37点出土した。うち墨書は34点、刻書が3点である。ほかにも円面鏡1点、転用鏡5点、見込みに墨痕の広がりが認められるもの4点、底部に墨を塗っているもの2点など、墨書に関連すると考えられる遺物が多数認められた。また、打ち欠き行為を行ったと考えられる土器は13点を数える。この内には、墨書きされていない土器も3点含まれている。<sup>4)</sup>

#### A 文字種

「二」「四」「三□」「万」「□万」「申」「虫」「伯」「成」「氏カ」「封」「福」「子福」「井上」「三□子□」「王仁」「○」「×」「キ」などがある。一番多いのは「万」で8点を数える。次が「申」の3点、「伯」と「×」が2点、ほかはそれぞれ1点ずつである。数字や吉祥句・記号・人名と考えられるものが多い。人名あるいは氏名（ウジナ）と考えられるものには、「王仁」「三□子□」「子福」「井上」がある。中でも254の「王仁」（わに）と刻書された黒色土器の有台坏の存在が特筆される。本遺跡から東へ約3kmに位置する早稲田遺跡からは、墨書の「王仁」が出土している（南陽市史 1987）。また、北東約8kmに位置する加藤屋敷遺跡（整理中）においても、「王仁」と墨書きされた黒色土器の有台坏が出土した。「王」の中央の縦線を最後の4画目に書く筆順の特徴や、底部際から書き始め文字全体を底部のやや上寄りに取める書き位置など、双方の「王仁」には類似点が認められる。108の「三□子□」は2文字目が「木」へんと見え、可能性として「三村」などの姓が考えられる。「三村」は茨城県の台地里廢寺跡に出土している（水戸市史上巻 1963）。4文字目は位置がやや斜めに寄るが「糸」へんの可能性がある。4文字の人名である可能性が極めて高い。194の「子福」は吉祥句と考えられるが、いわき市の荒田目条里遺跡出土の木簡には人名の「子福」が記されている（いわき市教育委員会 2001）。このため、人名の可能性も否定できない。153の「井上」は、人名と地名の双方が考えられる。記号には「○」「○」「×」「キ」がある。特に93は、有台坏底部の台内側に大きく「○」が書かれ、それが薄れた後に小さく再び「○」を記したものである。これは記号とも受けとれるが、則天文字の可能性もある。他に習書と考えられるものが2点ある。

#### B 器種と墨書き部位

器種は須恵器の坏が多く、32点である。須恵器の有台坏は2点のみである。土師器は全て黒色土器で、坏が3点、有台坏が1点である。墨書き部位は、ほとんどが底部外面に小さく書かれ

たものが多い。176のみ底部全体に大きく太く墨書きされているのが異質である。体部外面に書かれたものはやや新しく、9世紀半ば過ぎと考えられる土器に多い。中でも「申」と墨書きされているのは、底部切り離しが回転糸切りでクロクロ痕の顯著な須恵器の坏に限られる。

#### C 出土造構

出土造構別では、S D56溝跡が14点と最も多く、次いでS D76溝跡の10点、S G 2川跡の4点、S D11溝跡の3点、S D54溝跡の1点と続く。これらの造構は、全て東西約70mの範囲内で隣接し合い、南北方向に流れているものが多い。時期的にもほとんど差異はないと考えられる。

#### D 観

円面硯は、一般集落から出土することは稀であるが、その破片がS D76から出土している。円面硯と転用硯同じ造構から墨書き土器や、見込みに墨を溜めたような墨痕の認められる土器も出土している。また、須恵器の坏・有台坏・蓋で、内面がよく研磨されているものを転用硯とした。墨痕を伴うものと、伴わないものがある。

#### E 打ち欠き（破碎）行為

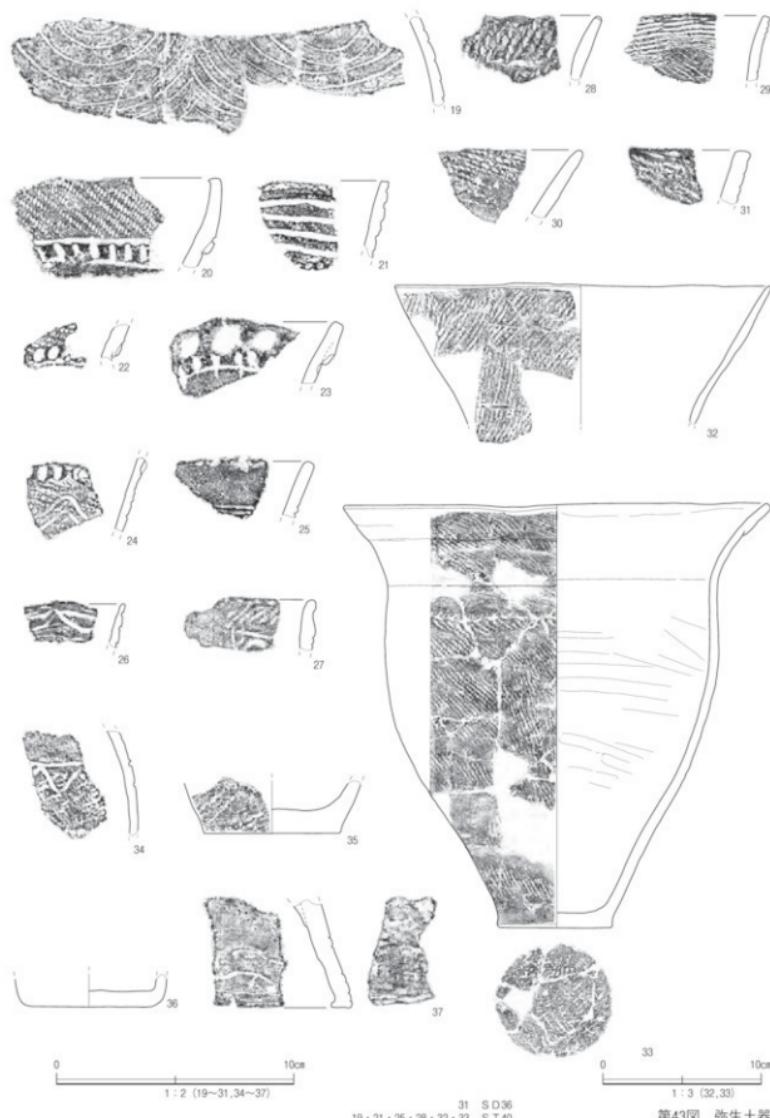
打ち欠きは、人為的圧力により土器から本来の用途を奪う行為であり、その後、散布（廃棄）を伴う場合もある（村木志伸 2005）。打ち欠き方法はいくつかに分けられるようである。83・128・194・246は体部を回転させながら順次打ち欠いているもの。放射状に角の立った底部（または天井部）が残る。転用硯に多く見られる。83では土器の外面側から、時計回りに回転させて打ち欠いたと考えられる。175・177・239は、底部の一点を打点として、外面側から一気に加圧したものと見られる。108では、墨書き文字を縦に分断するように打ち欠いている。本遺跡の資料では明確に確認出来なかったが、意図した通りに割れるよう、刀子などであらかじめ傷を付けておくことも行われていたようである。また、250は特徴的な打ち欠き状況を見せる。この須恵器短頭壺は、底部と体部に打ち欠いた際の打点と見られる傷が残り、出土した造構ごとに大きく4つに分けられる。S D 8・11・56溝跡、S G 2川跡から出土した短頭壺片は、断面の摩滅が見られず、すき間なく接合した。上記造構は覆土の大半が粗砂であるため、上流から流されて各造構に分かれたのであれば、かなり摩滅するものと考えられる。この短頭壺は打ち欠きを行った後に、溝と川の少なくとも3ヶ所に散布（廃棄）をしたものと推定される（S D 8溝跡は近世の造構のため、流れ込みと判断した）。中でも区画溝と考えられる S D11溝跡の、「く」字状に屈曲した部分から、まとまって出土している。

打ち欠き後  
廃棄した短頭壺

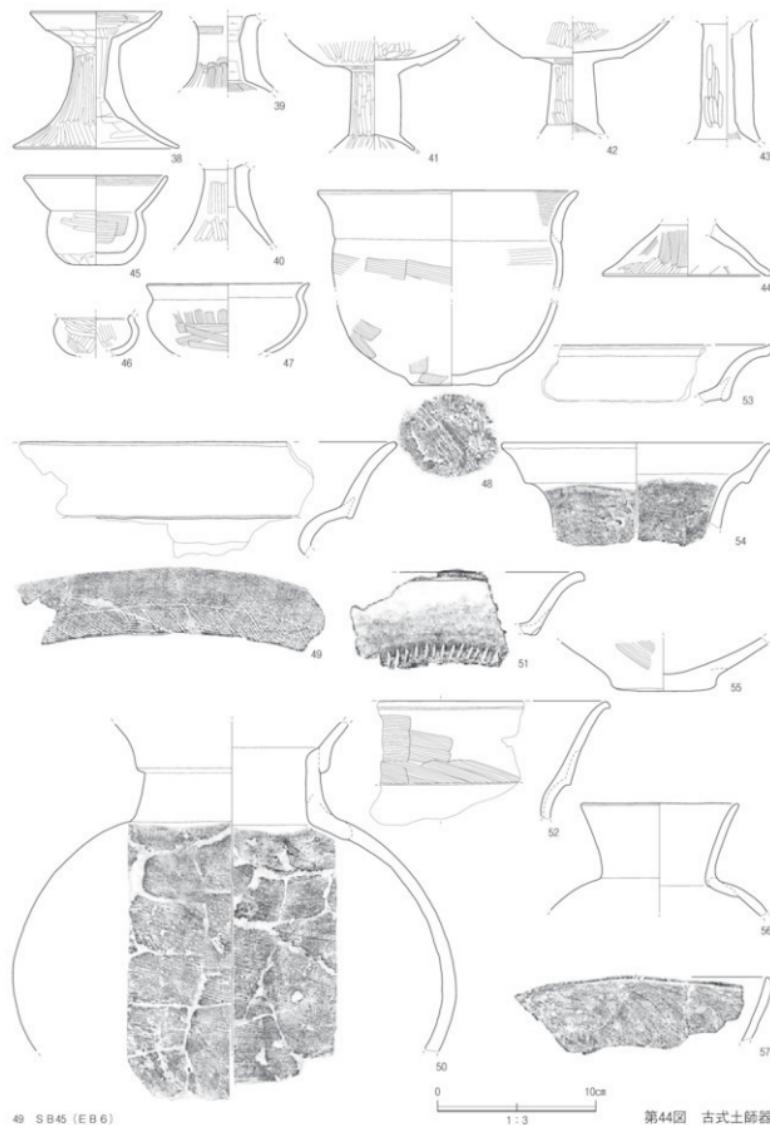


第42図 繩文土器

14 S X42  
15 S X46  
17 S D36

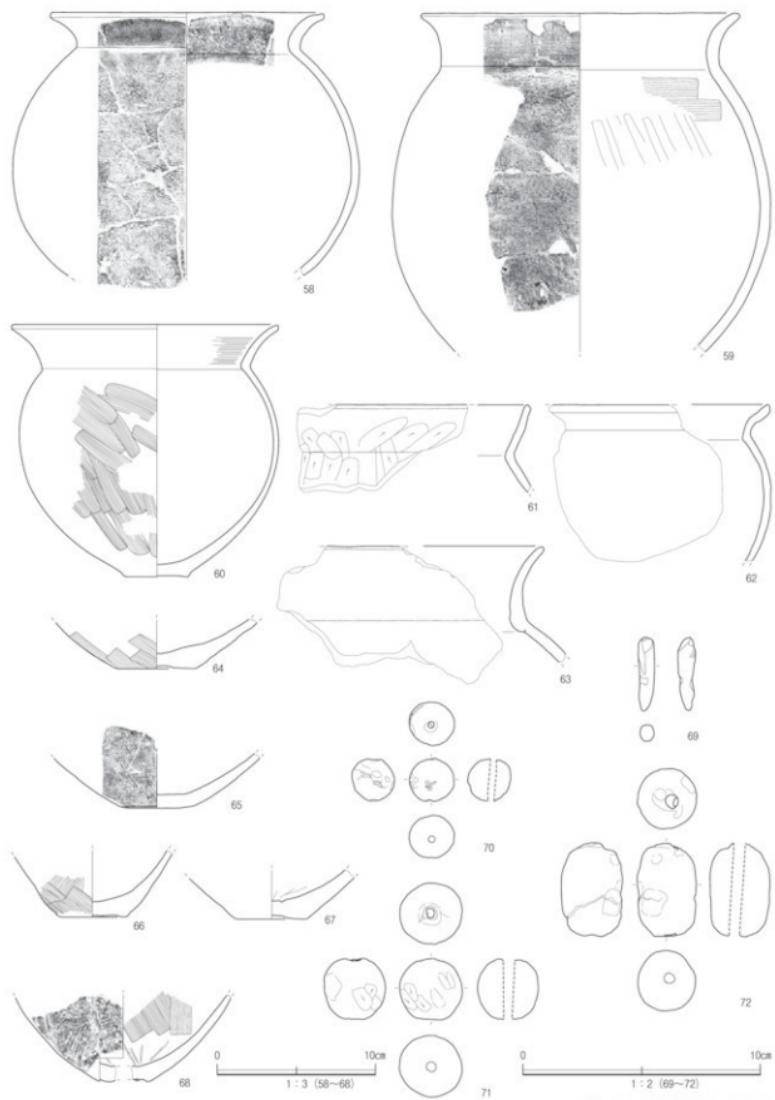


第43図 弥生土器



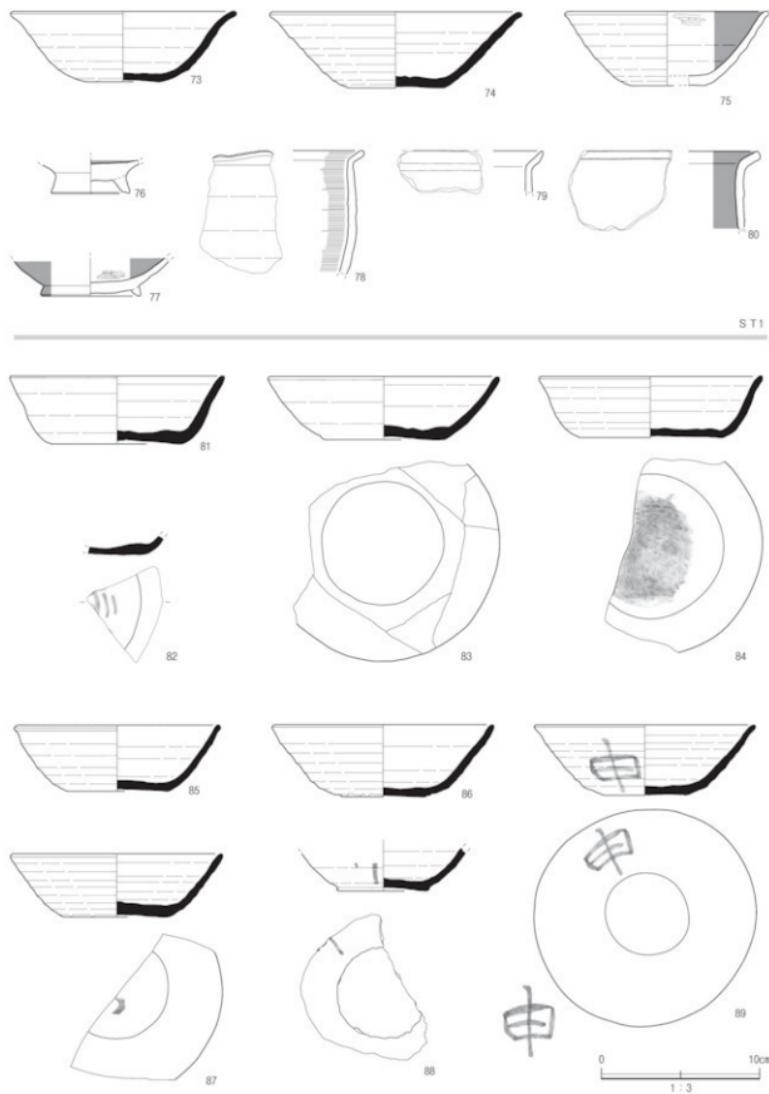
第44図 古式土器

49 SB45 (EB6)

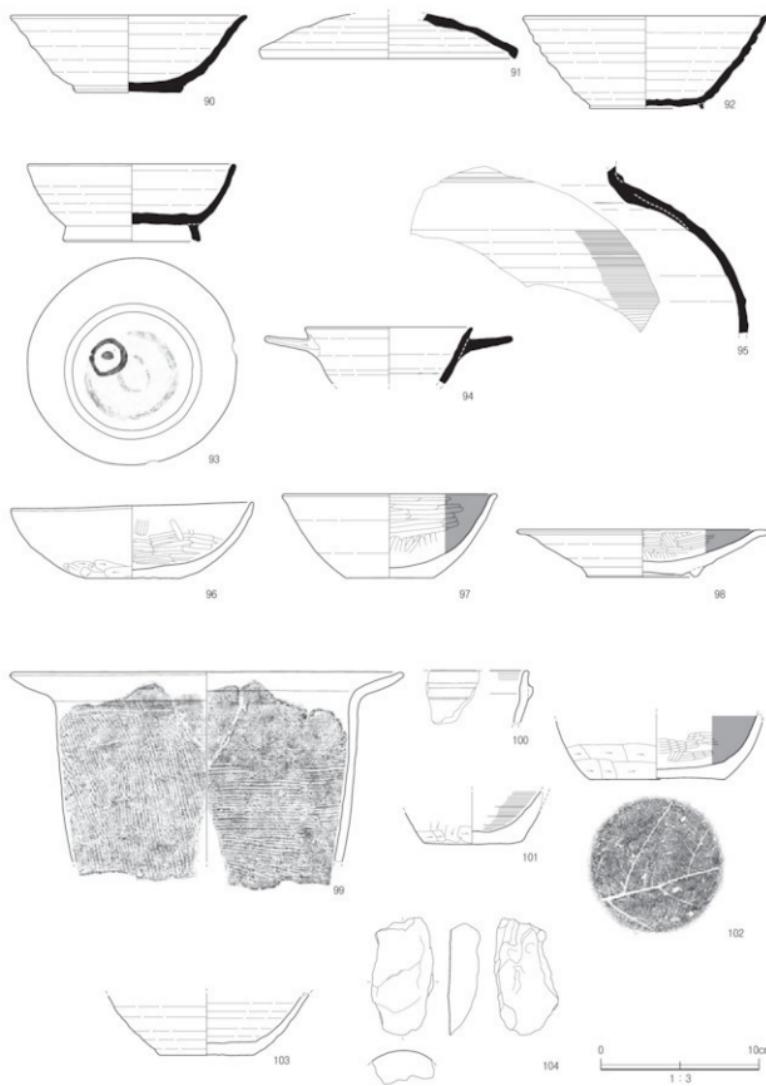


第45図 古式土師器・土製品

III 造構と遺物

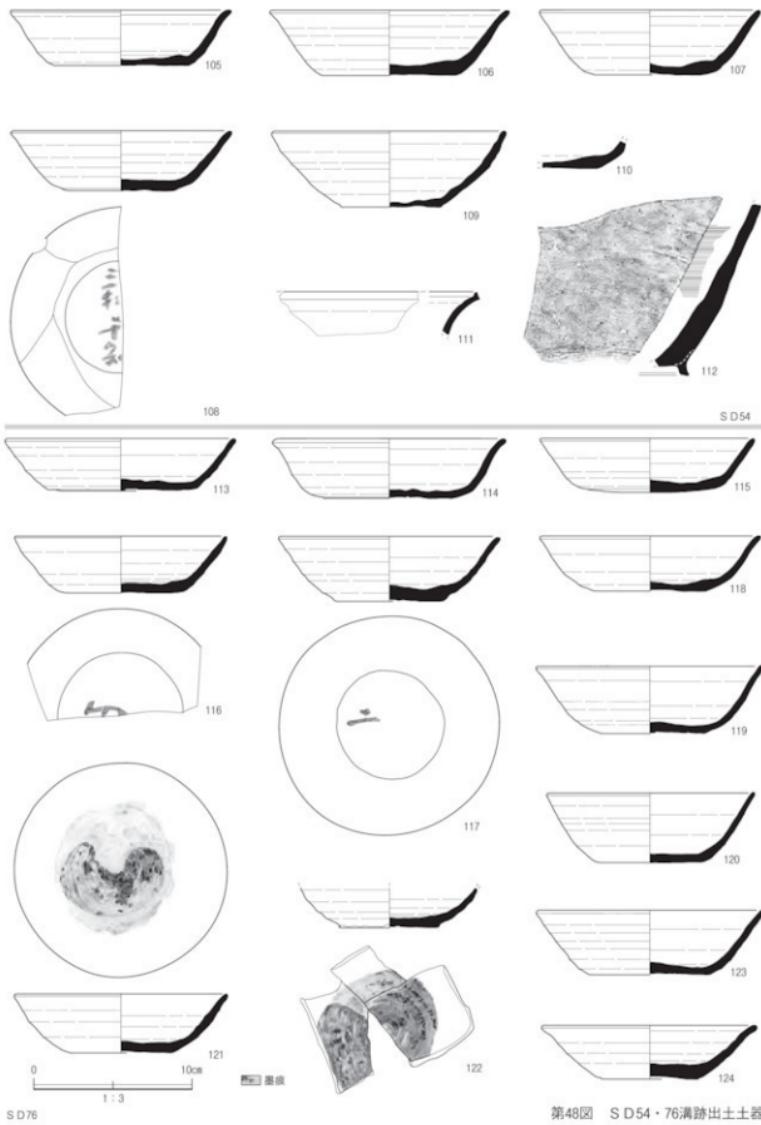


第46図 S T 1 竪穴住居跡, S G 2 川跡出土土器

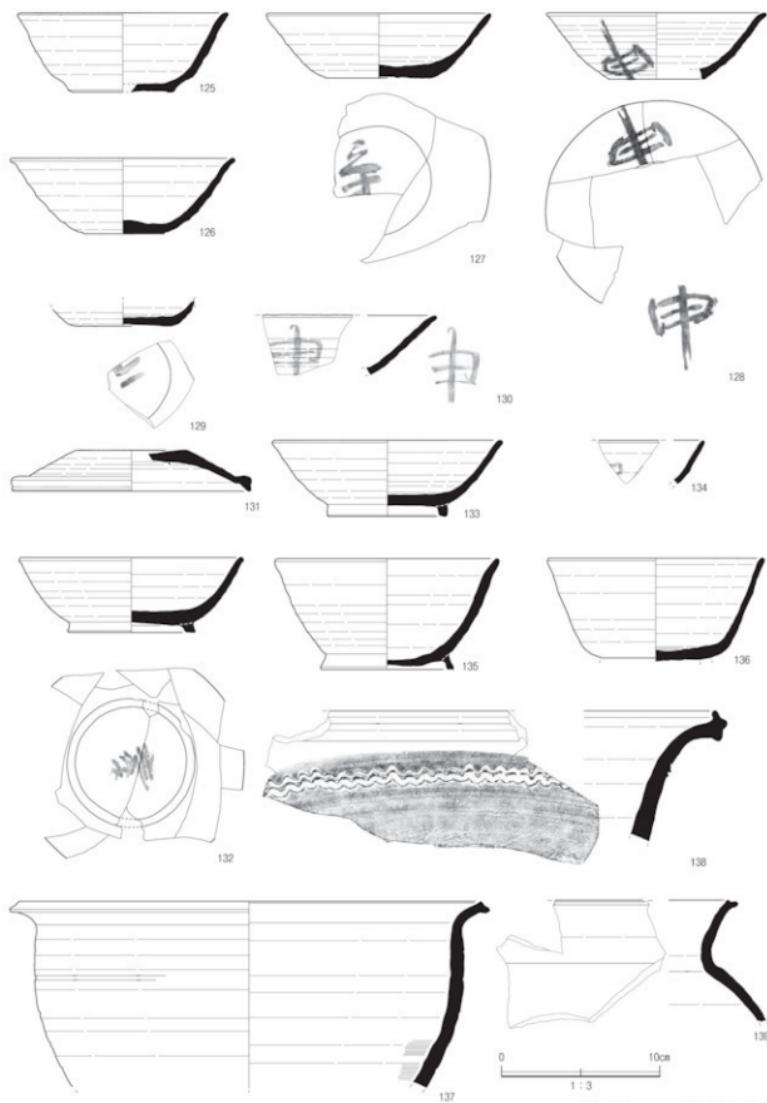


第47図 SG 2川II出土土器

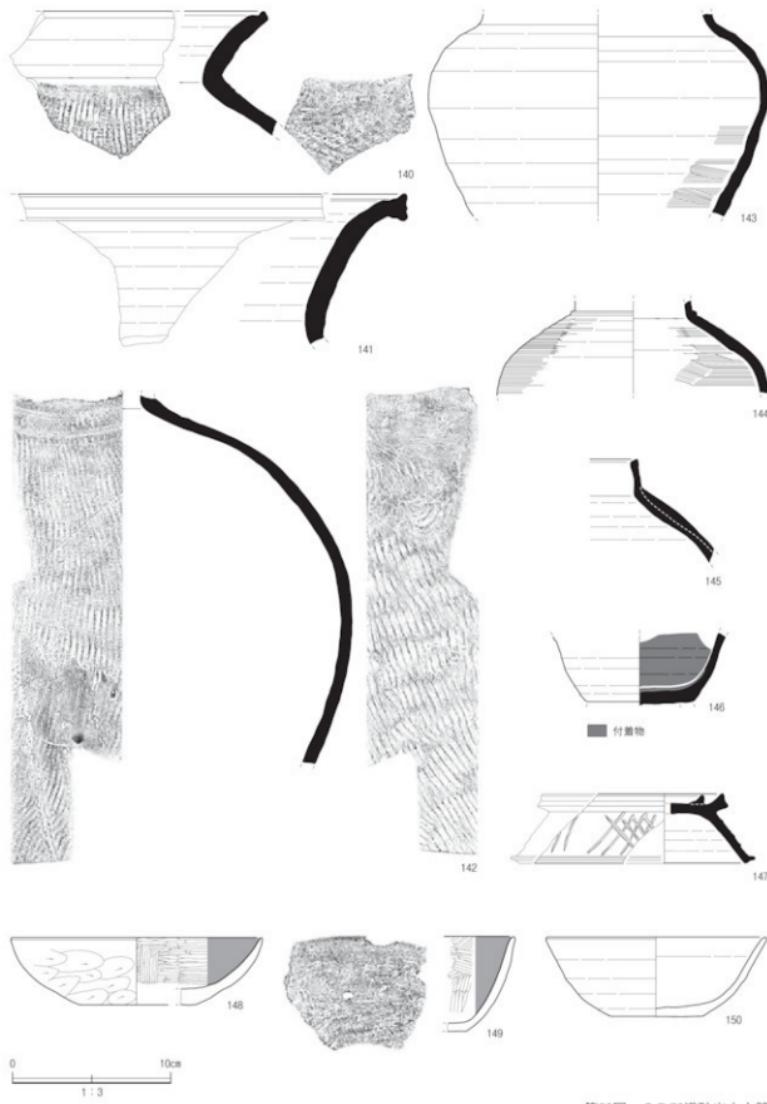
III 造構と造物



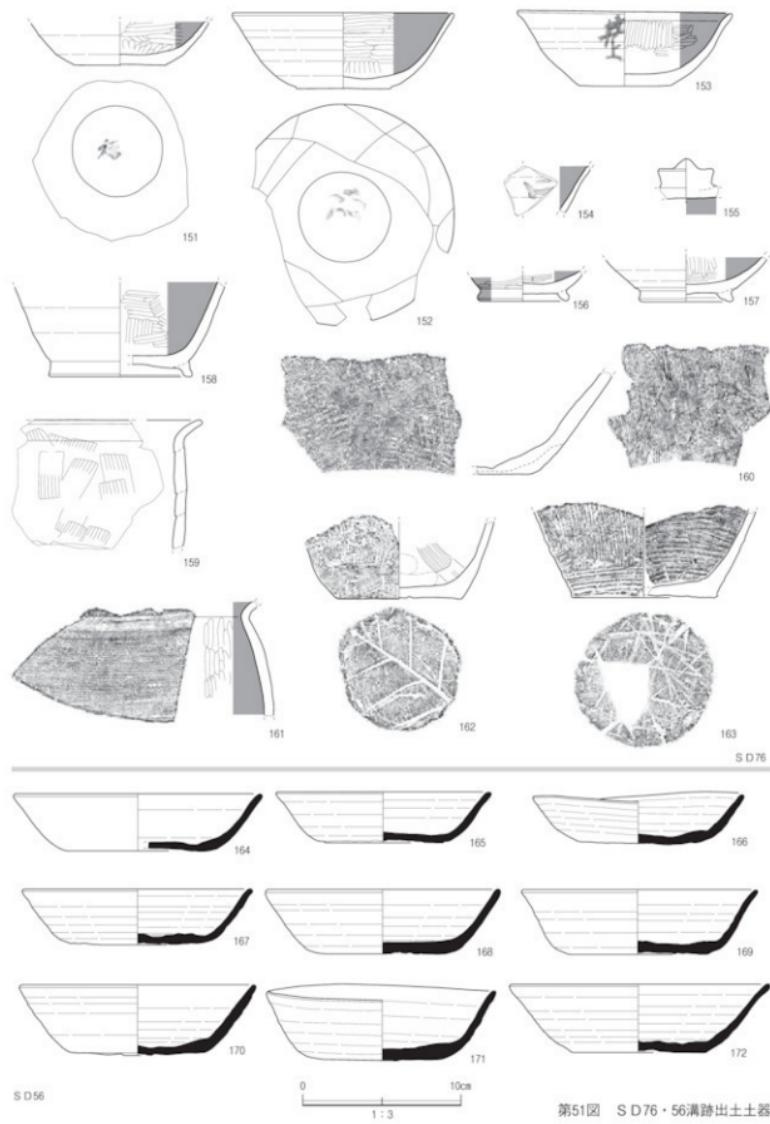
第48図 S D54・76溝跡出土土器



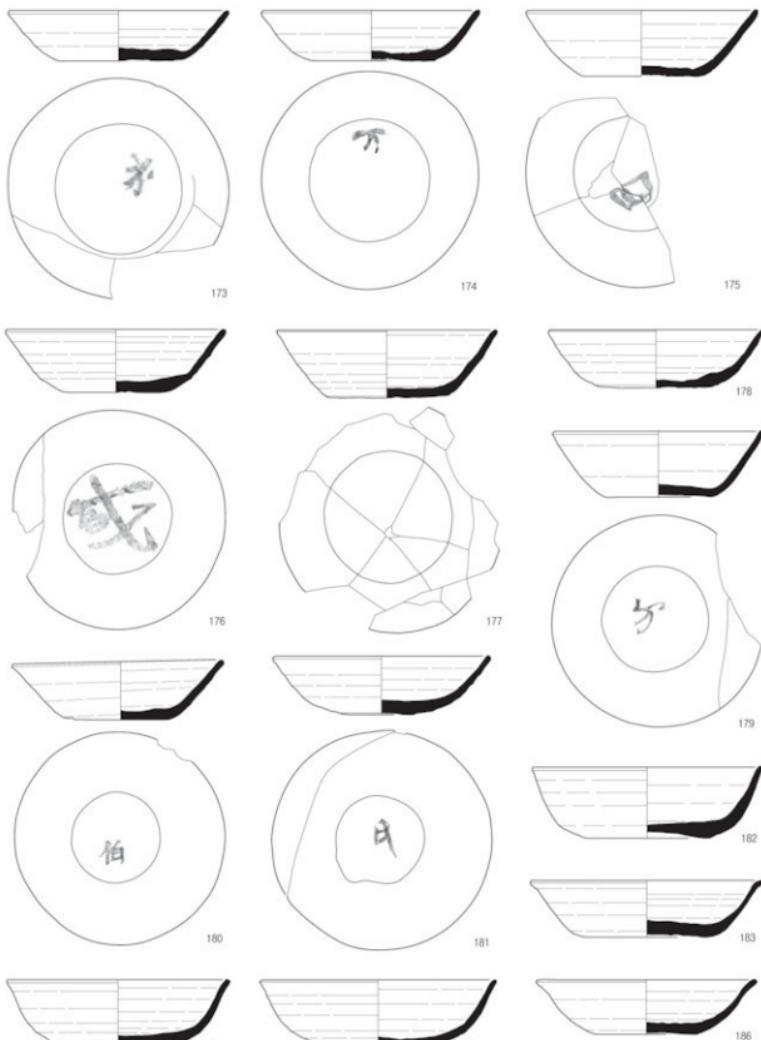
第49図 S D76溝跡出土土器



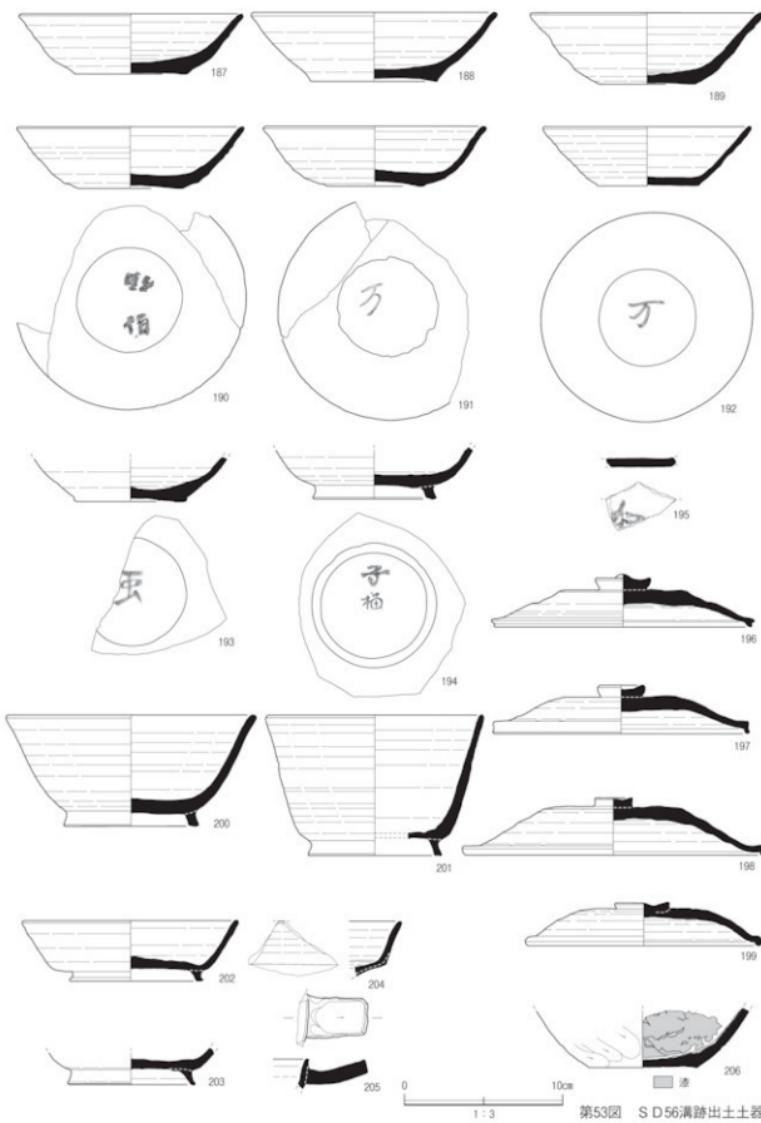
第50図 S D 76溝跡出土土器



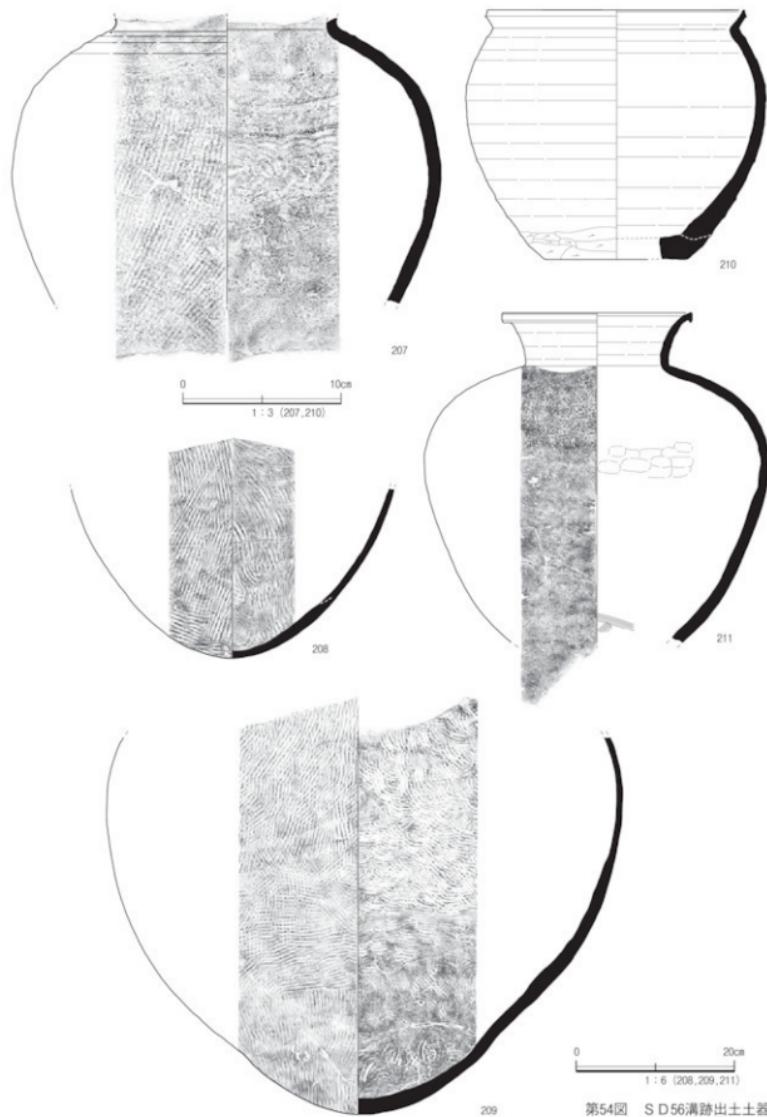
第51図 S D76・56溝跡出土土器



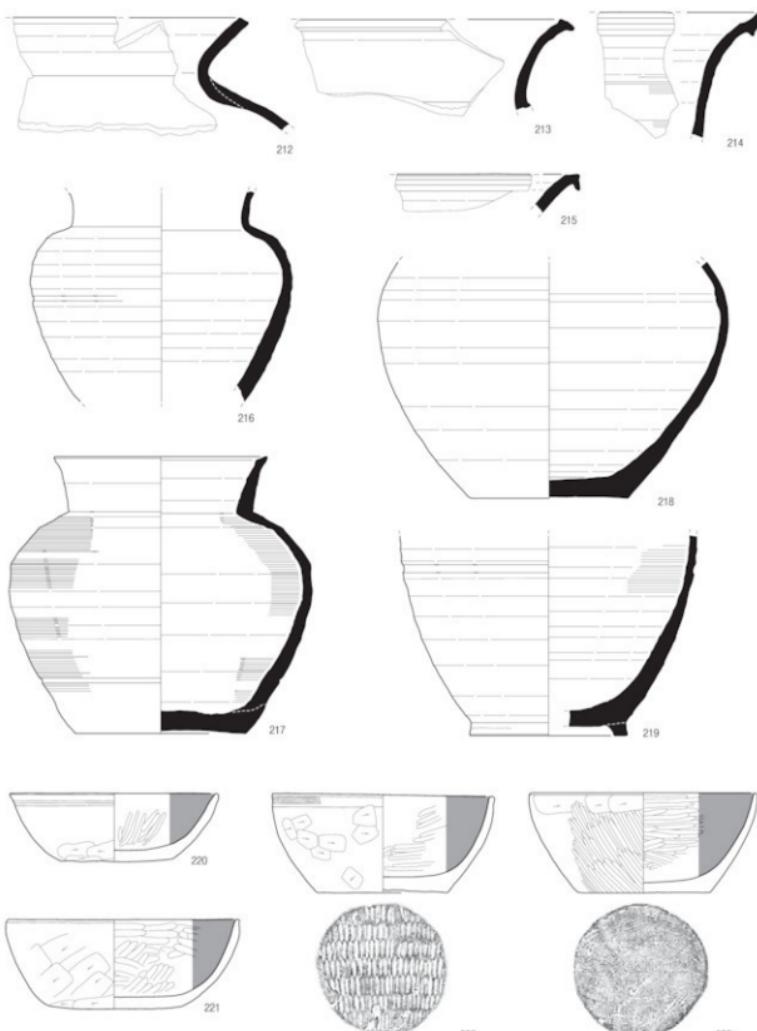
第52図 S D56溝跡出土土器



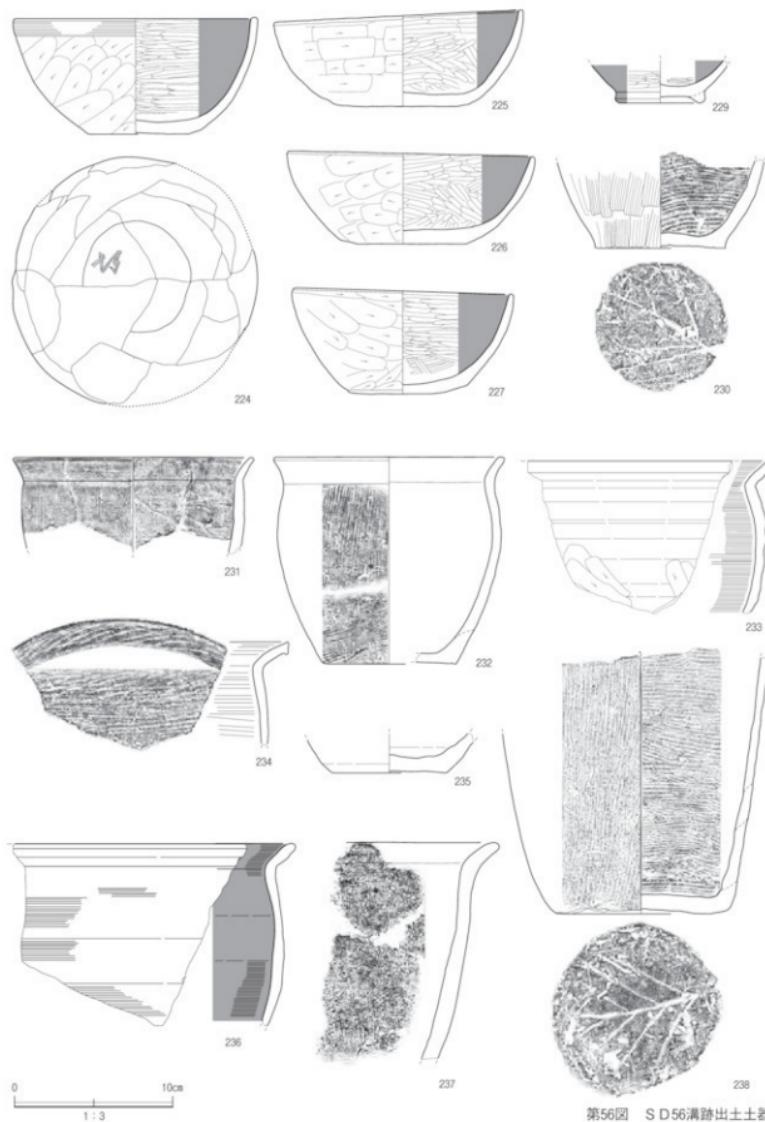
第53図 S D 56溝跡出土土器



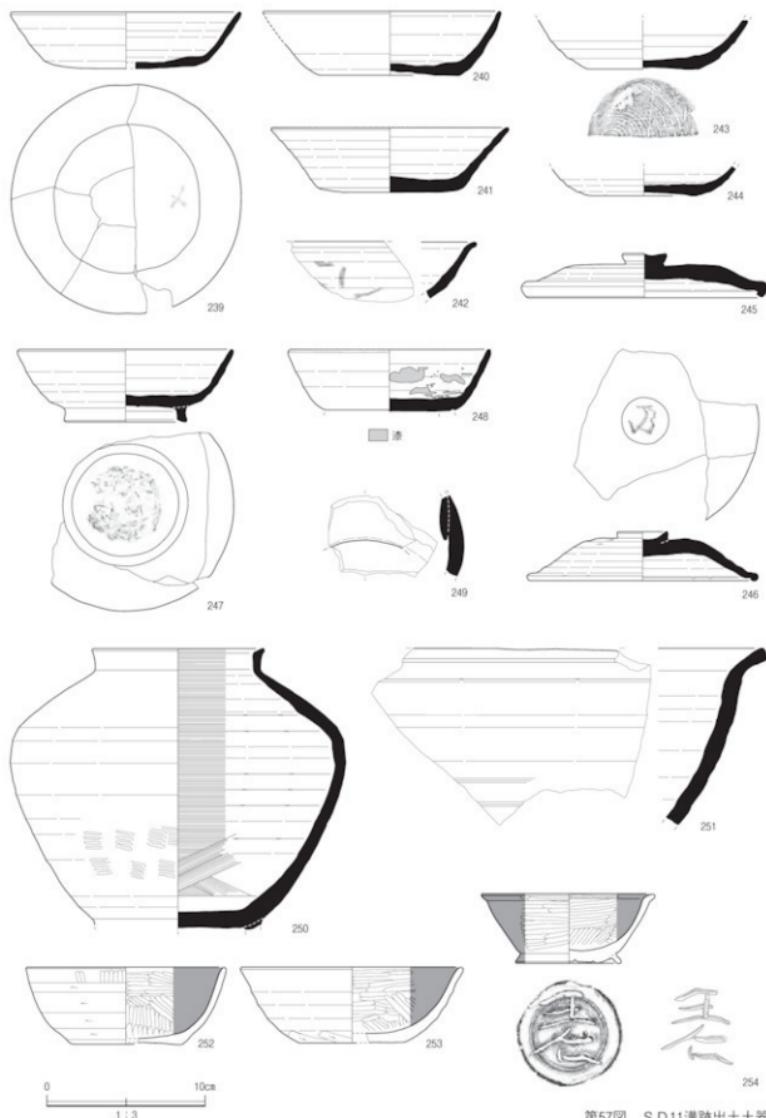
第54図 S D 56溝跡出土土器



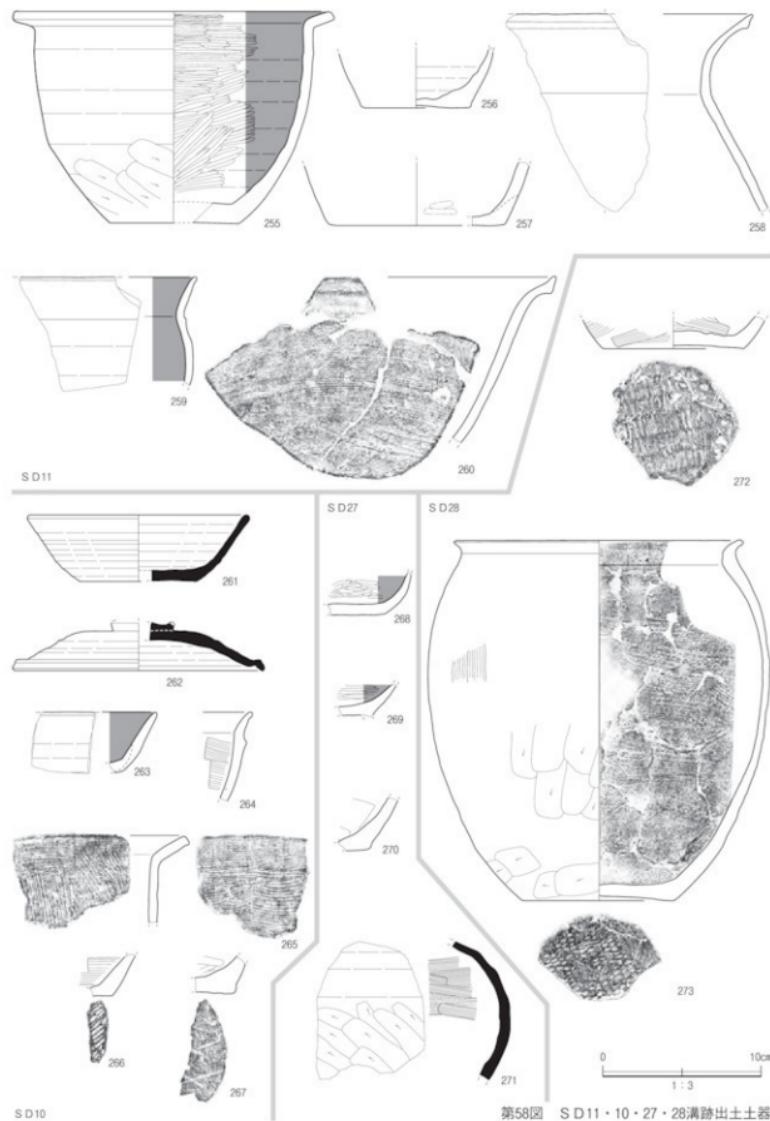
第55図 SD56溝跡出土土器



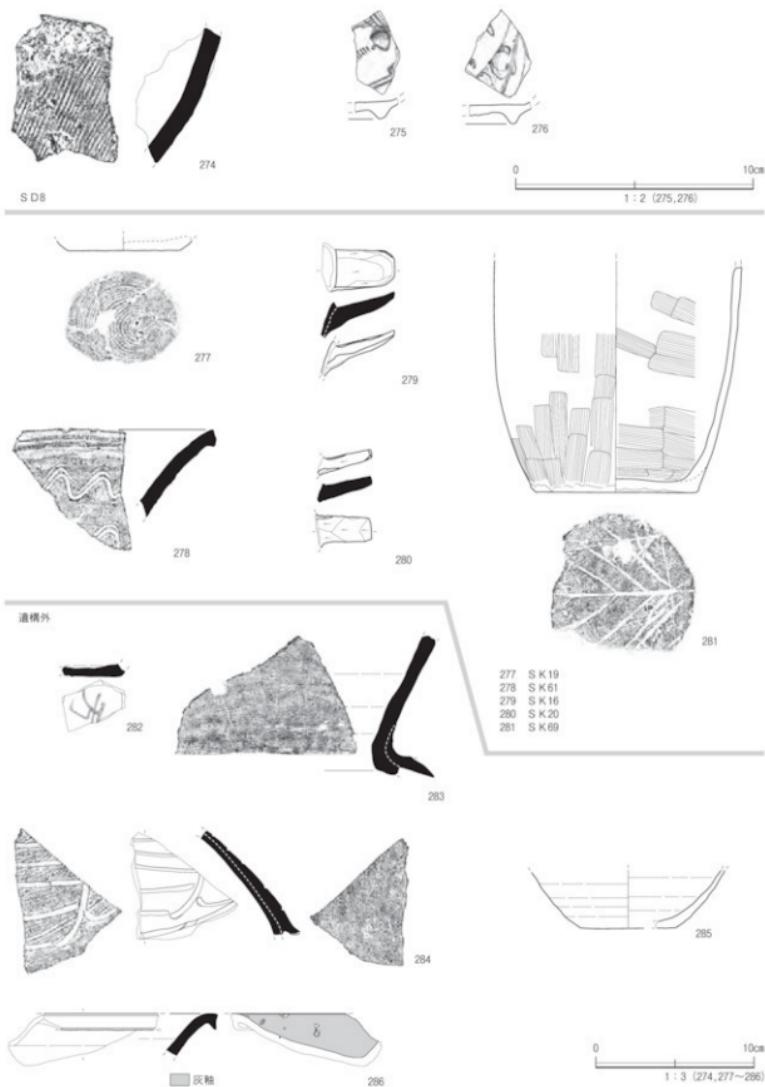
第56図 S D 56溝跡出土土器



第57図 S D11溝跡出土土器



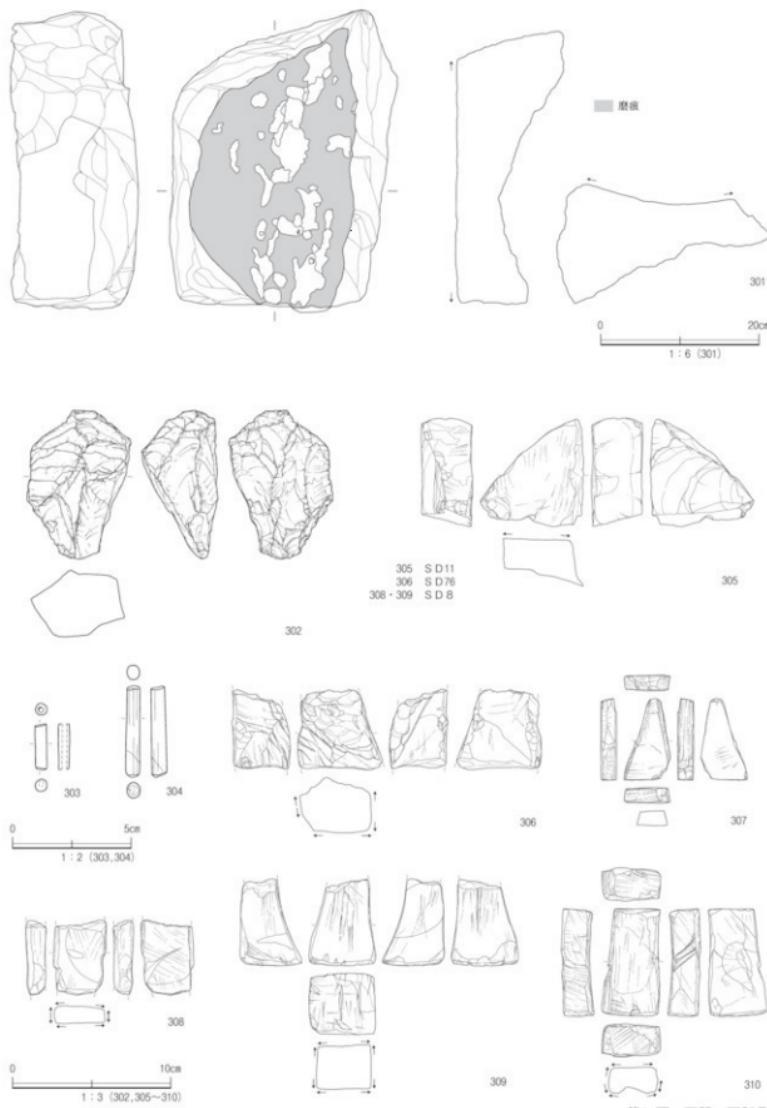
第58図 S D 11・10・27・28溝跡出土土器



第59図 SD 8溝跡・SK 16・19・20・61・69土坑・道構外出土土器



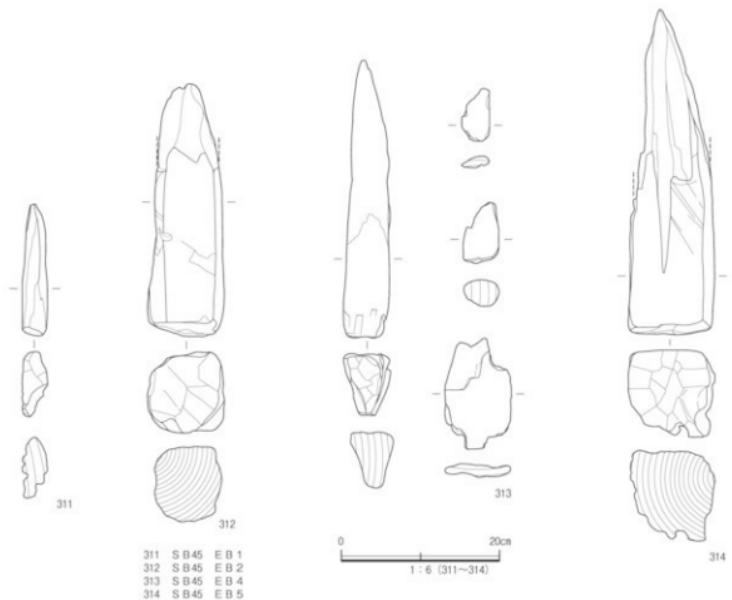
第60図 石器



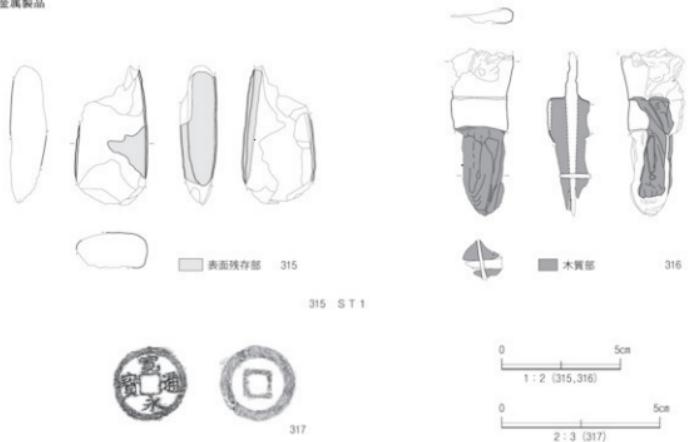
第61図 石器・石製品

三 造構と造物

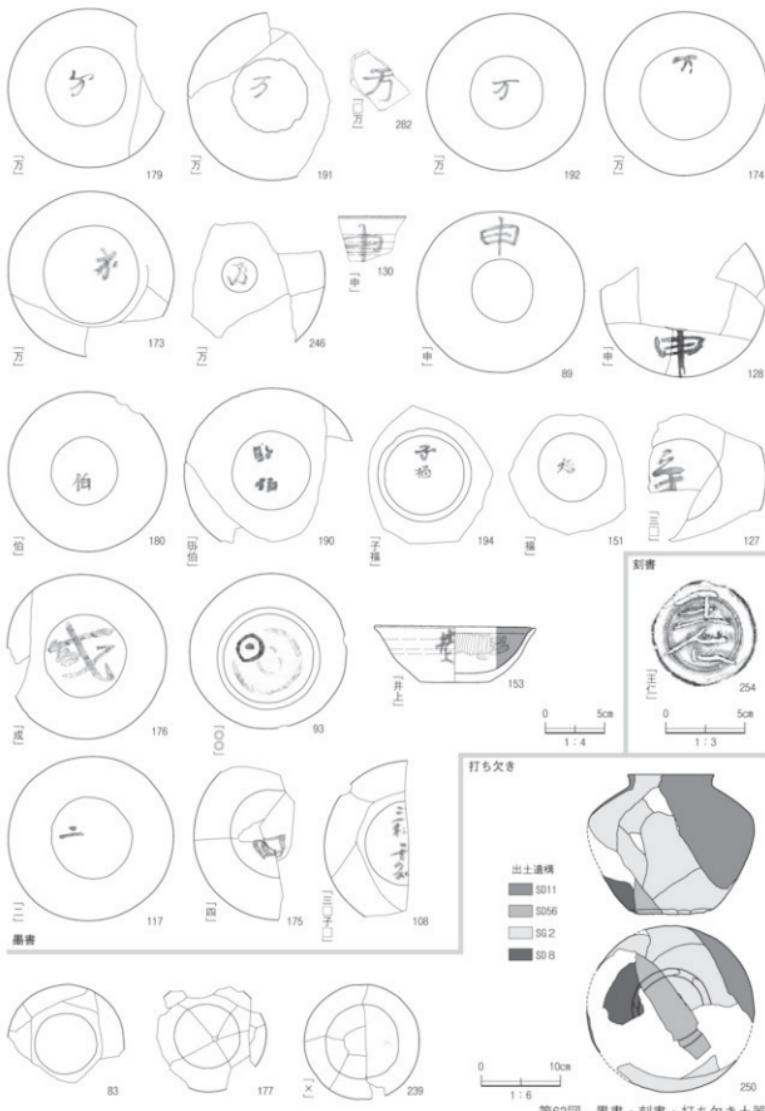
柱材



金属製品



第62図 柱材、金属製品



第63図 墨書・刻書・打ち欠き土器

### III 造構と遺物

表1 繩文時代遺物観察表 ※表1～6の( )は国上復元による推定値を、器高の[ ]は残存値を表す。口径・底径・器高・器厚の単位はmm。

No.	器種	出土地点	層位	RP	口径	底径	器高	器厚	地文	備考	時期
1	深鉢	27-11-12	Vb	163	324	[115]	8	RL-LR (羽状縞)	口縁部 4単位の横位S字状突起 体部 フラビ状突起文 底部 竹管竹による刺突(右向き) 2列 撲糸網貼付		大本8a式
2	深鉢	27-12	Vb			[50]	7		竹管竹による刺突(右向き) 2列 撲糸網貼付		大本8a式
3	深鉢	28-13	Vb			[54]	5.5		口円弧 竹管による刺突(右から) 細い粘土紐貼り付け 撲糸網貼付痕(LR)		大本8a式
4	深鉢	27-11	Va	162	(220)	[37]	8		口円弧 4単位のS字状突起付文 連続弧状貼付文 底部 貼付文(水平2条) 撲糸網貼付痕(LR)	刺突	大本8a式
5	深鉢	25-11	Vb			[25]	6.5		口唇部 划み目 撲糸網貼付痕(LR)		大本8a式
6	深鉢	25-11	Vb			[40]	8	RLカ	頸部 粘土紐貼り付け 竹管押E		大本8a式
7	深鉢	28-11	Va	61		[45]	7		口縁部 粘土紐貼り付け 刺突		大本8a式
8	深鉢	SX46	Y			[28]	6.5		頸部 粘土紐貼り付け 竹管押正		大本8a式
9	深鉢	28-11	Vb	69		[56]	7		口縁部 粘土紐貼り付けによる楕円形区画文 刺突		大本8a式
10	深鉢	28-9	Va	65		[42]	8	RL	口唇部 竹管による刺突(右から) 頸部 半丸輪による強状文		大本8a式
11	深鉢	28-13	Vb			[53]	8		口縁部 粘土紐貼り付けによる小波状文		大本8a式
12	深鉢	25-12	Vb			[51]	7	RL(縦)	体部 沈線		大本8a式
13	深鉢	27-10	Vb			[88]	7	RL(縦)	体部 沈線による曲流溝巻・下垂文		大本8a式
14	深鉢	SX46	Y	73	128	[133]	6.5	LR(縦)	底部に網代痕		大本8a式
15	深鉢	SX42	Y			[45]	8	RL(縦)	摩滅著しい		大本10式
16	深鉢	26-12.13	Vb			[296]	15	LR			
17	深鉢	SD36				[59]	11		沈線による円形文等		後期前業
18	深鉢	24-10	Vb			[70]	5	LR(横)	羊歛状文 内外面スス付着		大胴C1式

表2 弓生時代遺物観察表

No.	器種	出土地点	層位	RP	口径	底径	器高	器厚	地文	備考	分類
19	壺	ST40	EP5			[38]	5		満巻文		I
20	壺	31-14. 32-13	Va	24.27		[61]	6	RL	沈線に刺突文 外面赤彩		IIa
21	壺カ	ST40	F1	79		[33]	5	RLカ	沈線 刺突文 口縁部に繩文 スス付着		IIa
22	壺カ	28-10	Va			[15]	6	RL	刺突文		IIa
23	壺カ	28-14	Va	5		[27]	5.5		刺突文 複合口縁 指頭痕 内面ナデ		IIa
24	壺カ	28-11	Va	59		[31]	4.5	RL	刺突文 波状文 神E		IIa
25	壺カ	ST40				[24]	5.5		沈線 半截竹管文 口縁部に削目カ 内外面 スス付着		IIa
26	壺カ	29-13	Va			[18]	3.5		沈線 楽何学文様 波状口縁		IIb
27	壺カ	28-14	Va			[21]	6	LR	沈線 刺突文		IIb
28	壺カ	ST40				[17]	6	0段多条	口縁部に削目		IIc
29	壺カ	27-12	Va			[27.5]	4.5	熱糸文(R)	内面ナデ		IIc
30	壺カ	27-10	Va			[14]	6	0段多条カ			IIc
31	壺カ	SD36	F2			[23]	7	0段多条カ			IIc
32	壺	ST40	F1	(240)		[87.5]	4.5	0段多条	平口縁 内面ナデ スス付着		IIc
33	壺	ST40	Y	80	268	72	268	6	直前段多条カ 内面ナデ		IIc
34	壺	26-13	Va			[45]	4.5	0段多条	沈線 横位波状		IId
35	變または壺	30-14	Va	23		[56]	[22]	5.5	LRカ	底部無文 底部ケズリ	IIe
36	變または壺	27-11	Vb	78		[57]	[14]	6	底部無文		IIe
37	台付鉢	C区南東	Va			[45.5]	7		沈線 半截竹管文 内面ケズリ・ナデ		IIe

表3 古墳時代遺物観察表

No	器種	出土点	層位	RP	口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	胎土	備考	分類
38	器台	30-14	Va	10	(82.5)	(105)	87	5	ミガキ ケズリ	ナデ	緻密	貫通孔	III-2	
39	器台	27-11-10	Va				[49]	11.5	ハケメ ハケメ		小窪	貫通孔		
40	器台	30-14	Va	16			[51]	9	ミガキ		緻密 赤色粒子	貫通孔		
41	高環	27-12	Va	35			[70]	5	ミガキ ヘラ板 ハケメ		赤色粒子	中実棒状脚部	III-4	
42	高環	24-25-11	Va	62			[72]	4.5	ミガキ ハケメ ミガキ		粗砂	中実棒状脚部	III-4	
43	高環	31-11	Va	49			[77]	12	ミガキ		小窪	中空棒状脚部	III-3	
44	高環	27-14	Va				(108)	[325]	5.5 ミガキ ヘラ	ハケメ	粗砂		III-4	
45	鉢	29-12	Va	54	(90)	35	57	3.5	ケズリ ミガキ ナデ	ハケメ	粗砂	体部外側 黒斑 ミニチュア		
46	鉢	31-12	Va		(46)		[255]	4.5	ミガキ	ミガキ	緻密			
47	鉢	26-12-26-7	Va	102			[45]	4	ハケメ		緻密	赤彩		
48	鉢	32-13	Va	26	(164)	55		4	ハケメ ハケメ	ハケメ ケズリ	小窪	圓上復元		
49	壺	SB45 EB6					[75]	7	ハケメ ハケメ		小窪	受31Va-29-14Va RP1-32番合 有段口縁		
50	壺	26-13	Va	43			[208]	7.5	ハケメ ナデ	ハケメ	粗砂 小窪	有段口縁		
51	壺	28-12	Va	44			[40]	7	ミザミ ミザミ	ハケメ	粗砂 小窪	指突文 有段口縁		
52	壺	29-14	Va	9			[78]	6	ハケメ		粗砂	外面 スス付着 有段口縁		
53	壺	27-14	Va	32			[36]	7			小窪	有段口縁		
54	壺	29-13	Va	39	172		[54]	7	ハケメ ナデ	ハケメ	小窪	有段口縁		
55	壺	29-13	Va		65		[34]	6	ハケメ ヘラナデ	ケズリ	小窪	外面煤付着		
56	壺	30-13-31-11	Va		(100)		[71]	5			赤色粒子	單純直行口縁		
57	壺	27-14-29-13	Va	41			[40]	6.5	ハケメ ナデ		粗砂	單純口縁 外面黒斑		
58	壺	29-12-30-11-13	Va	21	172		[166]	5	ハケメ ナデ	ハケメ	小窪	RP22-55と接合 外面スス付着 球胴形		
59	壺	30-12	Va	48	202		[214]	6.5	ハケメ ナデ	ハケメ ヘラナデ	粗砂	長胴形		
60	壺	26-13-14-27-13	Va		168	40	160.5	3.5	ハケメ ナデ	ナデ	小窪	外面 スス付着	II-1~2	
61	壺	27-14	Va				[55]	5	ケズリ ナデ		小窪			
62	壺	28-14	Va	7			[98]	4.5	ケズリ ナデ	ハケメ	粗砂	外面 スス付着	II-1~2	
63	壺	29-13	Va	20			[87]	7		ハケメ	粗砂			
64	壺	29-13	Va	19		50	[31]	5	ケズリ ナデ	ケズリ	粗砂			
65	壺	30-10-11	Va			48	[345]	5	ハケメ		小窪	内面 著化物付着		
66	壺	29-13	Va	47		45	[42]	5	ケズリ ナデ		小窪	内面 スス付着		
67	壺	30-11	Va	56		45	[31]	8.5		ヘラナデ	粗砂			
68	瓶	31-12	Va		28		[55]	5	ハケメ ケズリ	ハケメ ヘラ板	小窪	単孔		
69	不明	27-14	Va		長	幅					緻密			
				31		55	6.5							
70	土鍋	30-14	Va	17			26.5	28			緻密	黒斑		
71	土鍋	32-13	Va	25			38.5	39	38	ケズリ	粗砂			
72	土鍋	30-14	Va	18			59	37		胎糞丘積	粗砂	石英		

表4 須恵器・土師器観察表

No.	種別	器種	出土 道標	層位	RP	口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	胎土	備考	
73	須恵器	壺	ST1	Y		143	45	45	4.5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	織密		
74	須恵器	壺	ST1		154	160	61	48	6	ロクロ	ロクロ	圓錐型	小釋		
75	土師器 <small>(黒土器)</small>	壺	ST1	Y	(130)	(46)	47	5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	織密	内面黑色處理		
76	土師器 <small>(黒土器)</small>	壺	ST1			50	[21]	3					粗紗		
77	土師器 <small>(黒土器)</small>	壺	ST1			63	[24]	5		ミガキ			織密 金雲母	内外面黑色處理	
78	土師器	壺	ST1			[78]	5	ロクロ	ナデ				粗紗	内外面付着痕	
79	土師器	壺	ST1			[265]	45						織密	内面に付着物	
80	土師器	鉢	ST1	Y		[50]	5						織密	内面黑色處理△	
81	須恵器	壺	SG2	F1	136	84	43	6	ロクロ	ロクロ	圓錐型	小釋			
82	須恵器	壺	SG2			[12]	4	ロクロ	ロクロ	圓錐型	粗紗		底部墨書「三」△		
83	須恵器	壺	SG2		147	77	40	5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	長石		打ち欠き△ 重ね焼き痕	
84	須恵器	壺	SG2		(141)	90	39	5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	小釋 粗紗	底部に墨痕・底部ヘラケズリ		
85	須恵器	壺	SG2	F1	130	65	42	5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	長石			
86	須恵器	壺	SG2		84	140	54	46	5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	織密	板状圧痕	
87	須恵器	壺	SG2		[134]	[66]	40	4	ロクロ	ロクロ	圓錐型	織密	底部墨書「□」△	内面に墨痕 外面重ね焼き痕	
88	須恵器	壺	SG2	F1		56	[27]	4	ロクロ	ロクロ	圓錐型	織密 全雲母	外面「□」車△		
89	須恵器	壺	SG2	上層	155	140	32	44.5	4	ロクロ	ロクロ	圓錐型	織密 全雲母	体部墨書「車」正位 板状圧痕	
90	須恵器	壺	SG2		85	150	68	49	5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	底部切り離し失敗		
91	須恵器	蓋	SG2		(164)	[28]	4	ロクロ	ロクロ				織密	横み欠損 重ね焼き痕	
92	須恵器	舟形	SG2			155	72	59	4	ロクロ	ロクロ	圓錐型	小釋 全雲母		
93	須恵器	舟形	SG2	上層	156	132	86	49	4	ロクロ	ロクロ	圓錐型	小釋	底部墨書「○ 大・小2つ 小さい○は後から書き足している 見込に墨痕	
94	須恵器	頭形	SG2		[106]	[35.5]	45	ロクロ	ロクロ				織密	取手部分削り	
95	須恵器	壺	SG2			[105]	55	カキメ	カキメ	ロクロ			織密	長頭謙 自然釉 突帯	
96	土師器	壺	SG2		157	154	60	48	5	ケズリ	ミガキ	ケズリ	小釋 赤色粒子	編積み痕頭著 外面に黒斑	
97	土師器 <small>(黒土器)</small>	壺	SG2		86	137	55	53	4.5	ロクロ	ミガキ	圓錐型	織密 全雲母	内面黑色處理	
98	土師器 <small>(黒土器)</small>	舟形	SG2		153	160	72	30	5.5	ロクロ	ミガキ	圓錐型	多量の石斑	内面黑色處理	
99	土師器	壺	SG2		(250)	[120]	45	ハケメ	ハケメ				粗紗 赤色粒子	長胴堀 スス付着	
100	土師器	壺	SG2			[34]	5	ロクロ	ハケメ				粗紗	突帯付き	
101	土師器	壺	SG2			63	[33]	75	ケズリ	ナデ	圓錐型	小釋	長胴堀		
102	土師器 <small>(黒土器)</small>	壺	SG2			85	[42]	6	ケズリ	ミガキ	木葉模	粗紗	内面黑色處理		
103	土師器	壺	SG2			58	[40]	4	ロクロ	ロクロ	圓錐型	赤色粒子 全雲母			
104	土製品	羽口	SG2			[70.5]	[39]	厚	[18]				粗紗	ふいご羽口	
105	須恵器	壺	SD54	F2.3	140	84	35	4.5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	小釋	内外面に火だしき		
106	須恵器	壺	SD54		158	152	86	41	5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	粗紗		
107	須恵器	壺	SD54	F3	140	74	41	5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	織密			
108	須恵器	壺	SD54	F2.3	140	70	38	5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	粗紗 右尖粒混	底部墨書「三□子□」打ち欠き		
109	須恵器	壺	SD54	F2.3	148	62	48	4.5	ロクロ	ロクロ	圓錐型	粗紗 多量の含雲母	SD76と接合		

No	種別	器種	出土 遺構	層位	RP	口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	胎土	備考
110	須恵器	壺	#	SD54				17	55	ロクロ	ロクロ		粗砂	棲をもつ
111	須恵器	甕		SD54 F1		[27]	4			ロクロ	ロクロ		粗砂	内面 灰破り
112	須恵器	甕		SD54 F4		[108]	7			ヘラナデ	カキメ		粗砂	
113	須恵器	壺	SD76	F3	147	146	78	33	4	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗砂 赤色粒子	焼成不良
114	須恵器	壺	SD76	F23		148	82	38	4	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付		多量の黒色 長石
115	須恵器	壺	SD76	F	152	136	77	34	4	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗砂	
116	須恵器	壺	SD76	F23	(134)	(76)	36	45	4	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付		底部墨書「万」#
117	須恵器	壺	SD76	F23	144	140	69	41	4	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付		白色小窪 底部墨書「二」
118	須恵器	壺	SD76	F23	[140]	[70]	35	4		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗砂	
119	須恵器	壺	SD76	F23	144	66	43	4		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗密	多量の粗砂
120	須恵器	壺	SD76	F3	148	131	66	44	4	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗密 ハタチテ	多量の粗砂 外側（底部～体部）がれ
121	須恵器	壺	SD76		151	135	65	37.5	5	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗密	多量の粗砂 内面墨痕
122	須恵器	壺	SD76	F1.23		62	[35]	4		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗砂	小窪 墨痕（内面）
123	須恵器	壺	SD76	F1.23	143	76	42	4		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗砂	多量の長石
124	須恵器	壺	SD76	F3	150	136	60	34	5	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗砂	長石
125	須恵器	壺	SD76	F1	(134)	[64]	50	5		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付		長石
126	須恵器	壺	SD76	F1	145	142	52	48	4	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗砂	
127	須恵器	壺	SD76	F23	(142)	(68)	41	4		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗密	底部墨書「三十」
128	須恵器	壺	SD76	F1.23	139	(61)	42	4		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗密	体部墨書「舟」逆位 内外面火だしき
129	須恵器	壺	SD76	F23		(60)	[16]	4.5		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗密	底部墨書「□」
130	須恵器	壺	SD76	F1		[37]	4			ロクロ	ロクロ		粗密	体部墨書「申」
131	須恵器	蓋	SD76	F23	[150]		26	5		ロクロ	ロクロ		小窪	横み部分欠損・重ね焼き痕
132	須恵器	柄耳	SD76	F1.23	142	81	47.5	4.5		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗密	底部に習青 転用規々 打ち欠きヶ
133	須恵器	柄耳	SD76	F1.23	(146)	[75]	48	4		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗密	長石
134	須恵器	壺	SD76	F1		[27]	3			ロクロ	ロクロ		粗砂	体部墨書「□」
135	須恵器	柄耳	SD76	F3	149	142	84	70	5	ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗砂	少量の小窪
136	須恵器	柄耳	SD76	F2.3	(137)		65	35		ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	粗砂	多量の粗砂 台部欠損
137	須恵器	鉢	SD76	F2.3	(340)	[117]	9			ロクロ	ロクロ		粗砂	
138	須恵器	甕	SD76	F1.23	146		[82]	10		ロクロ	ロクロ		粗密	大形甕 外面に2条の輪描波状文
139	須恵器	甕	SD76	F1		[77]	6			ロクロ	ロクロ		粗砂	
140	須恵器	甕	SD76	F2.3		[77]	13			ナデ タタキ	ロクロ		粗砂	
141	須恵器	甕	SD76	F2.3		[95]	12.5			ロクロ	ロクロ		粗砂	大形甕
142	須恵器	甕	SD76	F2.3		[233]	8			ロクロ	ロクロ		粗砂	内外面に自然釉
143	須恵器	甕	SD76	F1.23		[127]	7			ロクロ	ロクロ		長石	短頭甕 外面に自然釉 脊部火はね
144	須恵器	甕	SD76	SG2 F1		[58]	7			ロクロ	ロクロ		粗砂	長須甕 脊部突帯
145	須恵器	甕	SD76	F2.3		[66]	10			ロクロ	ロクロ		粗密	短頭甕
146	須恵器	甕	SD76	F2.3	[66]	[45.5]	6			ロクロ	ロクロ	圓錐 底付	小窪 雲母	内面墨付着部分が底部断面まで浸透 台部欠損
147	須恵器	附属	SD76	F2.3	143	[114]	154	44	5.5	ロクロ	ロクロ		粗密	附属部に箆攝斜格子沈模文 4単位 内張・外張を有する脚部内面に自然釉

## III 造構と造物

No	種別	器種	出土 遺構	層位	RP	口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	胎土	備考	
148	土師器	壺	SD76	F2.3		(160)	(72)	42	7	ケズリ	ミガキ	粗糲	内面黒色処理	黒旗	
149	土師器	壺	SD76	F2.3			[60]	55	ハケメ	ミガキ	ハケメ	粗糲 金雲母	内面黒色処理		
150	土師器	壺	SD76	F1		(140)	60	50	35	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	粗糲 金雲母		
151	土師器	壺	SD76	F2.3			58	[28]	4	ロクロ	ミガキ	羅文(?)	緻密 金雲母	底部に墨青「福」 内面黒色処理 打ち欠き〇	
152	土師器	壺	SD76	F1		141	60	48	3	ロクロ	ミガキ	羅文(?)	緻密 金雲母	底部に墨青「打」 内面黒色処理 打ち欠き〇	
153	土師器	壺	SD76	F1		136	57	48	4	ロクロ	ミガキ	羅文(?)	緻密 金雲母	体部墨書「井上」 内面黒色処理	
154	土師器	壺	SD76	F1			[29.5]	3	ロクロ	ミガキ		緻密	体部墨書「口」 内面黒色処理		
155	土師器	壺	SD76	F2.3		筒み [35]	[25]	7		ミガキ	ミガキ	緻密	内面黒色処理		
156	土師器	桶形	SD76	F2.3			37	[19]	55	ミガキ	ミガキ	羅文(?)	粗糲 金雲母	内外面黒色処理	
157	土師器	桶形	SD76	F2.3			60	[38]	4	ロクロ	ミガキ	羅文(?)	緻密 金雲母	内面黒色処理	
158	土師器	桶形	SD76	F2.3/ SG2		[90]	[60]	6	ロクロ	ミガキ	羅文(?)	粗糲	内面黒色処理	黒旗	
159	土師器	甕	SD76	F2.3			[81]	65	ハケメ	ハラナデ		小理 長石 赤色粒子	輪積み痕顯著		
160	土師器	甕	SD76	F2.3			[64.5]	9	ハケメ	ハケメ		小理 金雲母	体部黒旗		
161	土師器	甕	SD76	F2.3			[72.5]	7	ハケメ	ミガキ		緻密 金雲母	緻密 金雲母	鉢カ 内面黒色処理 外面部縁一部黒旗	
162	土師器	甕	SD76	F1		78	[49]	5	ハケメ	ハケメ	ハラナデ	木葉痕 粗糲 金雲母	長胴甕 内面にスス付着		
163	土師器	甕	SD76	F1.2/ SG2		90	[54]	6	ハケメ	ハケメ	木葉痕	粗糲	長胴甕		
164	須恵器	壺	SD56	F2		[158]	[92]	36	4	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	粗糲	焼成不良	
165	須恵器	壺	SD56	F2.3		136	74	32	5	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	多量の小窪		
166	須恵器	壺	SD56	F3上	126	133	78	34	45	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	長石	底部にヘラキズ	
167	須恵器	壺	SD56	F3上	112	146	86	35.5	45	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	長石		
168	須恵器	壺	SD56	F1.3	110	148	92	41	5	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	金雲母		
169	須恵器	壺	SD56	F3	121	150	86	41	47	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	多量の小窪	内外面火だすき	
170	須恵器	壺	SD56	F3		149	88	45	6	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	緻密	内外面火だすき	
171	須恵器	壺	SD56	F2.3	160	144	75	44	6.5	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	長石		
172	須恵器	壺	SD56	F3上	111	165	85	43	47	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	緻密		
173	須恵器	壺	SD56	F4	139	140	80	32	4	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	多量の長石	底部墨書「万」 焼成不良	
174	須恵器	壺	SD56	F3	130	138	78	32	4	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	粗糲混	底部墨書「万」	
175	須恵器	壺	SD56	F1		145	76	42	5	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	長石	底部墨書「西」カ 打ち欠き〇	
176	須恵器	壺	SD56	F4	138	140	70	40	4	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	多量の小窪	底部墨書「成」	
177	須恵器	壺	SD56	F1.2		140	82	43	5	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	小理 長石	回転ヘラケズリ 打ち欠き	
178	須恵器	壺	SD56	F3	104	136	75	37	45	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	小理		
179	須恵器	壺	SD56	F3上	120	134	68	42	4	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	粗糲混	底部墨書「万」 焼成硬い	
180	須恵器	壺	SD56	F3上	123	134	58	36.5	45	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	小理	底部墨書「伯」	
181	須恵器	壺	SD56	F3	141	137	55	37	5	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	長石	底部墨書「武」 又は「月」カ	
182	須恵器	壺	SD56	F3上	129	146	76	45	4.6	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	多量の小窪		
183	須恵器	壺	SD56	F3中	134	148	74	36	3	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	多量の長石		
184	須恵器	壺	SD56		103	142	74	43.5	4	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	長石 金雲母		
185	須恵器	壺	SD56	F4		150	74	44	4.5	ロクロ	ロクロ	羅文(?)	粗糲		

No	種別	器種	出土 遺構	層位	RP	口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	胎土	備考	
186	須恵器	壺	SD56 F3中	142	140	64	34.5	3.5	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	少量の長石 ゆがみあり		
187	須恵器	壺	SD56 F3上	125	142	70	38	5	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	緻密		
188	須恵器	壺	SD56 F3下	105	156	80	43.5	5	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	粗糲	内外面火だすき	
189	須恵器	壺	SD56 F3上	128	148	61	45	5	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	小縫	外面火だすき	
190	須恵器	壺	SD56 F23上	117	144	67	39	4	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	長石	底部墨書「伯 伯」(天地逆向)	
191	須恵器	壺	SD56 F3	136	141	62	38	4	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	小縫	底部墨書「万」△	
192	須恵器	壺	SD56 F3	122	132	62	38	3	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	粗糲	底部墨書「万」△	
193	須恵器	壺	SD56 F2		(68)	[28]	4	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	長石	底部墨書「虫」△ 打ち欠き△		
194	須恵器	舟形	SD56 F3上	119		78	[32.5]	4.5	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	緻密	底部墨書「子福」 舟用模 打ち欠き	
195	須恵器	壺	SD56			6	6	6	口クロ	口クロ	口クロ		粗糲	底部墨書「□」	
196	須恵器	蓋	SD56 F1	167	筒み	35	33.5	4	口クロ	口クロ	口クロ	金雲母	天井部 回転ヘラケズリ		
197	須恵器	蓋	SD56 F1	162.5	筒み	30	30.5	6	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	緻密	内面使用痕 重ね焼き痕	
198	須恵器	蓋	SD56 F1	82	191	筒み	23	6	口クロ	口クロ	口クロ	金雲母	内外面重ね焼き痕		
199	須恵器	蓋	SD56 F2 <sup>2</sup>	150	筒み	35	27.5	5	口クロ	口クロ	口クロ	金雲母	天井部 回転ヘラケズリ		
200	須恵器	舟形	SD56	83	158	85	70.5	5.5	口クロ	口クロ	口クロ	底板縫付	緻密	内外面に溝離あり 重ね焼き痕	
201	須恵器	舟形	SD56 F4		[138]	[84]	89	5	口クロ	口クロ	口クロ	粗糲			
202	須恵器	舟形	SD56 F23上	116	136.5	84.5	38.5	3	口クロ	口クロ	口クロ	長石	重ね焼き痕		
203	須恵器	舟形	SD56 F1			80	[23]	4	口クロ	口クロ	口クロ	金雲母	墨付着 重△		
204	須恵器	舟形	SD56 F3			[35]	3	3	口クロ	口クロ	口クロ		緻密		
205	須恵器	舟形	SD56 F3			[18.5]	9		口クロ			小縫	耳部分にケズリ		
206	須恵器	甕	SD56 F3		(68)	[37.5]	5.5	ケズリ	タタキ	ロクロ	粗糲	漆付着 手持ちヘラケズリ			
207	須恵器	甕	SD56 F3中	135		[180]	8	タタキ	アマ カキメ	ロクロ	長石	外面に自然釉			
208	須恵器	甕	SD56 F3下	124		[214]	9	タタキ	アマ 青海波	丸底 叩き出し	緻密	底部3ヶ所に焼台跡			
209	須恵器	甕	SD56 F13下/ SD8	124/ 159		[480]	17	タタキ	アマ 青海波	丸底 叩き出し	長石	底部に異なる胎土を使用			
210	須恵器	甕	SD56 F11/12	162	(89)	157.5	7	ロクロ	タタキ	ロクロ	長石多い	底部付近手持ちヘラケズリ			
211	須恵器	甕	SD56 F3	108	[24]	[416]	14	タタキ	アマ 青海波	ロクロ	長石	口縁部+一部に自然釉調			
212	須恵器	甕	SD56 F13			[72]	6	ロクロ	タタキ	ロクロ	大量の長石				
213	須恵器	甕	SD56 F4			[57]	6	ロクロ	タタキ	ロクロ		緻密			
214	須恵器	甕	SD56 F1			[79]	6	ロクロ	カキメ	ロクロ	長石	内面 自然釉			
215	灰陶器	臼	SD56 F2			[24]	6.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ		緻密	286と同一個体△		
216	須恵器	蓋	SD56 F14/ SD76 F23		(117)	[133]	8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	カキメ	長石多い 短頭壺 自然釉			
217	須恵器	蓋	SD56 F3.4 Y		(134)	108	175	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	カキメ	多量の長石 短頭壺		
218	須恵器	蓋	SD56 F3.4	106		100	[149.5]	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ		長石 短頭壺		
219	須恵器	蓋	SD56 F3/ SD76 F23		(100)	[126]	8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	カキメ	底板縫付	粗糲 長頭壺 内面にも自然釉		
220	土師器 (燒土器)	壺	SD56 F3上	113	(132)	67	43.5	5	ケズリ ナデ	ミガキ	ケズリ	大量の粗糲 長石 金雲母	内面黑色処理 口縁部ヘラナデ		
221	土師器 (燒土器)	壺	SD56 F3上	127	(148)	84	56.5	5.5	ケズリ	ミガキ	ケズリ	金雲母	内面黑色処理 使用による磨耗		
222	土師器 (燒土器)	壺	SD56 F1.3中	137	140	83	62.5	5	ケズリ ナデ	ミガキ	ケズリ	粗糲 金雲母	内面黑色処理		
223	土師器 (燒土器)	壺	SD56 F2		[144]	84	63.5	5	ミガキ	ミガキ	ケズリ	多量の金雲母 赤色粒子	内面黑色処理		

### III 造構と造物

No	種別	器種	出土 遺構	層位	RP	口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	胎土	備考
224	土師器	壺	SD56 SD70	F1.2		154	66	73	5	ケズリ ナデ	ミガキ	ケズリ	粗紗 全雲母	底部墨書「持」△ 打ち欠き△
225	土師器	壺	SD56	F3中	131	158	83	61	65	ケズリ	ミガキ	ケズリ	赤色粒子	内面黒色処理 黑斑
226	土師器	壺	SD56 SD70	F3中	133	157	80	58.5	5	ケズリ	ミガキ	ケズリ	粗紗 全雲母	内面黒色処理 黑斑
227	土師器	壺	SD56 SD55	F1上	(140)	70	68	65	ケズリ	ミガキ	ケズリ	粗紗 全雲母	内面黒色処理	
229	土師器	舟形	SD56	F1	87		58	[27]	6	ミガキ	ミガキ	周縁部	緻密 全雲母	内外面黒色処理
230	土師器	甕	SD56	F3上	107		82	[56]	7.5	ハケメ	ハケメ	本業痕	粗紗	
231	土師器	甕	SD56	F3	(152)		[61]	7	ハケメ	ハケメ		粗紗	内面・断面スヌ付着	
232	土師器	甕	SD56	F2.3	(146)	(84)	131	6	ハケメ ナデ	ハケメ		小窪 ナデ	全雲母 赤色粒子	
233	土師器	甕	SD56	F2.34				[96]	6	ロクロ	ハケメ		緻密	内外面に炭化物付着
234	土師器	甕	SD56	F3下	140			[67]	6	ハケメ	ハケメ		粗紗	
235	土師器	甕	SD56	F3上	118		72	[25]	6	ロクロ	ロクロ		粗紗 全雲母 赤色粒子	
236	土師器	甕	SD56	F1				[115]	5.5	ハケメ	ハケメ		粗紗	内面黒色処理
237	土師器	甕	SD56	F1.2	(264)		[137]	9	ハケメ	ハケメ		粗紗 全雲母		
238	土師器	甕	SD56	F3中	132	(108)	[162]	5	ハケメ	ハケメ	本業痕	粗紗	長胴甕	
239	須恵器	壺	SD11	F3他	88	146	90	36	3.5	ロクロ	ロクロ	周縁部	小窪	底部墨書「×」打ち欠き
240	須恵器	壺	SD11	F1		150	90	40.5	4	ロクロ	ロクロ	周縁部	粗紗	
241	須恵器	壺	SD11	F3	98	150	90	41	4	ロクロ	ロクロ	周縁部	小窪 長石	焼成堅い
242	須恵器	壺	SD11	F3				[37]	4.5	ロクロ	ロクロ		緻密	体部墨書「□」
243	須恵器	壺	SD11	F3		(70)	[31]	5	ロクロ	ロクロ	周縁部	長石 小窪	底部刻書「キ」△	
244	須恵器	壺	SD11	F2		(64)	[18]	3	ロクロ	ロクロ	周縁部	小窪	転用規 内面に墨痕	
245	須恵器	蓋	SD11		150	横 28	28	10	ロクロ ケズリ	ロクロ	周縁部	緻密 ナデ	転用規	
246	須恵器	蓋	SD11	F1.2	145	横 31	31	8	ロクロ	ロクロ	周縁部	粗紗 小窪	横みに墨書「万」 転用規△ 打ち欠き△	
247	須恵器	舟形	SD11	F3	91	136	78	46	4	ロクロ	ロクロ	周縁部	粗紗	底部外腹に黒斑
248	須恵器	舟形	SD11	Y	99	(128)		39	4	ロクロ	ロクロ	周縁部	粗紗	内面に漆黒付着
249	須恵器	横瓶	SD11	F1			[51]	10				粗紗	閉塞部	
250	須恵器	甕	SD11 SD55 SD52	F1	97	109	(105)	[178]	7	ロクロ ナダ	カキメ		緻密 小窪	短須塙 打ち欠き・自然軸 竹部火鉢
251	須恵器	鉢	SD11	F1	101			[112]	9	ロクロ	カキメ	ロクロ	小窪	
252	土師器	壺	SD11	Y	93	(125)	(70)	49	4	周縁部 ケズリ	ミガキ	周縁部	粗紗 全雲母	内面黒色処理 外面黒斑
253	土師器	壺	SD11	F1.23	89	(140)	(68)	48	5	ロクロ ケズリ	ミガキ	ヘラナギ	金雲母 石英	緻密
254	土師器	舟形	SD11	F2	96	109	66	44	3.5	ミガキ	ミガキ			底部に刻書「王仁」姓名
255	土師器	鉢	SD11	F2.3	(202)	(81)	134	6	ロクロ ケズリ	ミガキ		粗紗 全雲母	内面黒色処理	
256	土師器	甕	SD11	F1.2		70	[38]	6.5	ロクロ	ロクロ	周縁部	粗紗 全雲母	内面黒色処理	
257	土師器	甕	SD11	Y.F.3	94	(110)	[40]	7.5		指ナデ			粗紗 全雲母	
258	土師器	甕	SD11				[125]	6				小窪 全雲母		
259	土師器	甕	SD11	F1.2			[68]	4.5	ロクロ ケズリ	ミガキ		粗紗 全雲母	内面黒色処理	
260	土師器	壺	SD11	F3			[105]	8	カキメ ケズリ	カキメ		粗紗 赤色粒子		
261	須恵器	壺	SD10	Y	95	(141)	74	42	4	ロクロ	ロクロ	周縁部	緻密	
262	須恵器	蓋	SD10		(160)	横 (40)	[30]	7	ロクロ	ロクロ		長石 全雲母		

No	種別	器種	出土 遺構	層位	RP	口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	胎土	備考
263	土師器	环	SD10		[38]	6	ロクロ	ミガキ		全雲母	内面黒色處理			
264	土師器	夷	SD10		[56]	6		ハケメ		赤色粒子多量 粗砂				
265	土師器	夷	SD10		[55]	5.5	ハケメ	ハケメ		粗砂 雲母				
266	土師器	夷	SD10		[26]	8	ハケメ	ハケメ		網代板 雲母				
267	土師器	夷	SD10		[24]	9		ハラナア	木葉痕	粗砂 赤色粒子	雲母			
268	土師器	环	SD27		[27]	5		ミガキ	圓輪刻印	微砂	内面黒色處理	被熱		
269	土師器	夷	SD27		[21]	4	ミガキ	ミガキ		緻密	内面黒色處理			
270	土師器	夷	SD27		[32]	7		ハケメ	木葉痕	彌・利度子 透射時				
271	須恵器	壺々	SD27		[80]	5	ロクロ	ロクロ カキメ		粗砂				
272	土師器	夷	SD28		(90)	[20]	6.5	ケズリ ケズリ	ハケメ	網代板 木葉痕	小煙 全雲母			
273	土師器	夷	SD28		(183)	(96)	227.5	5	ケズリ ハケメ	ハケメ	網代板 全雲母	外面下半、底部にスス痕跡		
274	須恵器	夷	SD8		[105]	11	タタキ			微砂	焼台	2次焼成 壺片付着		
275	染付	皿	SD8		[85]	3				緻密	染付	Z76と同一個体		
276	染付	皿	SD8		[9]	3				緻密	染付	Z75と同一個体		
277	土師器	夷々	SK19		(71)	[65]				圓輪刻印	小煙	底部のみ		
278	須恵器	夷	SK61 SD11		[55]	8.5	ナデ	ナデ		長石	頭部に大きな2列の鶴嘴波状文			
279	須恵器	双耳	SK16		[29]	8	ケズリ			粗砂				
280	須恵器	双耳	SK20		[165]	7	ケズリ			小煙				
281	土師器	夷	SK69 SD76 F2.3 102		(102)	[1445]	5	ハケメ	ハケメ	木葉痕 赤色粒子	粗砂 赤色粒子	ゆがみあり		
282	須恵器	环	9-18 Ⅲ		[65]	5				圓輪刻印	長石	底部墨書「□万」 三または五万ヶ		
283	須恵器	夷	B区北西 Ⅲ		[90]	8	ロクロ	ロクロ		長石多量 赤色粒子	外面刻書「×」	燒成堅い		
284	須恵器	壺々	A区東 Ⅱ		[67]	10	ハケメ	カキメ		緻密	鳥形			
285	土師陶器	环	17-11 Ⅲ		(60)	[37]	3	ロクロ	ロクロ	圓輪刻印	粗砂			
286	灰陶陶器	皿口重	山口山 Ⅲ		[33]	6.5	ロクロ	ロクロ		緻密	灰かぶり	215と同一個体ヶ		

表5 石器・石製品計測表

No	種別	器種	出土遺構等	層位	RP	長	幅	厚	石材	備考
287	石器	石鏟	ST40	F1	75	27	13	3	頁岩	平基
288	石器	石鏟	26-10	Va	64	45	19	36	頁岩	平基
289	石器	削器	27-13	Va		52	19	95	頁岩	
290	石器	匙狀石器	25-11	Vb	72	52	28	95	頁岩	未成品
291	石器	匙狀石器	26-11	Vb		72	26	12	頁岩	
292	石器	匙狀石器	28-7	Va	4	102	45	15	頁岩	
293	石器	匙狀石器	25-12	Va	67	98	46	26	頁岩	
294	石器	削器	25-12	Vb		83	35	18	頁岩	未成品
295	石器	石鑿	26-12	Vb	81	32	15	35	瑪瑙	
296	石器	石鑿	25-13	Va		39	24	9	頁岩	欠損
297	石器	削器	26-11	Va	63	106	28	9	頁岩	
298	石器	搔器	24-11	Vb	71	56	32	9	珪質頁岩	基部欠損
299	石器	匙狀石器	24-10	Va		120	73	20	頁岩	トランシェ様
300	石器	磨製石斧	28-11	Vb	70	115	53	345	砂質凝灰岩	先端欠損
301	石器	石鑿	26-11	Vb	[3725]	[270]	[151]		鞍山岩	重量17.5kg 下部欠損
302	原石	管玉母石	27-14	Va		63	42	28	碧玉	
303	石製品	管玉	26-13	Va	74	185	5	45	滑石々	石材 嵌入品
304	石製品	石團状品	C区 XO	Va		38.5	5.5	6	珪化木々	縱方向に磨痕
305	石製品	砾石	SD11			66	65	32	凝灰岩	砾面2面
306	石製品	砾石	SD76	F1		46	52	36	凝灰岩	砾面4面、被熱
307	石製品	砾石々	24-15	II		52	28	9	流紋岩々	
308	石製品	砾石	SD8			44	29	11.5	凝灰岩	砾面5面
309	石製品	砾石	SD8			55	36	36	凝灰岩	砾面5面
310	石製品	砾石	8-17	III		68	36	18	凝灰岩	砾面4面

表6 木製品・金属製品計測表

No	種別	器種	出土遺構等	層位	長	幅	厚	材	備考
311	木製品	柱材	SB45 EB1		170	80	30	コナラ	
312	木製品	柱材	SB45 EB2		320	95	90	コナラ	
313	木製品	柱材	SB45 EB4		350	80	45	コナラ	4片に分離
314	木製品	柱材	SB45 EB5		410	105	100	コナラ	底面・側面2面残存
315	金属製品	不明	ST 1		58	31	15	鉄	
316	金属製品	刀子	B区 XO		70.5	26.5	22	鉄	柄木質部残存
317	金属製品	錢貨	23-5	II	23.7	23.2	1.1	銅	寛永通宝（古寛永）

## IV 自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

庚壇遺跡（南陽市長瀬所在）は、置賜盆地北部の織機川左岸の沖積地に立地する。これまでの調査により、弥生時代の住居跡をはじめ、古代の溝・土坑・住居跡、近世以降の墓、河川跡等が検出されている。今回の自然科学分析調査では、縄文時代～古墳時代の包含層を対象に当時の古環境を推定する目的で、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。また、当時の植物利用についての情報を得るために、住居跡の土壤を対象にした微細物分析や、木棺や柱根の樹種同定を実施する。

### I 試 料

土壤試料は、C区の1～3地点で各3点づつの試料を採取した。1地点はC区北壁中央付近に位置し、弥生時代の住居跡が検出された微高地にあたる。また、2地点はC区南東角付近、3地点はC区南西角付近に位置し、ともに微高地よりもやや低い流路内等にあたる。このうち、腐植の集積した弥生時代～古墳時代の遺物包含層（V層）は、1地点の試料番号1・2、2地点の試料番号1・2、3地点の試料番号2にあたる。1地点ではVa層（試料番号1）、Vb層（試料番号2）に分かれるが、他の地点では不明瞭である。また、2地点および3地点ではV層の下位に灰色～青灰色のシルト・粘土が認められ、その下位がVI層の極粗粒砂となる。このシルト・粘土層は、2地点の試料番号3（2-3）、3地点の試料番号3（3-3）にあたる。分析試料は、1地点の試料番号1、2（1-1, 1-2）と3地点の試料番号2、3（3-2, 3-3）の4点について、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

微細物分析用紙料は、弥生時代後期の住居跡（S T 40）内の焼土、水洗済の試料、単体の種実が存在する。焼土に関しては土壤1点のうち、2kgを抽出して分析に用いる。水洗済みの試料は、1試料について浮遊物と沈殿物に分けられており、さらに浮遊物については複数の袋に分割されている試料も存在する。床面（Y）の土壤の洗い出し済み残渣（No.2）は55点中5点を選択する。洗い出し時の上澄み浮遊物は、50点全点（No.42）を行う。柱穴（E P 1, 2, 4-37, 39-41）の土壤の洗い出し済み残渣40点（No.3-41）、洗い出し時の上澄み浮遊物40点（No.43-81）、リスト未掲載試料1点（E P 38：上澄み浮遊物）に関しても全点実施するが、試料が多いものに関しては、試料の一部を取り出して、その中から種実遺体を抽出し同定する。単体種実1点（No.82：26-13G-Vb）に関しては、これを同定する。また、樹種同定試料は、古墳時代前期の柱根（No.83：S B45 E P 4）と近世～近代と考えられている木棺（No.84：S H 9）の2点である。

## 2 分析方法

### (1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、Witkowski *et al.*（2000）などを参照し、分類体系はRound *et al.*（1990）に従う。

同定結果は、海水生種、海～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能も示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率20%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたって、海水～汽水生種は小杉（1988）、淡水生種は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は、Asai & Watanabe（1995）の環境指標種をそれぞれ参考とする。

### (2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

### (3) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現頻

向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集を図化する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

#### (4) 微細物分析

炉跡の焼土（No 1）は、2 kgを水に一晩浸した後、0.5 mm目の篩を通して水洗する。水洗後の残渣と、床面や柱穴の土壤の洗い出し済み残渣（No 2~41）・洗い出し時の上澄み浮遊物（No 42~81）を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や動物遺存体などの遺物を抽出する。

種実の形態的特徴を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川、1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか、2000）等との対照から種類を同定し、個数を求め、表に示す。

分析後の植物遺体等は、種類毎に容器に入れ、分析残渣は袋に戻して保管する。No 1、42~81から得られた種実は、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

#### (5) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1990）、伊東（1995、1996、1997、1998、1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

### 3 結 果

#### (1) 硅藻分析

結果を表7、図64に示す。1地点の試料番号1、2と3地点の試料番号3は化石の産出が少なかったが、3地点の試料番号2は比較的多い。化石が産出した試料の完形殻の出現率は約50%前後である。産出分類群数は、合計で28属50分類群である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

化石が産出した3地点の試料番号2は、塩分濃度に対する適応性では淡水生種が優占するが、淡水～汽水生種も約10%産出する。淡水生種は、水生珪藻が優占するが、陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻も約20%産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、真+好流水性種（流水域に最もよく生育する種）と流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が多産する。

主要種は、有機汚濁の進んだ富栄養水域や塩分を含んだ汽水域にも耐性のある *Nitzschia palea*、流水性で中～下流性河川指標種群の *Meridion circulae* var. *constrictum*、好流水性の *Placoneis elginensis* var. *neglecta*、*Surirella angusta*、流水不定性の *Cymbella tumida*、*Gomphonema parvulum*である。中～下流性河川指標種群は、河川中～下流部や河川沿いの河

表7 硅藻分析結果

種 類	生態性			環境		1地点	3地点
	塩分	pH	流水	指标種	1	2	3
				E2	-	-	-
Nitzschia lorenziana Grunow	Meh						
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogb-Meh	al-l	r-ph	LS	-	-	-
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogb-Meh	ind	ind	S	5	6	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogb-Meh	al-l	ind		1	-	-
Achnanthes crenulata Grunow	Ogb-ind	al-bi	r-ph	T	-	-	1
Amphora ovalis (Kuetz.) Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogb-ind	al-l	ind	T	-	-	2
Caloneis hyalina Hustede	Ogb-ind	ind	ind	RA	-	-	-
Caloneis silula (Ehr.) Cleve var. silicula	Ogb-ind	al-l	ind		1	-	-
Cymbella tumida (Breb.) Van Heurck	Ogb-ind	al-l	ind	T	-	-	3
Cymbella turigida Grunow	Ogb-ind	al-l	r-ph	K.T.	1	-	-
Cymbella spp.	Ogb-ind	unk	unk		1	-	-
Diadesmis confervacea Kuetzing	Ogb-ind	al-bi	ind	RBS	-	-	1
Diadesmis contenta (Grunex Van Heurck) D.G.Mann	Ogb-ind	al-l	ind	R.A.T.	-	1	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve var. ovalis	Ogb-ind	al-l	ind	T	2	-	-
Encyonema slesiacum (Bleisch) D.G.Mann	Ogb-ind	ind	ind	T	1	6	2
Epithemis adnata (Kuetz.) Brehisson	Ogb-ind	al-bi	ind		1	1	-
Eunotia minor (Kuetz.) Grunow var. minor	Ogb-hob	ind	ind	O.T.	1	1	-
Fragilaria capucina Desmazières var. capucina	Ogb-ind	al-l	ind	T	-	1	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen var. vaucheriae	Ogb-ind	al-l	r-ph	K.T.	-	-	1
Frustulia constricta Krasske	Ogb-ind	ind	ind	RI	-	1	-
Frustulia rhomboides var. saxonica (Rabh.) De Toni	Ogb-hob	ac-l	r-ph	P.O.	-	-	-
Frustulia rhomboides var. saxonica f. capitata (A.Mayer) Hust.	Ogb-unk	unk	unk	RB	-	-	-
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogb-ind	ind	ind	U	-	4	-
Gomphonema spp.	Ogb-ind	unk	unk		-	2	-
Gyrosigma spp.	Ogb-unk	unk	unk		1	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogb-ind	al-l	ind	RAJ	2	2	2
Lenticula mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogb-ind	al-l	ind	RAS	1	1	4
Meridion circulare var. constructum (Ralfs) V.Heurck	Ogb-ind	al-l	r-bi	K.T.	3	1	11
Navicula constans Hustede	Ogb-unk	unk	unk		-	1	-
Navicula kotschyana Grunow	Ogb-unk	al-l	ind		1	-	-
Navicula viridula (Kuetz.) Ehrenberg	Ogb-unk	al-l	r-ph	K.U.	-	2	-
Navicula spp.	Ogb-unk	unk	ind	RA	1	-	-
Neidium alpinum Hustede	Ogb-ind	al-l	ind	RB.U	-	1	-
Nitzschia brevisima Grunow	Ogb-ind	al-l	r-ph	U	-	1	-
Nitzschia frustulum (Kuetz.) Grunow var. frustulum	Ogb-ind	ind	ind	RBS	-	1	-
Nitzschia nana Grunow	Ogb-ind	al-l	ind		1	-	-
Nitzschia paleacea (Grun.) Grunow	Ogb-ind	al-l	ind	U	-	1	-
Nitzschia pumila Hustede	Ogb-unk	unk	unk		-	1	-
Nitzschia umbonata (Ehr.) Lange-B.	Ogb-ind	al-l	ind	U	-	1	-
Nitzschia spp.	Ogb-unk	unk	unk		-	2	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogb-ind	ind	ind	RA	1	1	3
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W.Smith	Ogb-ind	ind	ind	S	2	2	2
Pinnularia obscura Krasske	Ogb-ind	ind	ind	RA	-	1	-
Pinnularia schoenleberi Kramer	Ogb-ind	ind	ind	RI	-	1	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogb-ind	ac-l	ind	RBS	1	4	4
Pinnularia spp.	Ogb-unk	unk	unk		1	3	-
Placonea elliptica (Greg.) E.J.Cox	Ogb-ind	al-l	ind	O.U.	1	-	-
Placonea digyna var. neglecta (Krasske) H.Kobayasi	Ogb-ind	al-l	r-ph	U	2	1	6
Planothidium lanceolatum (Breb.) Round et Burkhardt	Ogb-ind	al-l	r-ph	K.T.	-	2	-
Reiniera sinuata (W.Greg.) Kocakel et Stoerner	Ogb-ind	ind	r-ph	K.T.	-	2	2
Rhicosphenia abbreviata (C.Agardh) Lange-B.	Ogb-hil	al-l	r-ph	K.T.	-	1	-
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogb-ind	ind	ind	U	1	-	2
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogb-ind	ind	ind	RB	-	1	-
Stauroneis spp.	Ogb-unk	unk	unk		1	-	-
Stauroneis lapponica (Grun.) Van Heurck Williams & Round	Ogb-ind	al-l	ind		-	1	-
Surirella angusta Kuetzing	Ogb-ind	al-l	r-bi	U	-	5	-
Synedra ulna (Nitzsch.) Ehrenberg	Ogb-ind	al-l	ind	U	1	-	1
海水生種					0	0	0
海水・汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	1
淡水・汽水生種					0	1	0
淡水生種					23	28	91
且葉化石類					28	35	101

## 凡例

H.R.	: 塩分濃度に対する適応性	pH	: 水素イオン濃度に対する適応性	C.R.	: 流水に対する適応性
Meh	: 汽水生種	al-bi	: 真アルカリ性種	l-bi	: 真止水性種
Ogb-Meh	: 淡水・汽水生種	al-l	: 好アルカリ性種	l-ph	: 好止水性種
Ogb-hil	: 貧塩好酸性種	ind	: pH不定性種	ind	: 流水不定性種
Ogb-ind	: 貧塩不定性種	ac-l	: 好酸性種	r-ph	: 好流水性種
Ogb-hob	: 貧塩嫌酸性種	ac-bi	: 真酸性種	r-bi	: 真流水性種
Ogb-unk	: 貧塩不明種	unk	: pH不明種	unk	: 流水不明種

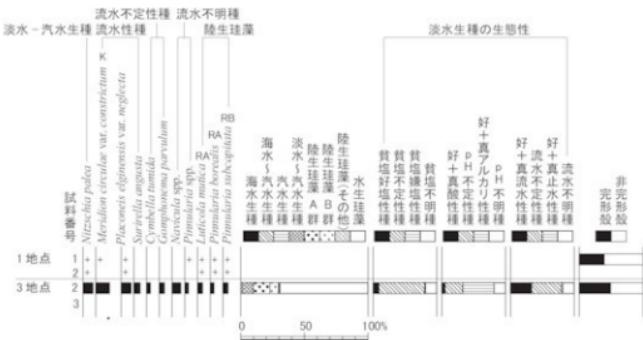
## 環境指標種群

E2: 汽水質干潟指標種 (小杉, 1988)

K: 垂下性河川指標種, L: 最下流性河川指標種, O: 潽沼湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)

S: 好酸性種, U: 忠城適応性種, T: 好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)

R: 附生藻類 (RA: A群, RB: B群, RI: 未分化, 伊藤, 鶴内, 1991)



海水 - 水生 - 淡水生産率、各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生産の生態性の比率は淡水生産の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

環境指標種群  
K:中下流性河川指標種 (安藤, 1990)  
R:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

第64図 主要珪藻化石群集の層位分布

岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する種群である (安藤, 1990)。また、陸生珪藻は耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Luticola mutica*, *Pinnularia borealis*、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻B群の *Pinnularia subcapitata* が産出する。なお、珪藻化石の産出の少なかった1地点の試料番号1、2も前試料とはほぼ同様の種類が産出したが、3地点の試料番号3は無化石に近い。

## (2) 花粉分析

結果を表8に示す。いずれの試料も花粉化石の保存状態が悪く、検出数も少ない。木本花粉では、コナラ亜属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属が少量検出される。草本花粉では、イネ科やヨモギ属が検出される。

## (3) 植物珪酸体分析

結果を表9、図65に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。

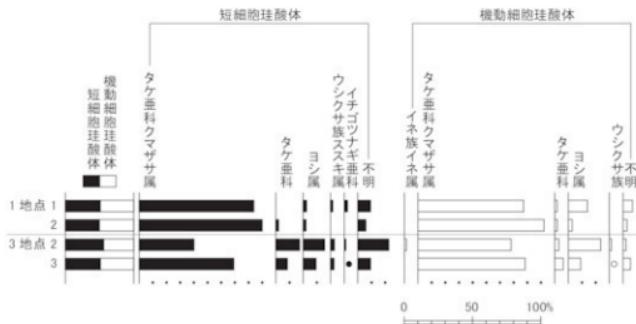
いずれの試料でもクマザサ属の産出が目立ち、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亞科なども検出される。なお、3地点の試料番号2ではヨシ属の割合も高い。また、3地点の試料番号2では、栽培植物であるイネ属の機動細胞珪酸体がわずかに認められる。

## (4) 微細物分析

結果を表10に示し、S T 40の種実検出状況を表11に

表8 花粉分析結果

種類	試料番号	1地点				3地点			
		1	2	2	3	1	2	2	3
<u>木本花粉</u>									
ツバキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マツ属	2	3	2	-	-	-	-	-	-
スギ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
クルミ属	1	1	2	1	-	-	-	-	-
クマシデ属-アサガ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	4	1	-	-	-	-	-	-	-
ブナ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ属	14	-	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	4	1	-	-	-	-	-	-	-
ツタ属近似種	1	-	-	-	-	-	-	-	-
シナノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<u>草本花粉</u>									
イネ科	29	3	9	-	-	-	-	-	-
カヤフリグサ科	2	-	2	-	-	-	-	-	-
フユクサ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	12	1	6	1	-	-	-	-	-
キク亜科	1	-	2	-	-	-	-	-	-
不明花粉	2	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ類胞子	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類胞子	12	7	16	29	-	-	-	-	-
合計	木本花粉	31	7	5	1	-	-	-	-
草本花粉	46	4	19	1	-	-	-	-	-
不明花粉	2	0	0	0	-	-	-	-	-
シダ類胞子	12	7	17	29	-	-	-	-	-
総計(不明を除く)	89	18	41	31	-	-	-	-	-



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。

第65図 植物珪酸体群集の層位分布

表9 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	1地点		3地点	
		1	2	2	3
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>					
タケモククマザサ属	99	91	69	81	
タケモク	.	2	30	10	
ヨシ属	3	2	27	11	
ウシクサ族ススキ属	2	-	5	3	
イネゴナギヤシ科	3	-	2	1	
不明ヒビ型	8	1	16	2	
不明ヒゲシバ型	-	1	6	1	
不明ダングサ型	3	4	17	8	
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>					
イネ族イネ属	-	-	2	-	
タケモククマザサ属	88	94	92	87	
タケモク	2	2	4	7	
ヨシ属	16	3	32	10	
ウシクサ族	-	-	2	1	
不明	8	3	3	6	
合計		218	203	207	228
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>					
イネ科葉部短細胞珪酸体	118	101	172	117	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	114	102	135	111	
合計		232	203	307	228

まとめた。S T 40では、木本6分類群（オニグルミ、サワグルミ、キハダ、トチノキ、ミズキ、タラノキ）312個、草本16分類群（オモダカ科、イネ、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、カラムシ属、ギシギシ属、タデ属、アカザ科、イノコヅチ属、キケマン属、マメ科、カタバミ属、エノキグサ、センダングサ属、キク科）192個の種実が検出され、床面（Y）から栽培植物のイネの胚乳4個が確認された。種実以外では、郊跡（E L）から動物遺存体が検出された。いずれも骨片であり、60個程度存在する。いずれも、1~3mmと微細である点や、細片となり形態的な特徴の把握が困難であることから、種類の特定は難しい。他に、各試料からマツ属複維管束亜属の葉、炭化材、蘚苔類、昆虫、不明A（動物由来？）等が確認された。また、C区の26~13 Va (No82)は、スマモの核が1個同定された。以下に、本分析にて得られた種実の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

#### <木本>

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。炭化しており黒色を呈する。完形ならば径3~4.5cm程度の広卵体で頂部がやや尖り、1本の明瞭な縫合線がある。破片の大きさは5mm以下。核は硬く緻密で、表面には縫合方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉に入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

- ・サワグルミ (*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.) クルミ科サワグルミ属

表10 微細物分析結果

注) 表中の数字は、種差などの個数を示す。試料中より確認された種差以外の箇所数は、○(空一多用)、△(間隔)と示す。

果実の破片が検出された。炭化しており黒色、偏球体。径3mm程度。頂部に太く短い刺状突起がある。果皮は木質で、表面には10本程度の鋸い縦隆条が配列する。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・スモモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。灰褐色、レンズ状広楕円体でやや偏平。長さ1.1cm、幅9mm、厚さ6.5mm程度。基部は丸く臍点がある。1本の明瞭な縦の縫合線がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ツバカン科キハダ属

核（内果皮）の破片が検出された。黒褐色、完形ならば長さ4mm、幅2mm、厚さ1.5mm程度の半橢円形でやや偏

表11 ST40出土の種実検出状況

第1回の性状検査結果												
変化		変化していない状態良好な種実(後代からの流入?)										
オニツツルミ	サニツキ	イネ科	マツコ科	トチノキ科	オモダカ科	エノコロガ科	カラシニク属	ギンジン属	アカガ科	キタバニ属	エノキダカサ属	セキク科
EL	2	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	No.
Y	37	25	1	4	1	2	42	29	6	2	30	27
EPI	25	1	-	-	-	-	-	-	2	-	1	343
EP2	6	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	444
EP4	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	545
EP5	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	646
EP6	14	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	747
EP7	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	848
EP8	3	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	949
EP9	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1050
EP10	3	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1151
EP11	6	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1252
EP12	8	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1353
EP13	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1454
EP14	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1555
EP15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1656
EP16	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1757
EP17	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-	1858
EP18	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1959
EP19	9	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2060
EP20	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2161
EP21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2262
EP22	10	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2363
EP23	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2464
EP24	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2565
EP25	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2666
EP26	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2767
EP27	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2868
EP28	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2969
EP29	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3070
EP30	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	3171
EP31	6	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	3272
EP32	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	3373
EP33	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3474
EP34	16	5	-	-	-	-	-	-	2	-	-	3575
EP35	14	7	-	-	-	-	-	-	1	-	-	3576
EP36	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	13777
EP37	4	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	3878
EP38	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
EP39	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3979
EP40	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	4080
EP41	14	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	4181

い孔がある。内果皮は厚く硬く、表面にはやや深い縦溝が数本走る。

・タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

核（内果皮）が検出された。茶～黒褐色、半月形でやや偏平。長さ2mm、幅1.3mm程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。  
＜草本＞

・オモダカ科 (Alismataceae)

種子が検出された。茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。長さ1.5mm、幅0.8mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳が検出された。長楕円形でやや偏平。長さ5mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度。胚乳は炭化しており黒色を呈す。一端に胚が脱落した凹部があり、表面はやや平滑で、2～3本の隆条が縱列する。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

果実が検出された。淡～黄褐色、狹卵～半偏球体でやや偏平。長さ2.8mm、径1.6mm程度。果皮は薄く柔らかく、表面には微細な網目模様が縱列する。

・イネ科 (Gramineae)

果実が検出された。上述のイネやエノコログサ属以外の形態上差異のある複数の種を一括した。淡～黄褐色、半扶卵体でやや偏平。長さ2～3mm、径0.5～1mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縱列する。表面に毛が密生する個体や、分析中に発芽した個体が確認された。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。黒褐色、長さ1.5～2mm、径1.5mm程度の凸レンズ状広卵体で背面はやや高く稜があり、頂部は尖る、表面は光沢があり不規則な波状の横皺状模様が発達する、ホタルイ属 (*Scirpus*) に似る個体や、長さ1.2mm、径0.8mm程度の三稜状狭倒卵体で果皮は硬く、表面にはごく微小な疣状突起が密布する、カヤツリグサ属 (*Cyperus*) に似る個体、淡～黒褐色、径1～2.5mm程度三稜またはレンズ状倒卵体で頂部の柱頭部分がわずかに伸び、表面には微細な網目模様がありざらつく、スゲ属 (*Carex*) に似る個体などがみられる。

・カラムシ属 (*Boehmeria*) イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1mm程度。頂部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

・ギシギシ属 (*Rumex*) タデ科

果実が検出された。灰褐色、三稜状広卵体。径1.5～2mm程度。三稜は鋭く明瞭で、両端は急に尖る。果皮表面はやや平滑。果実周囲には、果実を取り巻く内花被片が発達する。花被の破片は茶褐色、径3mm程度の心円形で粗い網目模様をなし、縁には歯牙がある。中肋は瘤状に膨れる。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。黒褐色、長さ2～3mm、径1.5

mm程度の丸みのある三稜状卵体で、果皮表面はやや平滑で光沢が強い。ハナタデ (*Polygonum caespitosum* Blume subsp. *yokusaiianum* (Makino) Danser) またはイヌタデ (*Polygonum longisetum* De Bruyn) に似る個体が多く確認された。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子の破片が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1 mm程度。基部は凹み、脐がある。種皮表面には脐を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・イノコズチ属 (*Achyranthes*) ヒユ科

果実を包む花被が検出された。淡褐色、皮針状円柱体。長さ5 mm、径2 mm程度。基部の両側から針状の小苞が伸び、先端は外側にやや曲がる。花被表面には縦線条がある。分析中に発芽した個体が確認された。

・キケマン属 (*Corydalis*) ケシ科

種子が検出された。黒褐色、腎臓形円形で両凸レンズ形。径1.5 mm程度。基部は凹み、脐がある。種皮表面には、円錐状の微細突起が脐を取り囲むように同心円状に配列する。

・マメ科 (Leguminosae) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色を呈す。腎臓形で長さ2.5 mm、径2 mm程度。腹面中央部は済入し、長梢円形の脐がある。種皮表面はやや平滑で光沢がある。今回検出された種子は栽培種とは区別され、野生種の類と思われる。

・カタバミ属 (*Oxalis*) カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、倒卵形で偏平。長さ1.5 mm、幅1 mm程度。基部はやや尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には2~3本の縦線条と10本程度の肋骨状横線条が並び、わらじ状を呈す。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、倒卵形。長さ2 mm、径1.6 mm程度。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には細かい粒状の凹みが密布しづらつく。

・センダングサ属 (*Bidens*) キク科

果実が検出された。灰褐色、倒皮針形で偏平。長さ4.8 mm、幅2.5 mm程度。頂部の両肩に1個ずつ長さ1 mm程度の芒があり、下向きの逆刺が散生する。果実正中線上には細い縦線条がある。果皮表面には伏毛が密生する。

・キク科 (Compositae)

果実が検出された。淡褐色、線状長梢円体。長さ1.5 mm、径0.5 mm程度。頂部は切形で円形の脐があり、冠毛が伸びる。冠毛を含めた長さは2.5 mm程度。果皮表面には微細な網目模様が縦列する。

(5) 樹種同定

樹種同定結果を表12に示す。木棺は針葉樹のマツ属複維管束亜属、柱根は落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直树脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急~

表12 樹種同定結果

番号	直構	器種	樹種
No83	SD45	EP4	柱根 コナラ属コナラ亜属コナラ節
No84	SH9		木棺 マツ属複維管束亜属

やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は柔細胞、仮道管、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成されるが、水平樹脂道とエビセリウム細胞は壊れているものが多い。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顯著な鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圓部は1-2列、孔圓外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。

## 4 考 察

### (1) 古環境推定

珪藻分析の結果、3地点の試料番号2からは珪藻化石が産出したが、それ以外の地点では化石が少なかった。3地点では、中～下流性河川指標種群を含む流水性種と流水不定性種で占められ、池や湖沼等の止水域に生育する種は殆んど産出しなかった。したがって、本試料は流水域で堆積したものと考えられる。また、化石の少なかった試料においても中～下流性河川指標種群を含む流水性種等が産出しており、同様な環境が示唆される。一方、植物珪酸体では、ヨシ属が検出され、ヨシ原のような湿潤な環境が推定される。また、花粉化石でも少量ではあるが、ニレ属一ケヤキ属、コナラ亜属、ハンノキ属など河畔や湿地に生育する種類を含む分類群が検出されている。したがって、V層の母材が堆積する頃には、これらの植物が生育する河畔～湿地のような環境であったと推測される。

一方、V層には腐植の集積が認められる。これは、V層が堆積後に地表面となり、表面に植物が被覆して土壤化したためと考えられる。花粉化石は好気的状況下においては分解することが知られている（中村、1967など）。また、土壤中の珪酸分は、溶脱や沈殿、再結晶化などによって徐々に風化すると考えられており（千木良、1995）、風化作用によって珪藻化石が消失した可能性がある。このように、V層の母材となっているのは河川性の堆積物で、堆積時には湿潤な状況であったが、その後離水して土壤化が起こったため、花粉化石や珪藻化石が消失したと考えられる。このような状況は以前報告した近隣の東畠A遺跡の遺物包含層や、鶴の木館跡の腐植層でも同様な傾向がみられる。

現在周辺の山地はほとんどが植林であるが、自然度の高い場所では、ブナを中心とした落葉広葉樹林であり（宮脇、1987）、当時の森林植生もこれに近いものであったと推測される。今回、植物珪酸体ではクマザサ属が多産する。クマザサ属は、ブナ林の林床に発達したり、ブナ林の一部が失われた際に先駆的に進入して草地を形成する（宮脇、1987など）。このように、植物珪酸体で多産したクマザサ属は、周辺の山地に由来すると考えられる。一方、ヨシ属やウシクサ族（スキ属含む）は、微高地土や周辺の後背湿地等に由来するとみられる。ただし、タケアシ科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量も多いため（近藤、1982；杉山・藤原、1986など）、組成から見るとクマザサ属が優勢であったよう見えるが、実際にはそれほど多くなかったと考えられる。

なお、3地点の試料番号2では栽培植物のイネ属もわずかに認められた。植物珪酸体の産状

を考慮すれば、ヨシ属などが生育する湿潤な場所を利用して稲作が行われたことも想定されるものの、農耕に伴う擾乱が明顯に見られず、さらに層位的なイネ属の分布を調査していないために上層からの落ち込みも否定できない。3地点において稲作が行われていたかは今後の課題である。

## (2) 住居跡等より検出された種実・木材

検出された種実のうち、イネの胚乳は炭化しており、4個全てが床面の洗い出し時の上澄み浮遊物から検出された。また、オニグルミの核は、多くの試料から検出され、全て炭化した微細片であった。オニグルミに関しては、洗い出し時の上澄み浮遊物(34個)よりも、洗い出し済み残渣(230個)からの検出個数が多かった。これは、オニグルミの核は木質・緻密で、比重が重いことに起因する。実験として同様な状態の試料を作成し、いろいろな比重の液体に投入して、その状態を観察した結果、炭化米の場合は乾燥状態で1.1程度、湿った状態では1.5程度の液体に投入するとほとんどの試料が浮遊した。一方、炭化したオニグルミ片は乾燥した状態においても、液体を1.7強の比重に調整しないと、浮遊しなかった。このことは、オニグルミの破片は乾燥した状態であっても水(比重1)にいれて攪拌した程度では浮きにくいことを意味する。したがって、堅果類の炭化種実を含む土壤でフローテーションを行う場合には、浮遊物のみを対象にしていては正確な組成を得ることはできない。このような試料は、洗い出し済み残渣の精査も必要となるため、フローテーション法自体の効果が薄い。このような場合には、簡による水洗のみを行って、顕微鏡で残渣を観察し選別を行うか、比重の重い液体を用いた比重分離法による種実の回収が必要である。その他では、サワグルミ、ミズキ、マメ科が炭化していた。また、トチノキ、キハダは、炭化している可能性もあるが、表面が黒くて硬いため、その判断は困難である。

これらの種実のうち、イネは栽培のために渡来した種類であり、当時の栽培、利用が示唆される。トチノキとオニグルミは周辺の山野に自生するが、いずれも食用となる。収量が多く、かつ保存が効くことから、当時の植物質食糧資源としては、重要であったと思われる。特にオニグルミは、検出された状態が炭化した微細片であったことから、当時食用として利用した残渣を燃料材として燃やした可能性もある。サワグルミ、ミズキ、キハダも周囲の山野に自生していたと考えられ、これらの種実が燃料材に混じっていた可能性がある。マメ科に関しては、結果のところでも述べたように、その形状から野生種と思われる。

なお、主に洗い出し時の上澄み浮遊物から検出された、タラノキ、オモダカ科、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、カラムシ属、ギシギシ属、タデ属、イノコヅチ属、キケマン属、マメ科、カタバミ属、エノキグサ、センダングサ属、キク科は、炭化していない。また、分析中に発芽したり、表面に微毛が寄生するなど状態が極めて良好な種実が多くみられる。微化石分析の結果からも、当時は比較的好気的状況下におかれていたことが推測されている。このような条件下で、炭化していない種実が、上述の炭化種実と共に住居跡の覆土中に長期間残るとは考え難く、後代からの混入の可能性が高いと判断される。したがって、本報では結果表示と形態記載にとどめ、考察に関しては除外する。

樹種同定を実施した木材は、柱材と木棺である。柱材は落葉広葉樹のコナラ節であった。山形県内では、これまでの調査結果から縄文時代および古墳時代や古代の柱材にクリの利用が多

い傾向がある。これは、クリが重硬で強度や耐朽性が高いことが関係していると考えられる。コナラ節は、クリに比較すると耐朽性が劣るが、強度の測定データをみると圧縮強度ではクリよりも高い値が得られている（成澤、1985）。この値をみると柱材としての強度に大きな違いはないことから、コナラ節も柱材として利用されたと考えられる。

一方、木棺の樹種は、針葉樹の複維管束亜属（ニヨウマツ類）であった。複維管束亜属は、針葉樹としてはやや重硬な部類に入るが、加工は容易である。明治末にまとめられた「木材ノ工藝的利用」（農商務省山林局、1912）には、木棺は神聖または清淨感を持たせる材が良いとされ、ヒノキを外部に、内部にキリを用いた二重のものが最上とされ、モミおよびマツをこれに代用するとの記述がある。この記述のマツは、いわゆる複維管束亜属（アカマツ・クロマツ）を指していると考えられる。したがって、今回の結果は、「木材ノ工藝的利用」の記述とも調和的である。

近世の木棺については、これまでにも江戸を中心として樹種同定が実施されている。このうち、多くの木棺について樹種同定を実施した東京都八丁堀三丁目跡の例をみると、複維管束亜属は円形木棺の蓋に1点認められたのみで、利用は少ない（鈴木・能城、2004）。最も多く利用されているのはサワラで、次いでスギ、ヒノキが多いが、この背景には天竜川流域の開発等も関係していることが指摘されている。木材利用にはそれぞれの地域の植生・流通等による木材入手の可否等も関わっていると考えられることから、今後資料を蓄積すると共に文献記録等とも合わせた検証が望まれる。

#### 引用文献

- 安藤 一男. 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 千木良 雅弘. 1995. 風化と崩壊 近未来社, 204p.
- 原口 和夫・塚内 清史・林 弘法. 1998. 玉城の藻類 珪藻類. 玉城県植物誌. 玉城県教育委員会, 527-600.
- 林 昭三. 1991. 日本產木材 脳微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川 康雄. 1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 伊藤 良水・塙内 誠示. 1991. 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解説への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 伊東 隆夫. 1995. 日本產広葉樹材の解剖学的記載I. 木材研究・資料31. 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東 隆夫. 1996. 日本產広葉樹材の解剖学的記載II. 木材研究・資料32. 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東 隆夫. 1997. 日本產広葉樹材の解剖学的記載III. 木材研究・資料33. 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東 隆夫. 1998. 日本產広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料34. 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東 隆夫. 1999. 日本產広葉樹材の解剖学的記載V. 木材研究・資料35. 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 小杉 正人. 1988. 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 近藤 鍾三. 2004. 植物ケイ酸体研究ベドロジスト, 48, 46-64.
- 近藤 鍾三. 1982. Plant opal分析による黒色腐植層の成因判明に関する研究昭和56年度科学的研究費(一般研究C) 研究成果報告書, 32p.
- Krammer, K., 1992. *PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26*. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1984. *Bacillariophyceae. I. Teil: Naviculaceae*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1*. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988. *Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemialeaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2*. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a. *Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariales, Eunotiaceae*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3*. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b. *Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema*. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4*. Gustav Fischer Verlag, 248p.

## V 総 括

本章では、庚墳遺跡で検出された遺構・遺物のうち、特に重要と考えられるものについて、検討を行う。その後、本遺跡の成立過程について、時期ごとの様相を概観し、まとめとする。

### 1 弥生時代後期の竪穴住居跡について

今回の調査で検出された当該期の遺構はS T 40のみであった。出土遺物から弥生時代後期と考えられ、米沢盆地では初出である。該期の竪穴住居跡が確認された事例は極めて少なく、良好な資料と言える。住居は遺跡の東側のC区に位置し、古墳時代の包含層直下で検出された。平面形は四隅のほかに辺の中間が膨らむ胴張隅丸形を呈している<sup>5)</sup>。住居施設については、床面の北寄りに炉跡、やや隅寄りに主柱穴が配されている。また壁柱穴が壁の内側に不規則に廻っており、掘り込みが浅いためか、検出できない個所もある。規模はほぼ5m四方であるが、若干東西軸の方が長い。ほぼ同時に当たる八幡台遺跡第1号住居跡も長辺の長さが6mを測り、該期の住居の規模としては一般的であると言える<sup>6)</sup>。壁高は高い個所で10cm、南西部は床面が検出面となっている。

#### 平 面 形 と 斜 柱 穴

ここでは、考察資料として東北地方と新潟県の住居跡の集成をして、特に平面形と柱穴傾斜にしほって比較し、隣県の諸例との共通点・相違点を述べることとする。なお、新潟県については、本県と接している下越地方を取り上げた。ここで集成した住居跡は形状の比較的明確なもののみ掲載している（第66～69図・表13）。また、柱穴傾斜については、断面形状を掲載している報文から明確なものを抜粋して表にしている（表14）。

弥生時代を便宜上V期に区切って（弥生後期初頭：I期、弥生後期前半：II期、弥生後期半ば：III期、弥生後期後半：IV期、弥生後期終末：V期）、各県の住居を並べている<sup>7)</sup>。なお、5大別の年代観については第9回東日本埋蔵文化財研究会福島大会にて猪狩氏が報告したものを基調とした（猪狩 2000）。よって本編の記述も福島県いわき地方の遺跡を挙げる機会が多くなった。なお、他県の土器編年との対応表（表15）は不確定的な要素も多く試案であるが、本文記述と合せて見て頂きたい。

#### 八幡台遺跡併行

始めに本遺跡のS T 40の編年の位置であるが、出土土器から八幡台遺跡直前または併行することができよう。よってIII期に該当する。それは、床面出土の壺の複合口縁部が幅広になり、壺・甕の区別が困難になる点や口縁部が無文あるいは付加条2種が主体となるIV期よりは地文の構成が多様であり、それより以前という点から言えるだろう。同じ県内の検出例である向河原遺跡S T 1068は湯舟沢遺跡併行でIV期に該当する（山形県埋蔵文化財センター 2005）。この住居の出土遺物には退化した刺突文を施す一群や、北陸系土器が共伴することなどから、後期でも後半の方に入ると考えられる<sup>8)</sup>。確かに本遺跡S T 40からは、沈線下の刺突文などIII期以前の古い様相も確認でき、結果的に向河原遺跡よりは古手の住居と思われる。

次に各県の時期ごとの傾向について述べたい。

**I 期 上ノ内遺跡22号住居**などが挙げられる。上ノ内遺跡22号住居については明確にプランを把握しえないとしながらも、おおよその形状は方形を基調としている（いわき市教育委員会 1994）。床面から伊勢林前遺跡併行の壺が数点出土している。柱穴は明確ではなく、全ての住居内施設が明瞭でない。伊勢林前遺跡検出の住居は後世の造構の切り合いから平面形が不明である（いわき市教育委員会 1972）。隅が角張ることから、方形ないし長方形を基調とすると思われる。ほかに輪山遺跡1号住居があるが長方形を呈する。東北地方北辺の例として畠内遺跡152・149号住居がある。平面形が方形を基調とした梢円を呈する。主柱穴が炉跡周辺に配され、炉跡の位置は両者とも住居の中央である（青森県教育委員会 2003）。ほかにも常磐広町遺跡住居跡があるが、やはり平面形は長方形を呈し、I期の特徴をうかがわせる。

**II 期 愛谷遺跡21号住居や横山古墳群1号住居**などが挙げられる。愛谷遺跡21号住居は長軸長6m弱を測り、東西に長い隅丸長方形を呈している。住居のほぼ中央に焼土と焼けた礫が確認されている。主柱穴が住居の形状に沿うように配置されている。掘り込みは浅い（いわき市教育委員会 1985）。横山古墳群1号住居は平面形が隅丸方形を呈し、壁面に沿って壁柱穴が廻る。主柱穴や炉跡は検出されなかった（いわき市教育委員会 2002）。ほかにも上ノ原A遺跡住居跡があるが、平面形は「西側が丸味をもった馬蹄形」を呈しており、西壁側に小柱穴が確認された。炉跡は東側に偏って検出されている。柱穴の傾斜は0～5度内傾と小さく、ほぼ垂直に柱が立っていたと思われる（一迫町教育委員会 1978）。和泉遺跡3号住居の例のように1つの柱穴が11度も外傾する例もある。同住居は壁沿いに柱穴のない伏屋式の住居で、平面形は方形を呈する。本遺跡のS T 40も同様であるが、柱の傾斜が大きくても上部構造での修正も含めて建てられていたことがわかる<sup>9)</sup>。

**III 期 八幡台遺跡1号住居や応時遺跡4号住居**などが挙げられる。八幡台遺跡1号住居は、平面形が隅丸方形を呈し、一辺が6mを測る住居である。焼土が北寄りに認められ、S T 40との共通点がある。主柱穴のP 4は深さ21cmを測り、3度内傾している（いわき市教育文化事業団 1980）。応時遺跡4号住居の平面形は円に近い隅丸方形を呈し、北側中央に焼土が確認された。7基の主柱穴も検出され、傾斜は0～2度とほぼ垂直である（いわき市教育委員会 2006）。明戸遺跡S I 11や郷楽遺跡S I 19のように依然として平面形が方形を基調としているものがあり、この時期の様相は円形・方形の双方を基調とする平面形が並存していたと言える。S T 40の柱穴傾斜は20度ほどではほかの住居より傾きがある。また配置されている場所も壁際で 柱穴傾斜20度ある点から、ほかの住居より構造的理由によって故意に傾けていたと考えられる。

**IV 期 湯舟沢遺跡Ⅸ f 住居**などが挙げられる。湯舟沢遺跡Ⅸ f 住居は平面形が円形を呈し、屋敷遺跡11号と同様の形状である。壁沿いに柱穴が廻り、壁立式の上屋構造を想定できる。壁柱穴は柱穴傾斜が3度内傾である。主柱穴がない点でS T 40と異なるが、縄文時代からの伝統的な上屋構造をもつと考えられる。平面形や規模、上屋構造は向河原遺跡S T 1068も同様であり、さらに平面形の円形基調の度合いが深まる傾向が認められる。なお、湯舟沢遺跡のほかの住居跡も平面形・柱穴の配置は同じである（滝沢村教育委員会 1986）。同遺跡出土の壺の底部調整に縄文を施すものが多い。本遺跡の方がやや古手であるが、底部無文とするものが多いのに対して後期半ばから後半にかけての様相の一つと言える。

V 期 杵が森古墳1号住居、本屋敷遺跡2号住居などが挙げられる。杵が森古墳1号住居は、大きく削平されているが、平面形が隅丸方形である。柱穴の深さは50cmほどで、柱穴の傾斜はない（会津板下町教育委員会 1995）。向河原遺跡のST1001は住居の3分の2ほどの検出ながら、平面形は方形または長方形と言える。住居底面から赤穴式に該当する下脚の壺群が出土している。この遺跡からは、口縁部に側面圧痕が施された壺がSX1231から出土しており、V期後半の住居跡の存在を想起させる。遺跡の対岸に位置する渋江遺跡からも同様の遺物が出土している（山形県埋蔵文化財センター 2004）。本屋敷遺跡1号2号住居は平面形が不整な円形を呈し、円状に柱穴が廻る。やや南西側に灼跡が確認されている。底面から壺形や壺形土器（新潟シンボ5・6期併行）が出土している（法政大学文学部考古学研究室 1985）。

## 2 山形県内出土の円面硯について

佐藤禎宏氏の  
陶器編年表

円面硯は文房具の一つで、6世紀には出現しており、官衙関連遺跡、寺院跡などから出土している。置場地方は、時代幅や数量においてほかの地方より出土量が多い。ここでは、佐藤禎宏氏が作成した「陶器編年表」（佐藤禎宏 2000）に沿いながら、時代ごとの様相を述べ、本遺跡出土品との比較を試みたい。なお、（ ）番号は編年表内の遺物に対応する。（表16-第71図）なお、佐藤氏の分類で別にしている「中空硯」は除いている。

**8世紀前半** 味噌根窯跡出土品（4）は器高が低く、下位に台脚が付く。共伴遺物は、底部周辺に丁寧なヘラ調整のある壺など8世紀第1四半期の遺物である。大在家遺跡出土品（5）は底部に向って、やや外反する器形で、体部に縦長の窓が穿たれ、窓間に2条の縦方向の沈線が施されている。共伴遺物は7世紀後半～8世紀初頭の遺物である。西町田下遺跡出土品（8a）は体部に方窓のみを穿ち、有堤式である。硯面の径が20cm近い大型の製品である。共伴遺物は、8世紀後半を下限としている。生石遺跡出土品（20）は、底部が欠損しているが、角窓の一部が残存し、菱形文と思われる繩描の一部が見える。無堤式で、硯面径が14.6cmの中型の製品である。同遺跡からはほかに5点の円面硯と57点の転用硯が出土している。一部の転用硯に打ち欠きが見られる（山形県・山形県教育委員会 1987）。この時期の傾向として、ほかの須恵器製品の器形と同様に器高が低く、底部の径が長い大型品が見られることである。文様は次期に盛んに作られる縦長方窓の製品も散見されるが、単純なものが多い。

**8世紀後半** この時期、出土量が大幅に増加する。今回取り上げた3つの地区で確認されており、形状も多様である。沢田遺跡出土品（1）は丸底で器高が低い。硯面径も9.5cmと小型の製品である。笛原遺跡出土品（7a）は、底部の切り離しを静止系切りにより、硯面径も9.5cmと小さい（米沢市教育委員会他 1981）。これら小型の製品は当該期の特徴である。同じく笛原遺跡からは円窓と葉脈文を組み合わせた硯（7b）も出土している。硯面径が13.8cmの中型の製品である。文様の点で共通しているのが、山楯5遺跡出土品（21）である。下向きの葉脈が刻まれ、合せて横長の角窓が穿たれている。遺構外からの出土であるが、窯跡資料と同じ8世紀中～末に比定できる（山形県埋蔵文化財センター 1994）。大浦B遺跡出土品（9a）は、縦長方窓と縦方向の沈線と組み合わせた圓脚硯で、脚部のみ残存している。上部の堤の状況は不明である（米沢市教育委員会 1993）。同様の形状のものは、合津窯跡出土品にも見られる。同じく縦長方窓と縦沈線の組み合わせで、有堤式の硯である。ほかにも平行沈線間に鋸歯状に3

段にわたって沈線が引かれている。これらの遺物が出土した1号窯の年代観は8世紀後半～末に比定されている(高畠町教育委員会 1997)。(9a)と同じ形状なのが、平野山窯跡出土品(12)、依田遺跡出土品(18)、不動本遺跡出土品(11)である。(12)の文様は縦長方窓と3本単位の縦方向の沈線が刻まれ、(18)の文様は上下の平行沈線間に縦方向の沈線が6本の単位で刻まれている。(11)の文様は縦長方窓と駒形文の組み合わせで、(11)の文様に若干相違点がある。北目長田遺跡出土品(17)もある。窯面径が150mmを超えるやや大きいが、外側の堤が横方向に付けられている。遺構外の出土で、年代観が明確でないが、遺跡の年代に合わせ、8世紀末とした(山形県埋蔵文化財センター 1998)。この時期の様相として、中型品が多く、文様は縦長方窓と沈線との組み合わせが目立つ。中には円窓と沈線との組み合わせもあり、窯跡間で沈線の数量など多少の差異があるようである。

**9世紀前半・半ば** この時期を境にして窓の形状が一新する。また、風字便の出土例が多くなる。大浦遺跡出土品(9b)は、円窓の窓面が2分され、底部に2脚の獸足が付く。2分された大きい区画の方に径25cmの墨滲がある。特殊な器形と言える。太夫小屋1遺跡出土品(3)は、内外の堤をもつが、外側の堤は退化により突帯状となり、海部の範囲も狭い。体部に斜格子状の沈線が廻る。円窓が4単位あると推定される(山形県埋蔵文化財センター 2001)。

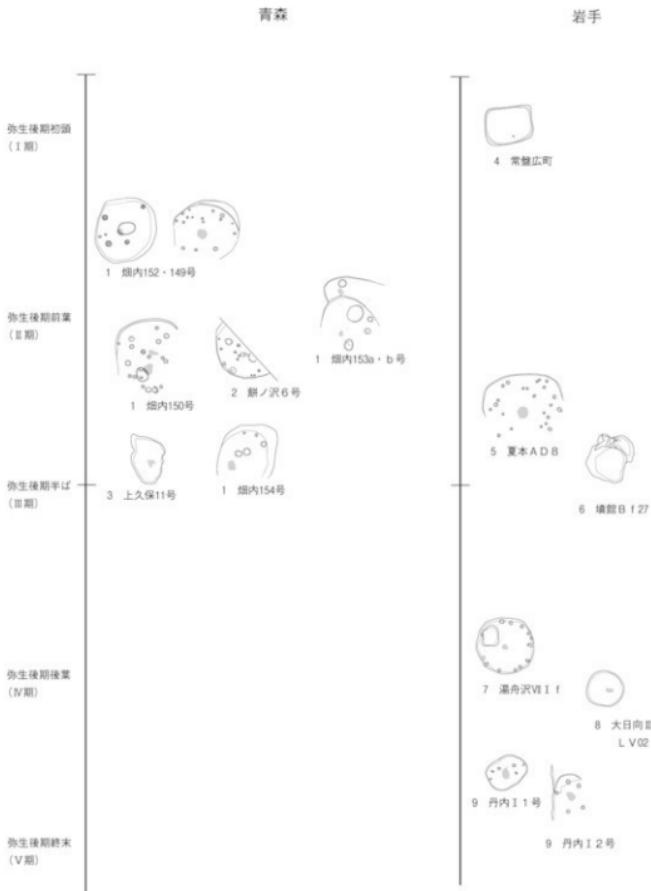
本遺跡出土品(10)は、内外の堤を持ち、脚部に笠攝の沈線が斜状に4本ずつ交差して格子状に組まれている。(3)と文様的な共通点はあるが、格子文や外堤の意匠などに相違がある。地域的差異によるものか、時期差によるものは不明である。ただ、同じ窯跡内の製品でも文様・規格の面で多様なものを製作しており、窯跡間の違いとは言いきれない。

次に本遺跡出土品との比較を述べる。形状の同じものは無く、細部に違いがあるものが多い。(10)は脚端部の摘み出しがなく、体部の傾きは外傾し、南興屋遺跡出土(19)と共に通する。(3)のように脚端部の外反ではなく、器厚も(3)の方が薄い。堤の形状は、8世紀後半の(18)に共通している。(10)の窓面はやや凸型で、(3)と同様である。窯面径と底径の差は、8世紀後半の(12)や(18)より大きい。神野恵・川越俊一両氏は「平城京出土の陶窓」の中で、「円窓をめぐる諸問題」を取り上げ、窓の大きさの比較をして細かい法量分化がある点を述べて法量分化している。奈良時代後半になると小型の製品が多くなる点を強調しているが、傾向として大型の製品が無くなるとするのは時期尚早としている(神野・川越 2003)。前述の法量計測に沿って、表中の全容のわかる資料について計測をした(第70図)。なお、X軸が窯面径、Y軸が外堤径を表す。8世紀前半は中型から大型までの製品が出土しており、小型のものが無い。窯面径と外堤径との比率もほぼ同じ傾向を示す。8世紀後半になると大きさが多様化し、中型の製品のほかに小型のものも出てくる。9世紀代になると、大型の製品は姿を消し、前代と比較して小型の製品が主体を占める。(10)は外堤径が11.4cmで、8世紀後半の中型品の平均値12~13cmに比べて小さくなっている。この結果を見れば、神野・川越の言う「小型化」に合致している。上記については今後の出土量の増加により各時期の構成に変化があると予測される。一つの傾向として捉えておきたい。



- |           |             |            |            |           |           |
|-----------|-------------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 鶴内道跡   | 9. 月内1塗跡    | 17. 伊勢林道跡  | 25. 忍野道跡   | 33. 木屋敷道跡 | 42. 滝ノ前道跡 |
| 2. 錦ノ沢道跡  | 10. 道下道跡    | 18. 上ノ内道跡  | 26. 夕日長者道跡 | 43. 佐供田道跡 | 43. 中曾根道跡 |
| 3. 上久保道跡  | 11. 上ノ原八道跡  | 19. 驚山道跡   | 27. 大物貝塚   | 35. 桜町道跡  | 44. 八幡山道跡 |
| 4. 常磐広町道跡 | 12. 名生道跡    | 20. 阿取貝塚   | 28. 正武古墳群  | 36. 横田八道跡 |           |
| 5. 夏木道跡   | 13. 原道跡     | 21. 明日長者道跡 | 29. 正武B道跡  | 38. 尾敷道跡  |           |
| 6. 境前道跡   | 14. 土手内道跡   | 22. 愛谷道跡   | 30. 明月道跡   | 39. 作ヶ森古墳 |           |
| 7. 湯舟沢道跡  | 15. 八木山絆町道跡 | 23. 横山古墳群  | 31. 卵山道跡   | 40. 康澄道跡  |           |
| 8. 大日向Ⅱ道跡 | 16. 那栄葉道跡   | 24. 八幡台道跡  | 32. 高見山    | 41. 向河原道跡 |           |

第66図 弥生時代後期住居位置図



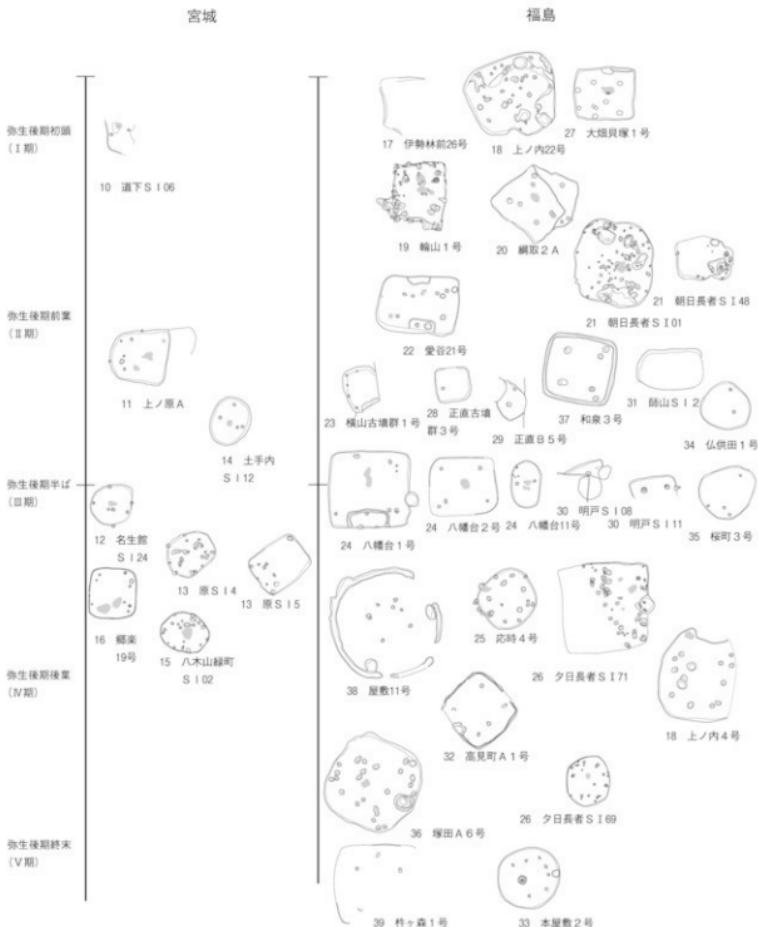
※住居跡図については外形を明確にするため、再トレースしている。

※図中のトーン部分は伊跡である。

※図の縮尺は1/300である。

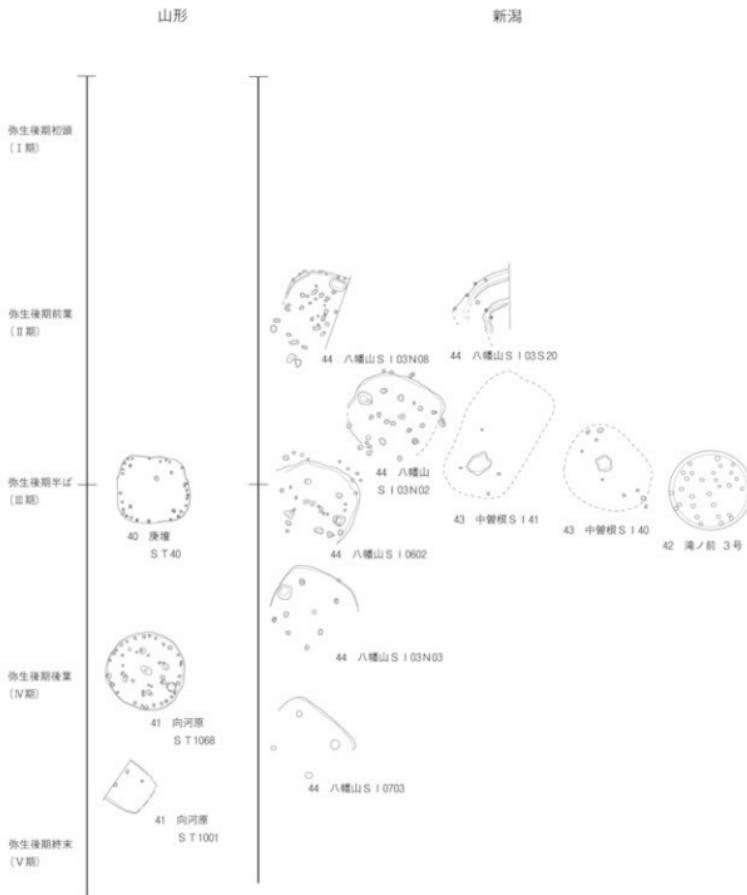
※秋田県は当該期の住居跡の検出例は無い。

第67図 東北・新潟（一部）の住居跡集成（弥生後期）その1



\*大畠貝塚1号住居は報文では写真のみのため模式図を作成して掲載した。

第68図 東北・新潟（一部）の住居跡集成（弥生後期）その2



\*游ノ前遺跡3号住居は報文では写真のみのため模式図を作成して掲載した。

第69図 東北・新潟(一部)の住居跡集成(弥生後期) その3

表13 東北と新潟の弥生後期竪穴住居跡集成

県名	市町村名	番号	遺跡名	居住名	規模			炉	備考
					長	幅	深		
青森	八戸市（南郷村）	1	細内	152	530	440	16	地床炉	I期
				150	—	—	13	地床炉	II期
				149	480	—	20	地床炉	I期
				154	[410]	—	30	地床炉	III期
				153a	—	—	12	地床炉	II期
				153b	390	—	12	地床炉	II期
岩手	勝ヶ沢町	2	鶴ノ沢	6号	[500]	—	—	—	II期
	三沢町	3	上久保	11号	360	260	30	地床炉	III期
	奥州市（水沢市）	4	常盤町斯	—	320	285	45	—	I期
	大槌町	5	夏木	AD8	—	2550~600	20	石西炉	II期
	船渡町	6	埴船	B27	350前後	300前後	30	地床炉	III期
	鶴沢村	7	湯舟沢	VII	440	434	32	地床炉	IV期
宮城	糸木町	8	大日向Ⅱ	LV02	270	255	58	地床炉	IV期
	久慈市（山形村）	9	丹内Ⅰ	1号	360	300	20	地床炉	V期
			2号	380	280	18	地床炉	V期	
	加美町（宮崎町）	10	道下	SI06	—	—	—	地床炉	I期
	栗原市（一迫町）	11	上ノ原A	—	420	400	20	床面焼上	II期
	大崎市（古川市）	12	名生館	SI24	350	300	20	地床炉	III期
仙台市	13	原	SI4	360	290	12	—	—	III期
		SI5	425	330	10	—	—	—	III期
	14	土手内	SI12	367	280	30	地床炉	II期	
	15	八木山緑町	SI02	360	285	9	地床炉	III期	
	利府町	16	郷葉	19号	250	230	8	地床炉	III期
		17	伊勢林前	26号	300	300	26	—	I期
いわき市	18	上ノ内	23号	470	410	—	—	炉?	I期
		4号	465	—	—	—	—	IV期	
	19	輪山	1号	500	380	11	地床炉	I期	
		2A	289	262	—	—	—	I期	
		2B	353	320	—	—	地床炉	I期	
	21	朝日長者	SI48	503	346	12	—	—	I期
福島	22	愛谷	SI01	521	484	14	地床炉	I期	
	23	横山古墳群	21号	594	410	—	燒上	II期	
		1号	325	249	45	—	—	II期	
		1号	600	588	22	地床炉	III期		
	24	八幡台	2号	500	420	16	地床炉	III期	
		11号	330	212	15	地床炉?	III期		
福島	25	延時	4号	422	414	28	壁際焼上	III期	
		SI17	[650]	[630]	15	地床炉	III期		
	26	夕日長者	S369	531	468	14	地床炉	IV期	
	27	大畠	G地区 1号	402	345	30	地床炉	—	I期
	郡山市	28	正直古墳群	3号	—	280	15	—	II期
		29	正直B	5号	290	215	13	—	II期
白河市	30	明月	SI08	—	—	—	—	—	III期
	31	御山	SI11	360	—	30	—	—	II期
	南相馬市（原町市）	32	高見町A	1号	484	479	50	—	IV期
	浪江町	33	本塙敷	2号	—	430	16	地床炉	—
	国見町	34	佐共田	1号	320	280	10	—	II期
	涌川村	35	坂町	3号	395	345	14	—	III期
山形	喜多方市	36	塙田A	6号	562	574	15	—	V期
		37	和泉	3号	490	465	17	—	II期
	会津若松市	38	尾敷	11号	810	—	—	—	IV期
	会津坂下町	39	杵ヶ森古墳	1号	550	550	20	—	V期
	南陽市	40	灰塙	S T 40	550	505	12	地床炉	III期
	山形市	41	向河原	S T 1068	—	580	22	地床炉	IV期
新潟				S T 1001	340	—	30	—	V期
	村上市	42	溝ノ前	3号	535	515	20	—	III期
				SI44	[810]	[470]	—	—	III期
	糸魚川市	43	中曾根	SI40	[580]	[480]	—	—	III期
				SI05120	—	—	30	—	II期
				SI05N08	[620]	[580]	54	地床炉	II期
新潟	新潟市（新津市）	44	丸舎山	SI05N02	[500]	—	24	地床炉	II期
				SI0602	[560]	—	25	地床炉	III期
				SI05N03	[540]	[500]	34	地床炉	III期
				SI0703	[500]	—	22	—	IV期

※番号は第66~699号の遺跡番号と対応する。

※市町村名の（ ）は旧市町村名。

※平面図は報告者の意図を反映しており、同じ形状でも文記が違う場合があるため、本章で提示した形態分類に合わせて記載した。

※報作成時中曾根遺跡は未刊行により計測値を報告者が国面で計測した。

※[ ]内の数字は推定値。

表14 弥生後期の竪穴住居跡柱穴傾斜角度集計表（東北・新潟下越）

貢名	遺跡名	住居名	柱穴名	深さ(cm)	傾き(°)	方向	備考
岩手	湯舟沢	唯 I F	P10	30	2	内傾	V期
		S I 4	P17	29	1	内傾	III期
	原	S I 5	P7	38	5	内傾	
		上ノ原A	竪穴住居	P1	20	0	内傾
宮城			P2	30	5	内傾	II期
	八木山緑町	S I 02	P2	43.5	0	内傾	III期
	朝日長者	S I 01	P (断面E-F)	50	5	内傾	II期、番号無し
			P (断面G-H)	45	0	内傾	II期、番号無し
福島	応時	第4号住居	P4	45	2	外傾	
			P3	40	0		III期、柱痕あり
	桜井高見町A	第1号住居	P3	35	0		
			P5	40	2	内傾	IV期、土王台
福島	舟が森古墳	1号住居	P1	65	0		V期
			P2	50	1	内傾	
	八幡台	第1号住居	P4	21	3	内傾	III期
	正直B	第5号住居	P2	25	2	外傾	II期
山形	上ノ内	第4号住居	P (断面I-J)	40	1	内傾	IV期、番号無し
	和泉	第3号住居	P1	55	11	外傾	II期
			P2	35	2	内傾	II期、柱痕あり
	星敷	11号住居	P6	30	0		III期
山形		S T 1001	E P 1052	20	2	外傾	IV期
			E P 1176	65	0		
	向河原		E P 1177	55	2	内傾	
		S T 1068	E P 1212	45	7	外傾	III期、柱痕あり
山形			E P 1178	45	0		
			E P 1179	50	2	外傾	
	庚塙		E P 35	35	20	内傾	
		S T 40	E P 39	35	10	内傾	III期
			E P 41	30	0		
			E P 40	20	5	外傾	
新潟	中曾根	S I 40	P220	20	0		III期、柱痕あり
		S I 0GN08	P22	23	2	内傾	II期
		S I 0GN02	P21	59	0		III期
			P18	41	0		
新潟	八幡山		P16	57	3	外傾	
			P10	70	3	外傾	III期
			P25	74	0		
			P 6	61	2	外傾	
新潟	八幡山		P 1	54	2	内傾	
		S I 03N03	P 2	27	2	外傾	IV期
			P 3	57	10	内傾	
			P 4	46	0		

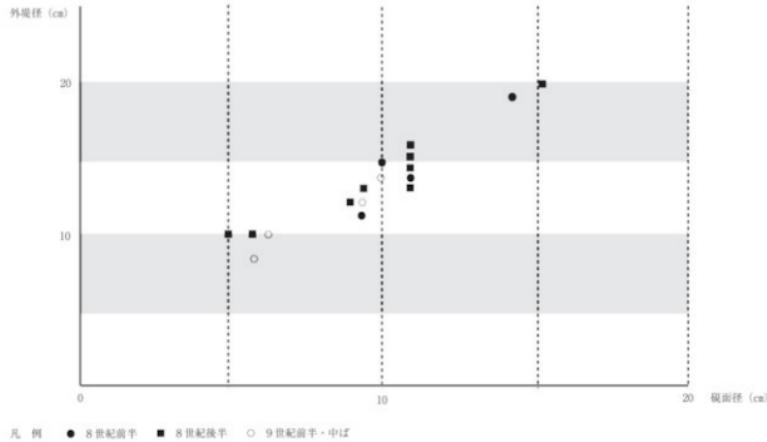
\*柱穴のサンプルとして深さ20cm以上のもので、形状が明確なものを選んで測定した。そのため東北全県にわたっての資料を盛り込めなかった。  
※柱の傾斜の測定について、柱痕のある場合は断面図をそのまま測り、掘り込みの外観のみの場合は開口部の中心と最深部の中心を結んだ縦方向を傾斜として測定した。ただし、掘り込みが外側になっている場合は掘り込みの方向で測っている。

表15 弥生後期の土器編年対応表（山形県遺跡検出の遺構との対応）

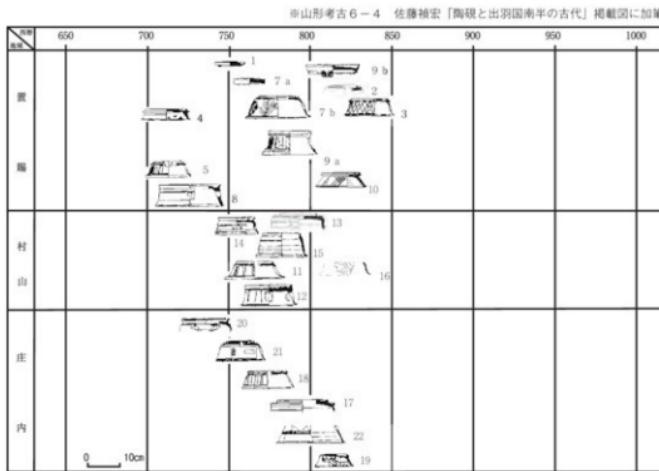
畿内	新潟シンボ	茨城	福島	宮城	岩手	青森	新潟 (下越)	向河原 庚塙	編年案
V様式 前半		能登 下ノ内裏 常盤 家ノ前 石動	天王山 上ノ原A +	六地山	大沢B 庚塙ST40	千歳	向河原ST1068	Ⅰ期	
V様式 後半	1段階	八幡台	星敷	湯舟沢	千歳	向河原ST1068	Ⅱ期		
	2段階								
庄内古相	3段階	十王台1 b式	(上ノ原B) (上野Ⅱ郡) (豊場)						
	4段階	十王台1 c式							
庄内新相	5段階	十王台2 a式	本屋敷 宇南	赤穴	九艘泊 縄立	向河原ST1001	Ⅲ期		
	6段階	十王台2 b式							

表16 山形県内の円面鏡集成

遺跡番号	遺跡名	所在地	点数	主要検出遺構	その他の伴出関連遺物
1	沢田	南陽市鳥賀	1	掘立柱建物・堅穴住居・集石遺構	
2	長岡山	南陽市長岡	1		
3	太夫小屋1	川西町時田	34	掘立柱建物・堅穴住居	風字鏡、墨書き土器
4	殊唱歌窓	高畠町安久津	4	窓跡	木滴
5	大在家	高畠町大町	3		
6	合津窓	高畠町上和田	2	窓跡	
7	篠原	米沢市中田町	3	堅穴住居	墨書き土器、木簡、木滴
8	西町田下	米沢市瑞井町	8	掘立柱建物・堅穴住居・井戸	中空鏡、墨書き土器、木滴
9	大浦B	米沢市中田町	2	掘立柱建物・堅穴住居・井戸	風字鏡、墨書き土器、漆紙、木滴
10	庚塙	南陽市長瀬	1	堅穴住居・河用・溝・土坑	墨書き、刻書き土器、転用鏡
11	不動木	河北町漢延	1	掘立柱建物・堅穴住居	鐵鑄土器、木滴
12	平野山窓	寒河江市柴橋	7	窓跡・堅穴住居・河用・埋設土器	風字鏡、鐵鑄土器、木滴
13	高瀬山市道	寒河江市寒河江	1	掘立柱建物・堅穴住居	墨書き土器
14	高瀬山I期	寒河江市寒河江	1	掘立柱建物・堅穴住居・河用	墨書き土器、鐵鑄土器、転用鏡
15	漆山長表	山形市青柳	2	掘立柱建物・堅穴住居・井戸	墨書き土器、木滴
16	石田	山形市谷柏	1	掘立柱建物・圓錐施設・構列	墨書き土器
17	北日長田	遊佐町北日	1	掘立柱建物・河用	風字鏡、転用鏡、墨書き土器、木滴
18	俵田	丸輔町阿島田	1	掘立柱建物・堅穴住居・祭祀遺構	墨書き土器、人面形鐵鑄土器、人形、馬形
19	南興野	酒田市南興野	1	掘立柱建物・井戸・河用	石製長方鏡、転用鏡、墨書き土器、漆紙
20	生石2	酒田市生石	6	掘立柱建物・井戸・圓錐施設	風字鏡、転用鏡、墨書き土器、漆紙、木簡
21	山楯5	平田町山楯	2	窓跡	
22	桜林興野	平田町桜林興野	2	掘立柱建物・井戸・河用	墨書き土器、鐵鑄土器
23	荒沢窓	鶴岡市大死	2	窓跡	



第70図 円面硯法量分布図



第71図 山形県内の円面硯発年案

### 3 庚塙遺跡の成立過程について

庚塙遺跡は、山形県南陽市の宮内扇状地にある織機川の自然堤防上に立地する。縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、近世にわたって断続的に営まれた遺跡である。織機川の流路は東から西へと変わっていったが、その自然堤防を追うように、時代と共に遺構の分布域も東から西へと移動している。遺構の密度は薄い。遺跡の種別は集落跡だが、いずれの時代も、調査区域は遺跡の中心部でなく周縁部にある。

#### (1) 縄文時代～古墳時代の様相

最初に調査区東側にある S G 35川跡東岸にある自然堤防上に、生活の痕跡が刻まれた。S G 35川跡は、現在は調査区の西側を流れる織機川の旧河道と考えられるものである。ここには縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代前期の3つの時期の遺構・遺物のまとまりが認められる。縄文時代では、住居跡は確認されていないが、性格不明遺構とした2基からは、底面からそれぞれ大木8a式と大木10式の遺物が出土している。当該期の堅穴住居跡である可能性をもつ。

**弥生時代後期の堅穴住居跡**

弥生時代後期には、堅穴住居が建てられ、生活の場とされている。住居は胴張隅丸方形で、主柱が内傾していた。内部空間を広く取るためと考えられる。地床炉のかたわらから、当該期の甕(33)が潰れた状態で出土した。炭化物の付着痕跡から、煮込み料理に使われたと考えられる。また、住居床面や地床炉内の土壤分析を行った結果、栽培種のイネ4粒と、保存食と考えられるオニグルミ、小動物の骨片などが見つかった。当時の食生活の一端がうかがえる。

**包含層出土土器**

この間にも川は徐々に西へと流路を変え、一帯は次第に後背湿地となっていったと考えられる。河畔や湿地のような環境下で包含層(V層)が形成される。包含層上層から、多量の古墳時代前期古式土器と、弥生時代後期土器の小破片が出土する。古墳時代には湿润な環境であったと推測される。角材を使用して高床式の建物が建てられたのはこの時期である。2軒の建物は、主軸が70度近く違っているが、規模や柱間などの構造が似ている。建物の側柱は全て棟方向に内傾し、妻側から見ると柱が「ハ」字状を呈するやや特殊な構造であったと考えられる。

#### (2) 奈良・平安時代の様相

**溝跡出土土器**

織機川が川上から運んで来る大量の土砂により、C区以西が徐々に形成されていった。奈良時代以降になると、湿润となったC区近辺は使用されなくなり、新しくできた自然堤防上を利用するようになっていったと考えられる。調査区ではA区・B区とした地域である。しかし、古代には9世紀後半頃のS T 1堅穴住居跡のほかには生活の痕跡が認められない。掘立柱建物と考えられる柱穴も検出されない。奈良・平安時代の主要遺構は、北から南に向かう溝跡である。直線的な形状のものが多く、主軸方向によって3つに分けられるが、出土遺物を検討しても、明確な時期差は認められなかった。いずれも奈良末から9世紀半ば過ぎの遺物が出土する。

B区のS D11溝跡は、北から南下して中央付近で「く」字状に屈曲し南西へ向かう溝跡で、区画溝であると推定される。北西側を区画していると考えられるが、その範囲や規模などは不明である。区画内部の主要建築物は、調査区内には存在しない。北側にあるものと推定される。また、S D11と同じ主軸をもつS D56溝跡も、圍繞施設の可能性がある。S D56からは、9世

紀前半を主体とする須恵器・土師器が大量に出土した。

上記の溝においては、土器の打ち欠き行為と廃棄が行われたようである。打ち欠きされた土器には墨書き土器が多いが、墨書きのない土器にも意識的に打ち割ったと考えられる痕跡と、廃棄したと推測される出土状況を示すものがある。特に S D11区画溝の屈曲部で出土した須恵器短頸壺は、ほかの 3ヶ所の遺構から出土した破片同士と摩滅なく接合した。A・B 区は、区画域の南東縁辺部にあたり、何らかの祭祀的行為を行う場所でもあったとも考えることができる。

遺物は、須恵器・土師器が整理箱に34箱出土しており、その多くが溝跡から発見されたものである。8世紀末から9世紀中葉のものが大半で、主体となるのは9世紀前半の時期と考えられる。胎土を見ると、須恵器は、長石を多量に含むもの、小礫を多く含むもの、金雲母を含むものなど、特徴のあるグループに分けられる。土師器では、金雲母を多量に含むものが多く、特に黒色土器が多い。この金雲母は、A・B区の基本層序Ⅲ層にも多量に含まれるため、採取には事欠かない。このため金雲母を混和材に使用した黒色土器類は、在地産と考えられる。

また、円面鏡・転用鏡・習書・墨を溜めたと見られる墨痕の残る土器など、文字に関連した遺物が目立つ。特に円面鏡は一般集落では使用されないと考えられるものである。墨書き土器・刻書き土器は36点出土した。字種は吉祥句と見られるものが最も多く、人名をうかがわせるものも4点出土している。中でも黒色土器の底面に刻書きされた「王仁」は、所有者名を記している可能性がある。この土器は仏器を模倣したものと考えられ、日常の器とは異なる。このほか、北陸系の祭祀容器である鳥形須恵器片や、猿投産の灰釉陶器片など、特殊な器が出土している点が特記される。これらが溝の上流である北側から流れてきたものであるなら、調査区北側にあたる古代の区画域内には、官衙関連の何らかの施設があったことが考えられる。

上記 S D11溝跡とはやや主軸の異なる S D54・76溝跡からも、9世紀前半から半ば過ぎの遺物が多く出土している。そして、これら2つの溝跡を切って、S G 2川跡が流れ下っている。覆土や遺物の様相から、S G 2川跡は常に流れていた河川ではなく、9世紀後半頃に発生した洪水時の流路跡と推定される。古代で1軒だけ見つかった S T 1堅穴住居跡も、この S G 2川跡とほぼ同時期のものと考えられる。

### (3) 近世・近代の様相

古代が過ぎると、近世に至るまでしばらく遺構が検出されない時期がある。平面的には、A区の平安時代の溝跡群から西方約30m間は遺構がなく、西端部に近世の溝跡が1条だけ検出された。平坦な底面と断面形から、箱掘か水路と推測される。遺物は少なく、用途不明である。

近世の墓坑群は、南北方向の農道に沿って分布している。明治6年に墓地が決められるまで、近世墓坑群は、それぞれの畑に埋葬されていたらしく、家ごとに4カ所程のまとまりが確認されている。そのうちの1基から、1.2mほどの深さで、薄いマツ材を縦に組んだ木棺が検出された。

また、庚申塔は4基残存する。B区南西角の農道沿いにあったものである。庚申塔は村の境界付近に立てられることが多いとされる。文化二年の長瀬村絵図（第5図）を見ても、この当時、村の中心は、調査区の南東方向にあったことが読みとれる。そして、それ以降大きな変動もなく、現在に至っている。

9世紀前半

官衙関連施設

## 註

- 1) 通跡周辺の地形形成過程（第7図を含む）と、S G35覆土とV層の堆積状況などの古環境推定は、植木真吾氏による。
- 2) ST40の柱構造や平面形の名称、S B45の上屋構造などについては、現地にて宮本長二郎氏より教示を受けた。
- 3) 石墨状品については、類例等を含め大賀克彦氏より教示を受けた。
- 4) 墓者は刻畫文字の証文は、三上善孝氏による。文字彙叢資料全般については村木志伸氏の教示を得る。
- 5) 形状の名稱については宮本長二郎氏より教示を受けた。
- 6) 吉田秀享氏は出土遺物の様相から八幡山遺跡とは同時期としている。
- 7) 時代別の居住の配置については吉田秀享氏の教示を受けた。
- 8) 石川由夫氏は、頸胴部界への施文や刺突文の退化などから湯舟沢併行との編年案を作成した。
- 9) 宮本長二郎氏は柱穴間の「不直い」は一般的にされていたとし、故意に不均等にしている例もあるとする。

## 参考・引用文献

- 相沢清利 2003 「東北地方における弥生後期の土器様相」「古代文化」  
会津坂下町教育委員会 1995 「柱が森古墳」(会津坂下町文化財調査報告書第33集)  
青森県教育委員会 2003 「畠内遺跡Ⅱ」(青森県埋蔵文化財調査報告書第345集)  
秋田県教育委員会 2005 「厨谷地遺跡」(秋田県文化財調査報告書第383集)  
阿部明彦 吉田江美子 2004 「出羽の土師器とその編年」「出羽の古墳時代」古志清院  
一迫町教育委員会 1978 「上ノ原A遺跡」「宮城県一迫町文化財調査報告書第3集」  
猪狩忠雄 2000 「福島県における弥生後期の土器編年」「東日本弥生後期の土器編年」  
東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会  
いわき市教育委員会はか 1972 「伊勢林前遺跡」(いわき市埋蔵文化財調査報告書第1冊)  
いわき市教育委員会はか 1985 「愛谷遺跡」(いわき市埋蔵文化財調査報告書第12冊)  
いわき市教育委員会はか 1994 「上ノ内遺跡」(いわき市埋蔵文化財調査報告書第38冊)  
いわき市教育委員会はか 2001 「荒田目条里遺跡」(いわき市埋蔵文化財調査報告書第75冊)  
いわき市教育委員会はか 2002 「横谷古墳群」(いわき市埋蔵文化財調査報告書第82冊)  
いわき市教育委員会はか 2006 「足追遺跡」(いわき市埋蔵文化財調査報告書第115冊)  
いわき市教育文化事業団 1980 「八幡台遺跡」(いわき市埋蔵文化財調査報告書第5冊)  
小林正史 1999 「煮炊き用土器の作り分けと使い分け」「食の復元－遺跡・遺物から何を読みとるか」  
帝京大学山梨文化財研究所  
佐藤裕宏 2000 「陶祓と出羽国南半の古代」「山形考古第6巻第4号」山形考古学会  
神野惠・川越俊一 2003 「平城京出土の陶瓦」「古代の陶瓦をめぐる諸問題」(奈良文化財研究所)  
高畠町教育委員会 1997 「町内遺跡発掘調査報告書(3)」(山形県高畠町埋蔵文化財調査報告書第5集)  
流沢村教育委員会 1986 「湯舟沢遺跡」(流沢村教育委員会文化財調査報告書第2集)  
竹島国基 1992 「桜井」(竹島コレクション考古園古3集)  
辻秀人はか 1984 「門戸遺跡発掘調査概報」福島県教育委員会  
辻秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年」「東北学院大学論集」27号  
寺村光晴 1980 「古代玉作形成史の研究」吉川弘文館  
南陽市史編さん委員会 1987 「南陽市史 考古資料編」南陽市  
南陽市史編さん委員会 1987 「南陽市史 民俗編」南陽市  
西村真次 1938 「匱乏地方の古代文化」  
原町市教育委員会 2003 「原町市考古学研究会 第四巻資料編Ⅱ古代出土文字資料」  
法政大学文学部考古学研究室 1985 「本屋敷古墳群の研究」(法政大学文学部考古学研究報告第1冊)  
村木志伸 2005 「黒土器の考古学的分析」「第3回東北文字資料研究会資料」  
望月精司 2001 「須恵器の製作痕跡と成形方法」「北陸古代土器研究」第9号  
山形県・山形県教育委員会 1981 「下横道遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第39集)  
山形県・山形県教育委員会 1987 「生石2遺跡発掘調査報告書(3)」「山形県埋蔵文化財調査報告書第117集)  
山形県埋蔵文化財センター 1994 「山橋3・4・5遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター4集)  
1994 「今塚遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター7集)  
山形県埋蔵文化財センター 1998 「北日長田遺跡第3次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第56集)  
山形県埋蔵文化財センター 2001 「三条遺跡第2・3・3次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第93集)  
山形県埋蔵文化財センター 2001 「太夫小屋1・2・3遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第81集)  
山形県埋蔵文化財センター 2004 「氷江遺跡第2・3・3次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第124集)  
山形県埋蔵文化財センター 2005 「向河原遺跡第5・6次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第141集)  
吉田江美子 2004 「鳥形須恵器について」「山形考古第7巻第4号」山形考古学会  
水戸市史編さん委員会 1963 「水戸市史 上巻」  
吉野文化研究会 1996 「吉野川をさぐる」「吉野文化資料(16)」  
米沢市教育委員会 1981 「徳原遺跡」(米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集)  
米沢市教育委員会 1993 「大浦B遺跡発掘調査報告書」(米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集)  
渡邊朋和はか 2001 「八幡山遺跡発掘調査報告書」(新津市教育委員会)

## 写真図版

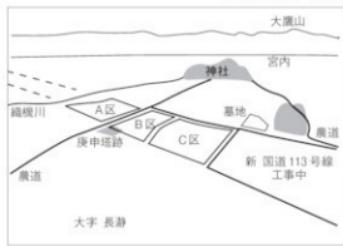
---



S T40堅穴住居跡 調査風景



調査区近景（南から）



調査前状況（東から）



A・B区基本層序（北西から）



C区基本層序（東南から）



完掘状況。A・B区完掘写真にC区を合成（上が西）



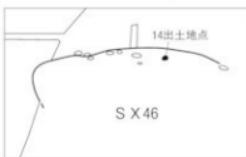
C区北半完掘状況（西から）



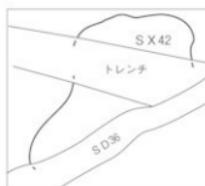
縄文時代、S X 46性格不明遺構完掘状況（東から）



14出土状況（南から）

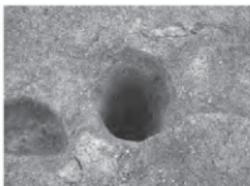


S X 42性格不明遺構完掘（南から）

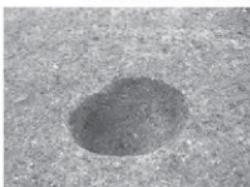




弥生時代、S T 40竪穴住居跡、床面と33（北西から）



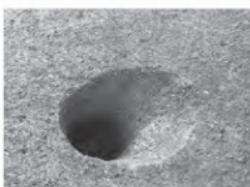
EP39北東主柱穴（南から）



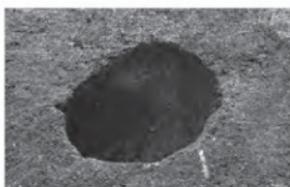
EP40北西主柱穴（北から）



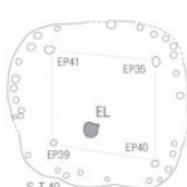
同上完掘状況（下が北）



EP35南西主柱穴（東から）



EP41南東主柱穴土層断面（北から）





S T 40南東の壁柱穴（北から）



S T 40南西の壁柱穴（西から）



S T 40北東の壁柱穴（東から）



S T 40北西の壁柱穴（北から）



S T 40地床炉完掘（北東から）



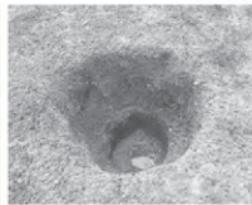
柱穴の土壤採取状況（南から）



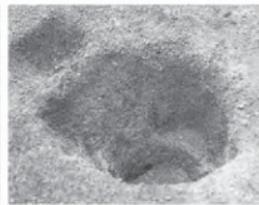
古墳時代、S B 44 振立柱建物跡完掘状況（西から）



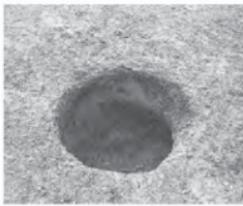
S B 44 E B 1 柱穴（北から）



E B 2 柱穴（北から）



E B 3 柱穴（北から）



E B 4 柱穴（南から）



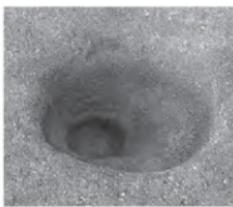
E B 5 柱穴（南から）



E B 6 柱穴（南から）



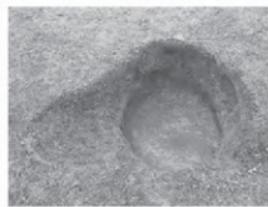
古墳時代、S B 45 振立柱建物跡完振状況（南から）



S B 45 E B 1 柱穴（東から）



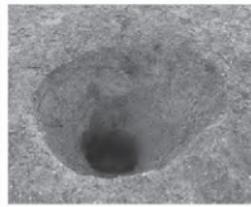
E B 2 柱穴（東から）



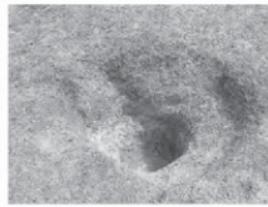
E B 3 柱穴（東から）



E B 4 柱穴（西から）



E B 5 柱穴（北から）



E B 6 柱穴（西から）



S D 43溝跡完掘状況（東から）



S D 36溝跡南側完掘状況（南から）



S K 38土坑土層断面（南から）



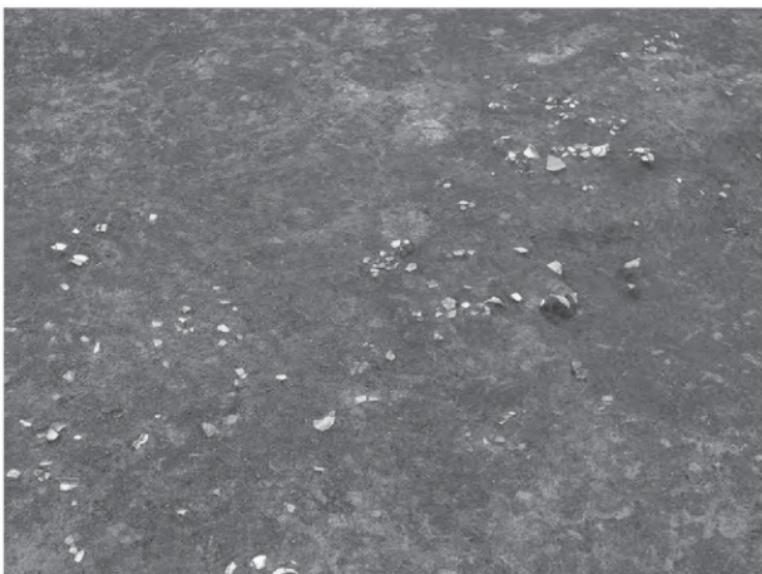
S D 36溝跡土層断面（北西から）



S K 39土坑土層断面（西から）



S G 35川跡岸部土層断面（東から）



縄文～古墳時代遺物包含層の出土状況（東南から）



Va層、54出土状況（東から）



Va層、38・52出土状況（北東から）



Va層, 20出土状況（西から）



Va層, 40出土状況（南から）



Va層, 24出土状況（北西から）



Va層, 42出土状況（東から）



Va層, 45出土状況（北から）



Va層, 53出土状況（東から）



Va層, 49 (RP 3) 出土状況（南から）



Va層, 70出土状況 (北から)



Va層, 58出土状況 (北から)



Va層, 72出土状況 (南東から)



Va層, 288出土状況 (東から)



Va層, 64出土状況 (北から)



Vb層, 300出土状況 (北から)



A・B区奈良・平安時代、完掘状況（東から）



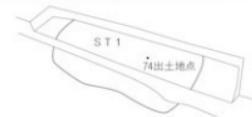
B区完掘状況（東から）



平安時代、ST 1 穫穴住居跡発掘（北西から）



ST 1 土層断面（北西から）



調査風景（西から）



ST 1、74出土状況（北東から）



奈良・平安時代、A区東部全景（北から）



S D 56溝跡中央部遺物出土状況（北から）



S D 56溝跡南側遺物出土状況（北から）



奈良・平安時代、S D 56溝跡土層断面（北から）



S D 56, 198出土状況（西から）



S D 56, 191・222出土状況（北から）



S D 56, 174・225・226・238出土状況（北から）



S D 56, 176出土状況（北から）



S D 56, 192出土状況（東から）



S D 56, 208出土状況（北から）



奈良・平安時代、A区中央部全景（北から）



SD 76・54溝跡、SG 2川跡（北東から）



SD 76・SG 2交差部分遺物出土状況（南から）



SD 54・SG 2交差部分（北西から）



S D76, 147円面観 115・121出土状況（北西から）



S D76, 124出土状況（北から）



S D76, 137出土状況（西から）



S D76, 117出土状況（北から）



S G2, 89出土状況（北西から）



S D54, 106出土状況（北から）



S G2, 93出土状況（北西から）



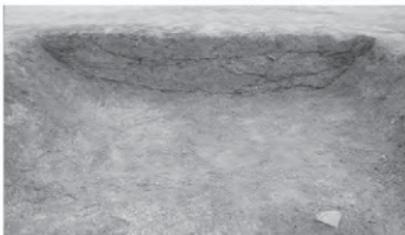
S G2, 98出土状況（西から）



奈良・平安時代、S D 11区画溝跡（北から）



S D 11屈曲部と西侧部分（北東から）



S D 11土層断面と248出土状況（南から）



S D 11北側遺物出土状況（北から）



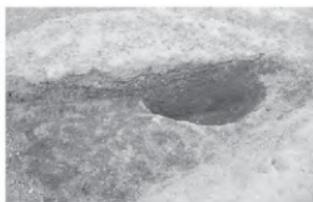
254出土状況（北から）



250出土状況（西から）



奈良・平安時代。SD27・28・63溝跡完掘（北東から）



SK16土坑土層断面（南西から）



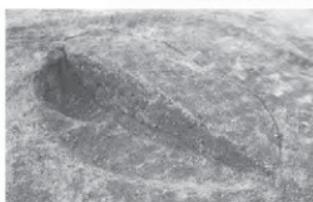
SK17土坑土層断面（南から）



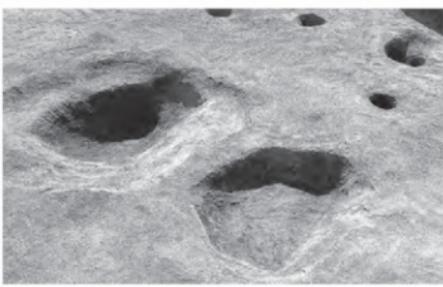
SD10溝跡とSK16・17・19土坑完掘（南から）



SK19土坑土層断面（南西から）



SK23土坑土層断面（北東から）



SK20・61土坑完掘（北東から）



SK69土坑土層断面（南東から）



SD 8 溝跡土層断面（南東から）



近世 SD 8 溝跡完掘（北から）



近世 SH 9 墓坑土層断面（南西から）



同左，木棺底板骨検出状況（南から）



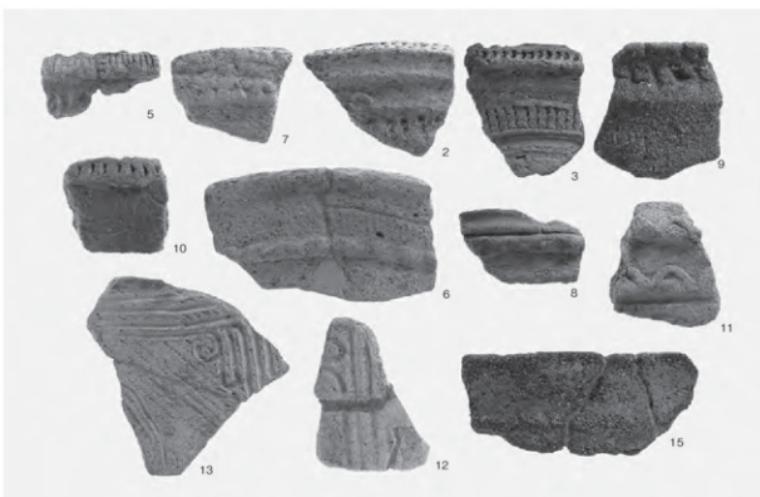
近世、庚申塔 A ~ D



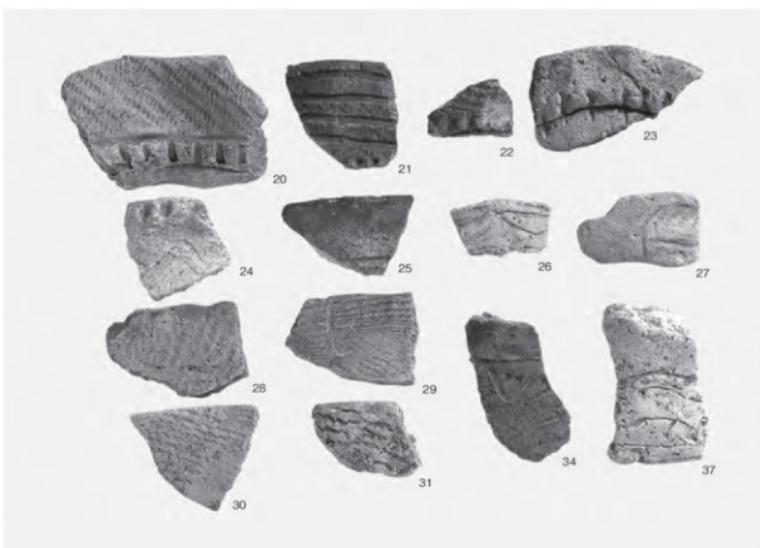
庚申塔 A 記銘



庚申塔 C · D



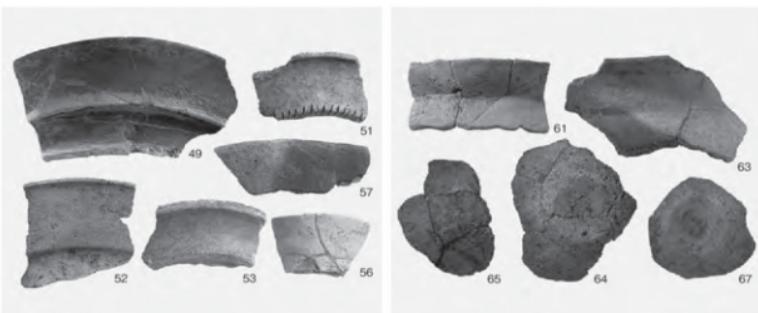
绳文土器



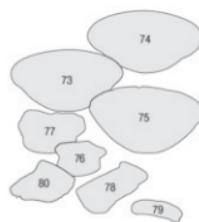
弥生土器



古式土師器



古式土師器



73



75



74



76



77



81



84



83



85



86



87



89



90



92



93

SG 2 川路出土土器

写真図版27



91



95



96



94



97



99



104

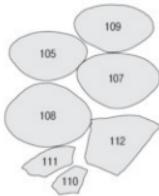
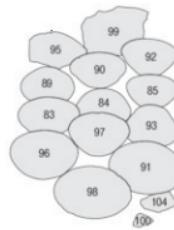


103

S G 2 川路出土土器



S G 2 川跡出土土器



S D 54 溝跡出土土器



105



113



106



114



107



115



108



116



109

S D 54溝跡出土土器 (105~109)

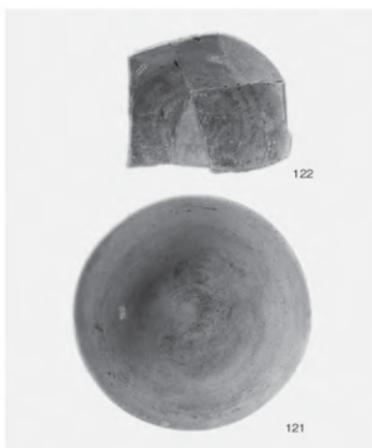


117

S D 76溝跡出土土器 (113~117)



118



122

121



120



121



123



124

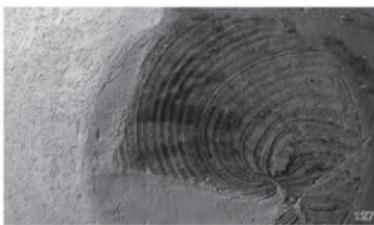


125



126

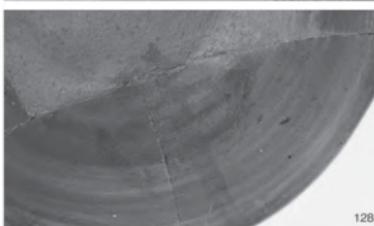
SD 76満路出土土器



127



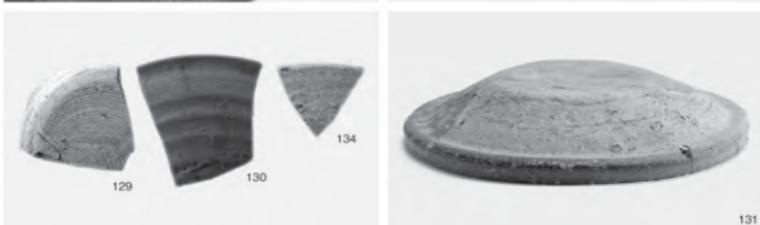
127



128



128



129

130

131



132

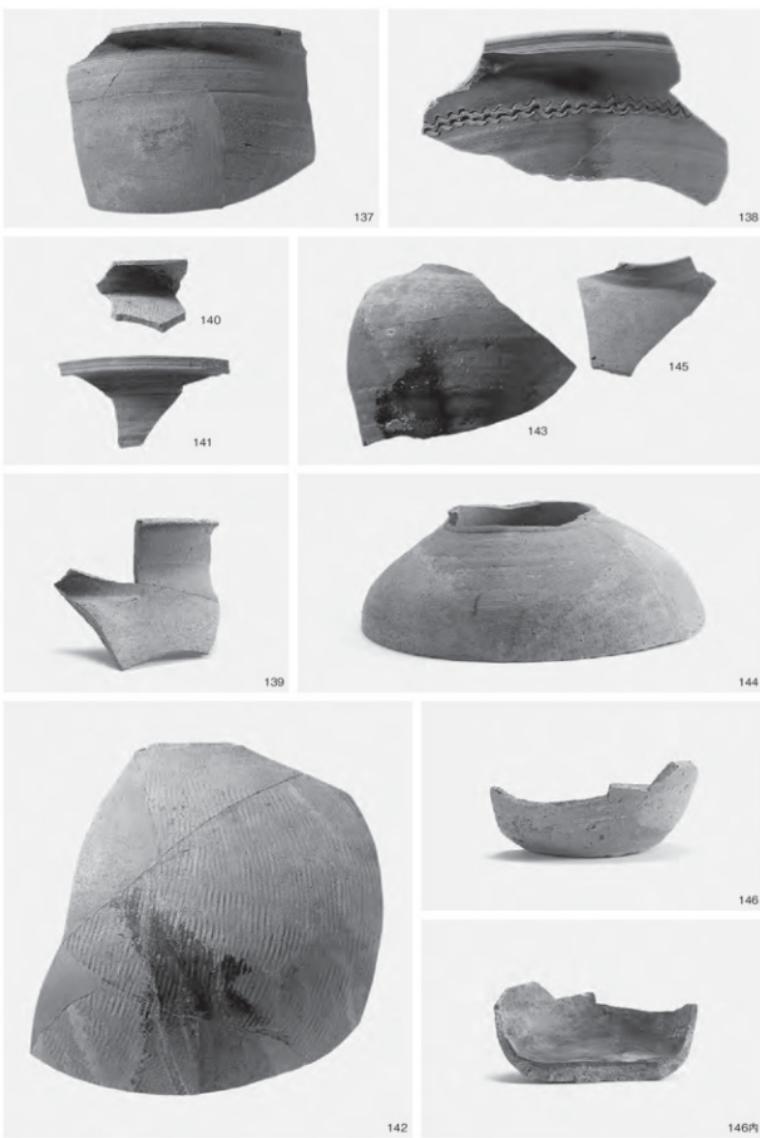
133



135

136

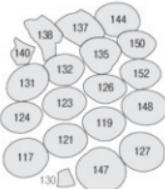
SD 76 满路出土土器



SD 76溝跡出土土器



SD 76溝跡出土土器



S D 76溝跡出土土器



164



165



166



167



168



169



170



171



172



173

S D 56溝跡出土土器



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183

SD 56溝跡出土土器



184



185



186



187



188



189



190



191



192



194

SD 56 满路出土土器



196



197



198



199



202



206内



200



204

205



201



193

195

203

SD 56溝跡出土土器



207



210



208



211



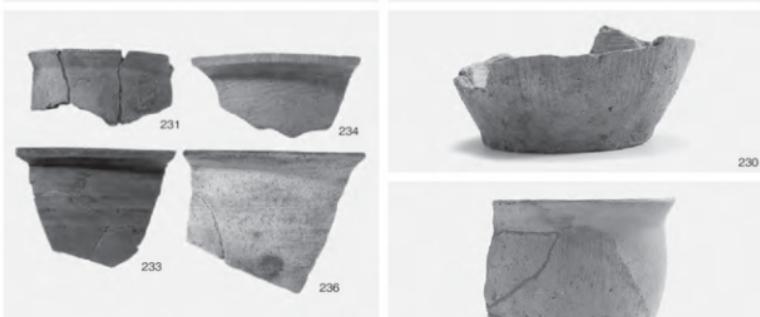
209

209  
内面底部断形圖

S D 56溝跡出土土器



S D 56溝跡出土土器



S D 56溝跡出土土器



242



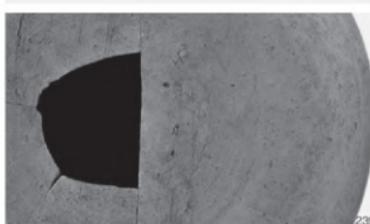
244



243



239



239



240



245



241



246



247

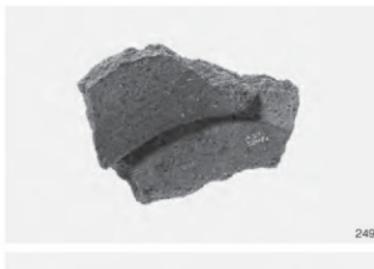


248

SD11溝路出土土器



251



249



250



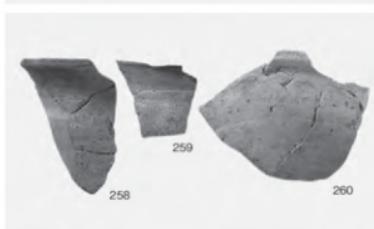
252



253



255



259

260

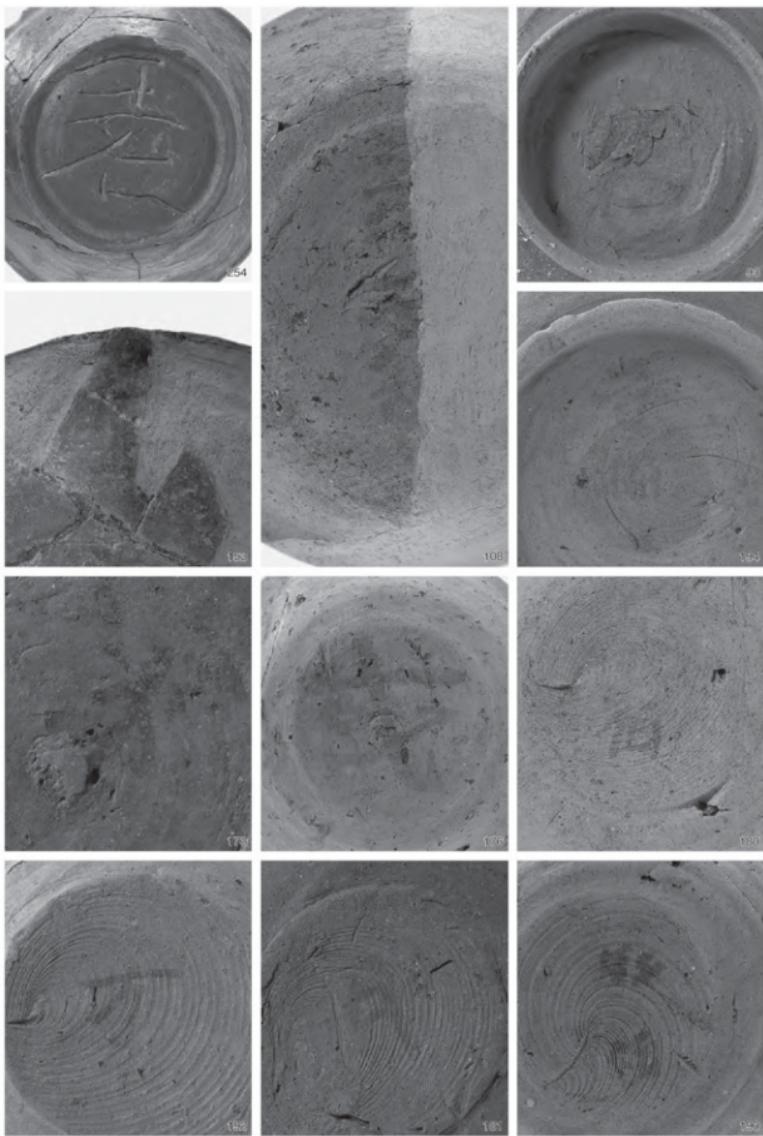


257

256



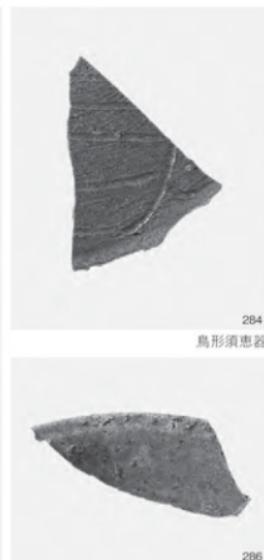
SD 8·10·27·28溝跡, SK 16·20·61·69土坑出土土器



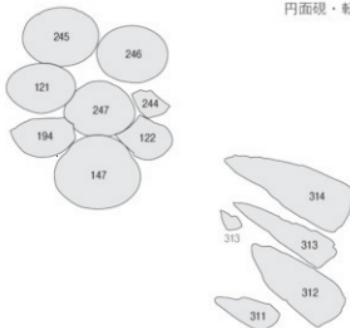
墨書土器



円面規・転用梗・墨痕のある土器



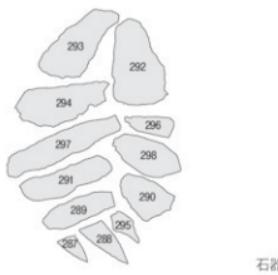
284  
鳥形須恵器  
286  
灰釉陶器



金属製品 (左316 右315)



S B45据立柱建物柱材



石器・石製品

## 報告書抄録

ふりがな	かのえだんいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	庚墳遺跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第161集						
編著者名	押切智紀 須賀井明子						
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発行年月日	2007年3月28日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村					
かのえだんい 庚墳遺跡	やまがたけん 山形県 南陽市 おおひでじやうし 大字長瀬	6213	平成8年度 新規登録	38度 3分 16秒	140度 7分 32秒	20050511 20051101	一般国道 113号赤湯 バイパス 改築工事
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
集落跡	縄文時代	堅穴住居跡 1	縄文土器・石器・			県内で2例目となる 弥生時代後期の堅穴 住居跡を検出。 奈良・平安時代の溝 跡から、須恵器・土 師器・墨書き土器など がまとまって出土し た。 (文化財認定箱数: 51)	
	弥生時代	掘立柱建物跡 2	弥生土器・				
	古墳時代	性格不明遺構 2	古式土師器・管玉ほか				
		溝跡・土坑・川跡ほか					
		奈良・ 平安時代 近世	堅穴住居跡 1 溝跡 19 川跡 1 土坑・墓坑・柱穴ほか	須恵器・土師器・黒色 土器・円面鏡・墨書き 土器・刻書き土器・石製品・ 陶器・金属製品ほか			

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集

## 庚塙遺跡発掘調査報告書

2007年3月28日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷 株式会社  
〒990-2251 山形県山形市立谷川三丁目1410-1  
電話 023-686-6111